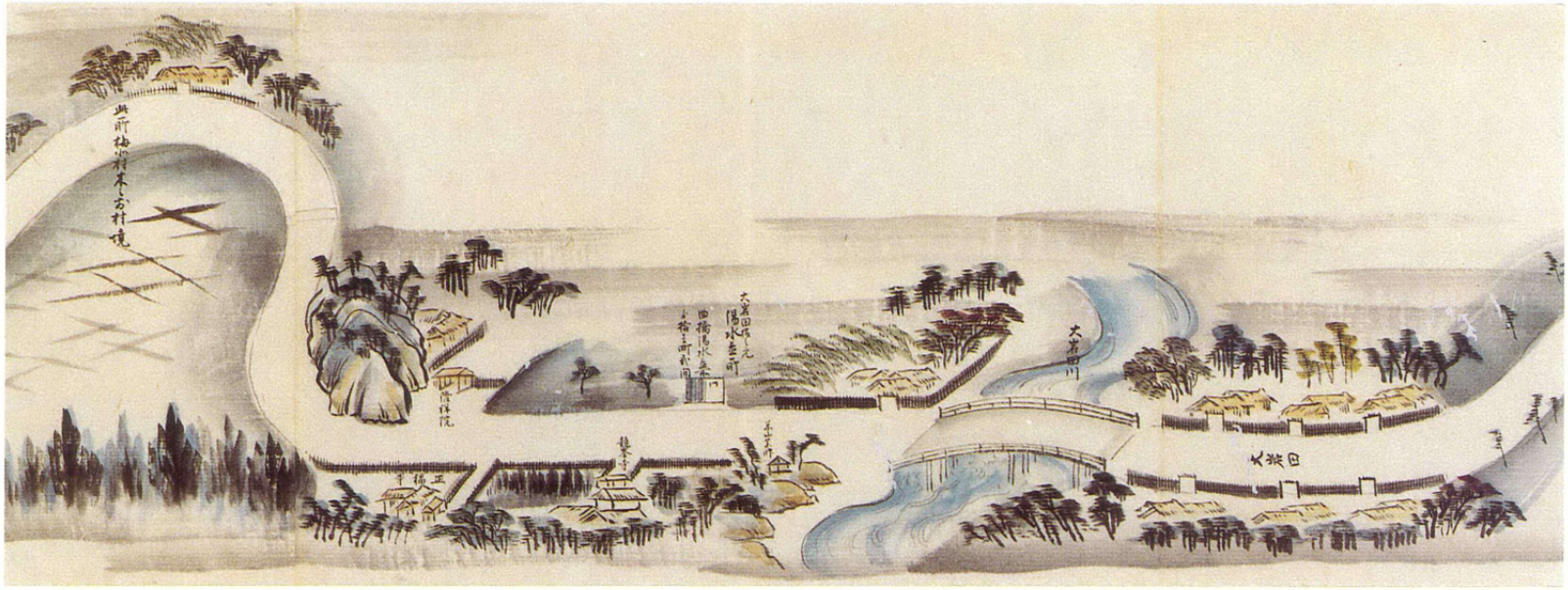
都城市文化財調査報告書　第14集

大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書

1991

都城市教育委員会

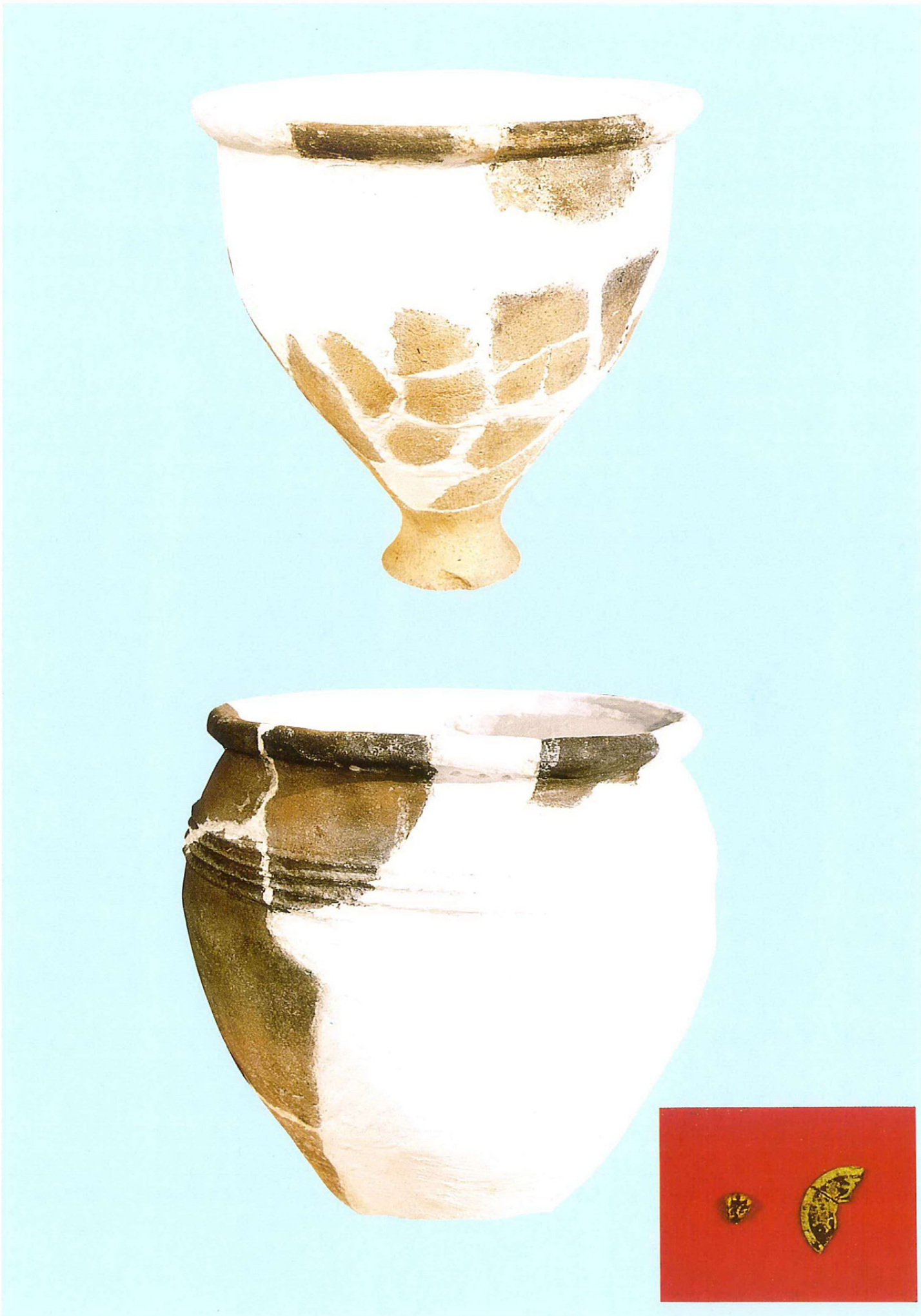
口絵１　大岩田村ノ前遺跡遠景航空写真（西上空より）



口絵２　徳川幕府巡見使道筋之図 部分　（天保９年成立　都城島津家所蔵）

口絵３　SC1および包含層出土の縄文式土器・石器類

口絵４　ＳＣ２出土の弥生式土器



口絵５　ＳＣ３出土の弥生式土器、ＳＦ１出土の銭貨・人歯

序

都城市文化財調査報告書第14集をここに刊行いたします。

本遺跡の発掘調査は，都城市斎場建設事業の施工に伴い実施したもので，都城市教育委員会が都城市健康課の依頼を受けて行った遺跡調査の成果です。

調査は本市文化財専門員重永卓爾氏が担当され，調査の計画から実施，更に報告書の作成にわたり全面的なご協力をいただき，深く謝意を表するものであります。

また，調査に際しましては，地元公民館長をはじめ，発掘作業に従事していただいた地元の方々にご協力を賜わり，心からお礼を申しあげます。

遺跡からは，縄文・弥生・中世の遺構や遺物が発見されておりますが，中でも縄文・弥生時代の住居址，同じく道路状遺構，中世の同状遺構は貴重であり，本資料が当地方の歴史解明のため，学術研究資料としてご活用していただければ幸いに存じます。

平成３年３月

都城市教育委員会

教育長　久味木　福　市

例　　言

1．本書は都城市斎場建設工事に伴う，大岩田村ノ前遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査に関わる要目は，下表のとおりである。

遺跡調査番号	５０３０
調査地番	都城市大岩田町5449他６筆
調査実施面積	４，５００㎡
調査期間	昭和63年９月10日～12月７日

註：遺跡番号は「市内遺跡詳細分布調査」に依る。

3．報告書に使用した方位は，すべて真北である。

4．遺構の記号は，福岡市使用のそれに準拠した。

ＳＣ：竪穴状遺構　ＳＤ：溝状遺構　ＳＦ：道路状遺構　ＳＫ：土坑

5．発掘調査，本書の執筆に際し次の各氏の御指導や協力を得た（順不同，敬称略）。

小片丘彦（鹿児島大学歯学部口腔解剖学教授）　山峯和治（同助教授）
河口貞徳（鹿児島県考古学会会長）　大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）
石川悦雄（宮崎県文化課主任主事）　成尾英仁（玉竜高校教諭）
前迫亮一（阿久根中学校教諭）　矢部喜多夫（都城市文化課主事）
桒畑光博（　同　）　大盛祐子

6．本書に掲載の遺構・遺物の実測・製図・写真撮影は，重永・持永がそれぞれ分担して行ない，遺物の室内撮影には遠矢が当たり，執筆編集は重永が担当したが，Tab５・６，ＩＶの(１)・(２)・(３)は桒畑の作成執筆に依る。

7．本遺跡に関する写真・記録類・出土遺物のすべては，都城市教育委員会に収蔵し保管している。

8．発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体　都城市教育委員会
調査責任者　都城市教育長　久味木福市
調査事務局　都城市教育委員会
社会教育課　課　長　村中日出男
同　課長補佐　中島　康男
同　文化係長　遠矢　昭夫
同　主　事　福丸　謙二
調査担当　都城市文化財専門員　重永　卓爾
調査補助員　持永　勝美
調査協力者　青山キミエ・稲森サエ子・川野セツ子・鎌田　伝・熊本トシ子
坂下豊子・曽原近良・田中アヤ子・田中光秋・福丸梅代・福丸貞行
福丸セツ子・福丸マサエ・福丸ユキ子・日置千枝美・平川千枝子
細山田　登・松留義昭・松永幸一・松永三郎・柳橋ミサ子

本 文 目 次

Ⅰ．調査経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
Ⅲ．発掘調査の記録 …… 4
　１．層　序 …… 5
　２．縄文時代の遺構と遺物 …… 9
　　(1)　Ｐｉｔ群（ＳＰ） …… 9
　　(2)　１号竪穴状遺構（ＳＣ１） …… 10
　　(3)　土坑（ＳＫ１・２） …… 12
　３．弥生時代の遺構と遺物 …… 13
　　(1)　２号竪穴状遺構（ＳＣ２） …… 13
　　(2)　３号竪穴状遺構（ＳＣ３） …… 18
　４．道路状遺構 …… 23
　　(1)　１号道路状遺構（ＳＦ１） …… 23
　　(2)　２・３・５号道路状遺構（ＳＦ２・３・５） …… 33
　　(3)　４号道路状遺構（ＳＦ４） …… 33
　　(4)　６号道路状遺構（ＳＦ６） …… 34
　５．包含層出土の縄文・弥生・古墳・歴史時代の遺物 …… 36
　　(1)　縄文土器 …… 36
　　(2)　弥生土器・その他の土製品 …… 40
　　(3)　古墳時代の土器 …… 43
　　(4)　古代中世の土器・舶載磁器 …… 44
　　(5)　近世の国産陶磁器 …… 48
　　(6)　石 器 類 …… 51
　　(7)　金属器類 …… 54
Ⅳ．小　結 …… 55
　１．包含層・遺構内出土の縄文土器について …… 55
　２．遺構内出土の弥生土器について …… 56
　３．包含層出土の弥生土器について …… 57
　４．桜島に起源を有する文明Tephraの年次について …… 59
　５．日向国における古代・中近世の道路状遺構をめぐる諸問題 …… 61

図 版 目 次

口絵１　大岩田村ノ前遺跡遠景航空写真（西上空より）
口絵２　徳川幕府巡見使道筋之図部分（天保９年成立　都城島津家所蔵）
口絵３　ＳＣ１および包含層出土の縄文式土器・石器類
口絵４　ＳＣ２出土の弥生式土器
口絵５　ＳＣ３出土の弥生式土器，ＳＦ１出土の銭貨・人歯
ＰＬ．１　Ⅰ区ＳＰ・ＳＣ２・ＳＦ１完掘状況
ＰＬ．２　Ⅱ区ＳＰ・ＳＣ２・ＳＦ１完掘状況
ＰＬ．３　Ⅲ区ＳＰ・ＳＣ１・ＳＦ１～５完掘状況
ＰＬ．４　Ⅳ区ＳＰ完掘状況
ＰＬ．５　包含層遺物の出土状況（上：４－１区，中：５－７区，下：０－14区）
ＰＬ．６　ＳＣ１Ｐｉｔ内縄文式土器の検出，ＳＣ１完掘状況（東より）
ＰＬ．７　ＳＣ２Ｐｉｔの検出，遺物の出土状態
ＰＬ．８　ＳＣ２内遺物の出土状況
ＰＬ．９　ＳＣ２Ｐｉｔ内遺物の検出状況
ＰＬ．10　ＳＣ２Ｐｉｔの実測，同完掘状況（西より）
ＰＬ．11　ＳＣ３遺物の出土状況，同Ｐｉｔの検出状態（北より）
ＰＬ．12　ＳＣ３の完掘状況（上：南より，下：西より）
ＰＬ．13　ＳＦ２（上），ＳＦ５・４土層断面（西より）
ＰＬ．14　ＳＦ６・７・８検出状況（上：西より，下：北西より）
ＰＬ．15　ＳＦ１覆土の須恵質陶器・Ｐｉｔ列の検出状況（上：南西より，下：北東より）
ＰＬ．16　ＳＦ１土層断面（上：６－１区，下：０－７区南西より）
ＰＬ．17　ＳＦ１完掘状況（南西より）
ＰＬ．18　ＳＣ１出土の縄文式土器（１：２）
ＰＬ．19　ＳＫ２西縁出土の縄文式土器（１：２）
ＰＬ．20　ＳＣ２出土の弥生式土器（１：２）１
ＰＬ．21　ＳＣ２出土の弥生式土器２
ＰＬ．22　ＳＣ２出土の弥生式土器３
ＰＬ．23　ＳＣ３出土の弥生式土器（１）
ＰＬ．24　ＳＣ３出土の弥生式土器（２）
ＰＬ．25　ＳＣ３出土の弥生式土器（３）
ＰＬ．26　ＳＦ１出土の縄文・弥生式土器（上），ＳＦ６出土の縄文式土器（１：２）
ＰＬ．27　ＳＦ１出土の須恵・土師質土器（１：２）
ＰＬ．28　ＳＦ１出土の舶載磁器・近世在地系陶器（１：２）
ＰＬ．29　ＳＦ１出土の石器類・銭貨・人歯（１：２～１：１）

ＰＬ．30　包含層出土の縄文式土器（１：２）
ＰＬ．31　包含層出土の縄文式土器（１：２）
ＰＬ．32　包含層出土の縄文式土器（１：２）
ＰＬ．33　包含層出土の弥生式土器（１：２）
ＰＬ．34　包含層出土の弥生式土器（１：２）
ＰＬ．35　包含層出土の土製品・古墳時代の土器（１：２）
ＰＬ．36　包含層出土のカワラケ・須恵器（１：２）
ＰＬ．37　包含層出土の舶載磁器（１：２）
ＰＬ．38　包含層出土の舶載磁器（１：２）
ＰＬ．39　包含層出土の近世国産磁器（１：２）
ＰＬ．40　包含層出土の近世在地系陶器（１：２）
ＰＬ．41　包含層出土の石器類（１：１）
ＰＬ．42　包含層出土の石器類（１：２）
ＰＬ．43　包含層出土の石器類（１：２）
ＰＬ．44　包含層出土の金属器類（１：１）

挿　図　目　次

Ｆig.　1　大岩田村ノ前遺跡位置図（１：10,000）…… 2
Ｆig.　2　大岩田村ノ前遺跡調査区および遺構分布図（1：500）…… 4
Ｆig.　3　大岩田村ノ前遺跡土層断面（カラー）…… 5
Ｆig.　4　東西方向南壁土層断面図 …… 6～8
Ｆig.　5　南北方向東壁土層断面図 …… 6～8
Ｆig.　6　Ⅱ区遺構平面図 …… 9
Ｆig.　7　Ⅲ区遺構平面図 …… 9
Ｆig.　8　ＳＣ１平面・断面図 …… 10
Ｆig.　9　ＳＣ１出土の縄文式土器 …… 11
Ｆig.　10　ＳＫ２西縁出土の縄文式土器 …… 12
Ｆig.　11　ＳＣ２平面・断面図 …… 13
Ｆig.　12　ＳＣ２出土の弥生式土器（１）…… 15
Ｆig.　13　ＳＣ２出土の弥生式土器（２）…… 16
Ｆig.　14　ＳＣ２出土の弥生式土器（３）…… 17
Ｆig.　15　ＳＣ３平面・断面図 …… 18
Ｆig.　16　ＳＣ３北壁土層断面図 …… 19

Fig. 17　ＳＣ３出土の弥生式土器（１）…… 20
Fig. 18　ＳＣ３出土の弥生式土器（２）…… 21
Fig. 19　ＳＣ３出土の弥生式土器（３）…… 22
Fig. 20　ＳＦ１南西壁堆積土層断面図 …… 23
Fig. 21　ＳＦ１平面図・縦断面図 …… 24～26
Fig. 22　ＳＦ１出土の縄文・弥生式土器 …… 28
Fig. 23　ＳＦ１出土の須恵・土師質土器 …… 29
Fig. 24　ＳＦ１出土の舶載磁器・近世陶器 …… 30
Fig. 25　ＳＦ１出土の石器類・銭貨・人歯 …… 31
Fig. 26　ＳＦ２～５，ＳＫ１・２平面図 …… 33
Fig. 27　ＳＦ２～５西壁土層断面図 …… 33
Fig. 28　ＳＦ６平面・縦断面，ＳＦ７・８平面図 …… 34
Fig. 29　ＳＦ６～８北壁土層断面図 …… 34
Fig. 30　ＳＦ６出土の縄文式土器 …… 35
Fig. 31　包含層出土の縄文式土器（１）…… 37
Fig. 32　包含層出土の縄文式土器（２）…… 38
Fig. 33　包含層出土の縄文式土器（３）…… 39
Fig. 34　包含層出土の弥生式土器（１）…… 41
Fig. 35　包含層出土の弥生式土器（２）…… 42
Fig. 36　包含層出土の土製品・古墳時代の土器 …… 43
Fig. 37　包含層出土のカワラケ・須恵器（１：１） …… 45
Fig. 38　包含層出土の舶載磁器（１）…… 46
Fig. 39　包含層出土の舶載磁器（２）…… 47
Fig. 40　包含層出土の国産近世磁器 …… 49
Fig. 41　包含層出土の在地系近世陶器 …… 50
Fig. 42　包含層出土の石器類（１）…… 51
Fig. 43　包含層出土の石器類（２）…… 52
Fig. 44　包含層出土の石器類（３）…… 53
Fig. 45　包含層出土の金属器類 …… 54

表　目　次

Tab. 1　ＳＦ１出土遺物一覧表（1）

Tab. 2　ＳＦ１出土遺物一覧表（2）

Tab. 3　道路状遺構（ＳＦ）一覧表

Tab. 4　ＳＦ１～８，ＳＤ１主軸方向模式図

Tab. 5　包含層出土の縄文式土器一覧表

Tab. 6　包含層出土の弥生式土器一覧表

Tab. 7　包含層出土の古代・中世土器・舶載磁器一覧表

Tab. 8　包含層出土の近世国産陶磁器一覧表

Tab. 9　包含層出土の石器類一覧表

Tab. 10　文明期に於ける桜島噴火に関する古文献一覧表

Tab. 11　基底部にPit列を有する道路状遺構の掘形諸類型

Ⅰ．調査経過

大岩田村ノ前遺跡は，都城市斎場建設に先だって，昭和63年８月２・３日の二日間，矢部喜多男（本市社会教育課文化係主事）に依って試掘調査が実施された。同年９月８日，本市教育委員会より筆者に，同遺跡の発掘調査の委嘱要請があり，これを担当することとなった。

試掘の報告では，「同遺跡に２×２ｍのトレンチを三ケ所設置。第１トレンチより白ボラを埋土とし，東西方向に走行する溝状遺構が検出され，青磁片１点が出土。また第２トレンチよりは，弥生時代前期の土器片が御池ボラ層直上で，かなりまとまった状態で検出。遺構の確認はできなかったが，周辺には住居跡が存在するのではないかと考える。また弥生前期と14～15世紀の二つの包含層（文化層）が存在」したとのことで，この試掘に基づき，記録保存の措置をとることとなり，昭和63年９月10日より発掘作業を開始し，同年12月７日に終了した。

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境

都城盆地は南九州に於ける構造的低地帯で，宮崎県の南西部に位置する。その東部には鰐塚山地の断層崖，西側を南北に地塁状の瓶台・白鹿岳が続き，その間に挟まれた地溝状の凹地を造る。北西部は霧島火山が聳え，北部は新生代第３紀四万十累層群上部の丘陵に囲繞される。そして盆地の中心を大淀川が北流し，東側より萩原川・沖水川が，西よりは庄内川などの支流が合流して，広い沖積地を構成している。

地史的に見ると，四万十累層群の隆起後に陥没が起こり，山間の低地はやがて山間湖と化し，湖底には砂礫が厚く堆積した。また阿多・加久藤・姶良などの火砕流や礫・砂・泥からなる地層で埋められた。この間，新第三期鮮新世には，盆地西側の長尾山・丸山・高之峯・母智丘付近で安山岩質溶岩が噴出する。洪積世になると，姶良火山噴出物である入戸火砕流（シラス・石灰層）が，山間湖を埋めて行き，浅湖にはさらに周囲の山地より砂礫・シラスが流入し，水成２次シラス（砂・シラス・粘土の瓦層）が堆積した。その後に大淀川の頭部浸蝕が盆地の北端に達して，狭隘部に観音瀬が穿たれ湖水は次第に排水が進捗して行った。このようにして，浅くなった湖底は幾つかの開析谷を造り，やがて台地・河岸段丘・扇状地などが形成された。

盆地の東半は沖水川が扇状地を造り，その西半は庄内川・横市川に依って台地が分断された。その後の第四紀更新世には，霧島火山が噴火を開始し，これに依ってローム層・クロボク（黒色火山灰）・ボラ層（降下軽石）などが盆地の全域に形成され，降って文明８年（1476）の秋には，桜島が噴火し，このTephraも県内に広く分布している。

当遺跡は宮崎県都城市市街地の南部にあたり，大岩田町字「村ノ前」に所在する。大岩田村ノ前遺跡は，都城盆地南部の平原状台地下を梅北川・大淀川が北流合流している，この地点より南に約620ｍで，標高158ｍの台地の東縁に位置し，周辺の沖積低地との比高差は大略18ｍである。この附近の著名な遺跡では，南側の今町の「五十市遺跡」や国指定の「一里塚」などが所在している。

大岩田なる地名の初見は，南北朝時代の城名として，「大岩田城」・「大和田城」の記載があり，

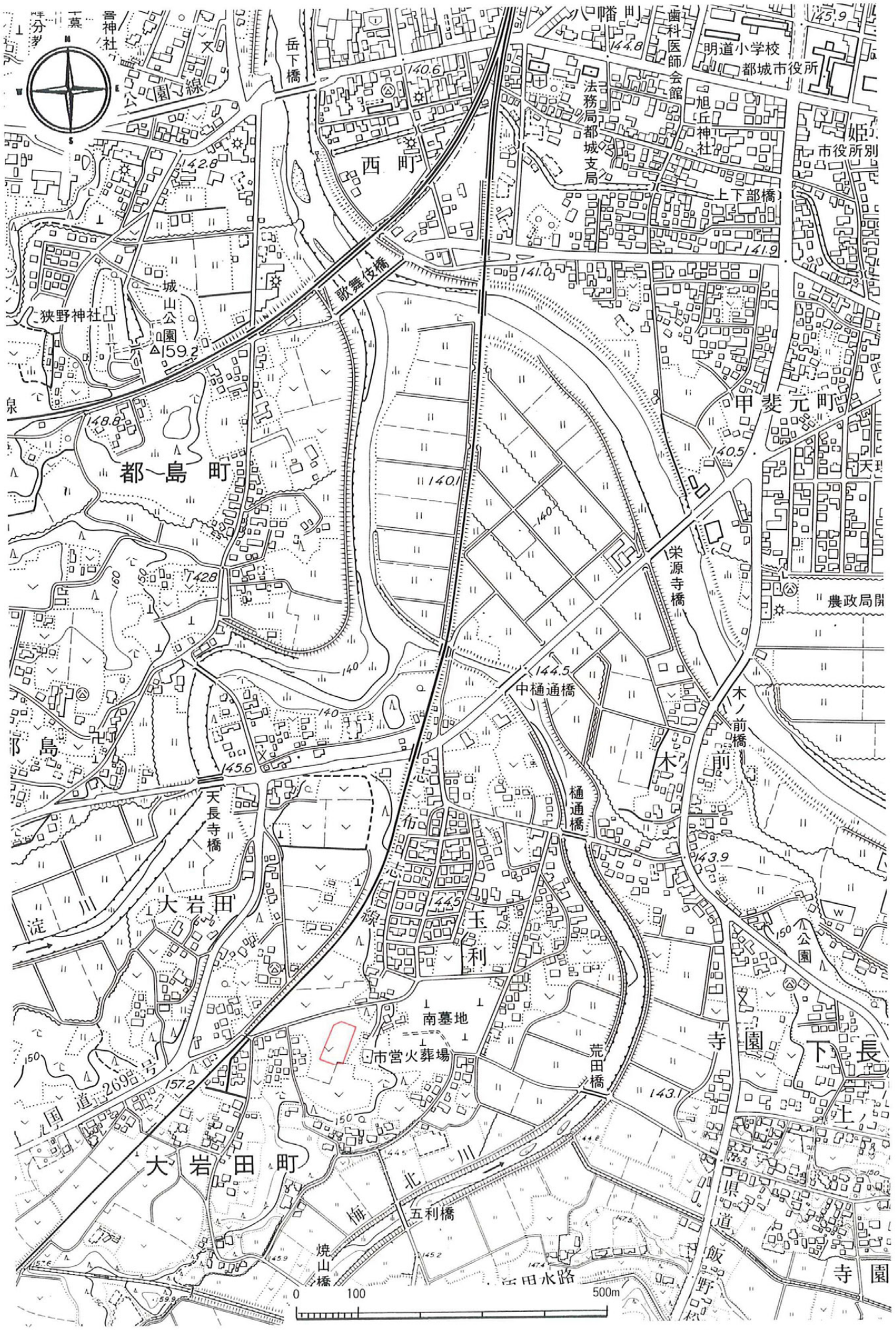


Fig. 1　大岩田村ノ前遺跡位置図

当時は「島津荘南郷」に属していた。この城には南党の肝付氏に与同の「平山式部少輔行言」という者が拠っていたごとくで，また暦応２年（1339）４月13日当城が落城したことも知られる。この城域は当遺跡より北西に400ｍの台地上と伝承される。

戦国期には都之城（北郷氏本城）の城下（木戸）五口（いつくち）の一つで，「大岩田口」と称して番衆がおかれた。これは近世に入っても存置され，都城島津氏領の行政単位として再編機能し，番頭のもとに曖・横目・庄屋などを置き支配させた。また江戸幕府の巡見使も，志布志より今町をへてこの大岩田を通っている。このように当地は古くより内陸交通の要衝にあたっていた。この遺跡の西南部字「村ノ中」には寺院址と伝わる所もあり，いまでも軽石製中世の五輪塔の残欠などが散乱している。ともかく遺跡の周囲には都之城址をはじめ天長寺・竜峯寺・二厳寺・本覚寺・須玖東大明神など古刹・古社址も多い。

近世の遺物では，同町の玉利に所在する石灯炉の竿石に，「于時寛文(1672)十二年壬子四月八日，」の紀年銘があり，「奉造立石燈籠一基，為念佛講人數菩提也」また「本覚寺三世教蓮社頼誉和尚」と刻し，さらに多くの武士・庶民の交名がみられ，該地の時宗念仏講の存在を物語っている。また既述の大岩田城址伝承地の西側には，近世初頭武士の墓塔が倒置され，その東南部に建てられた自然岩の石塔の銘文に，「寶永八年（1711）四月八日南無大日如来・天満大自在天神・南無観世音菩薩　飯隈山久徳」とあり，同様の石塔が都島町旧公民館入口にも存在する。これには「虚空蔵菩薩　庚寅　飯隈山久徳」と刻してある。後者は干支より宝永７年（1710）と判明する。飯隈山は松山にかつて存在した飯隈山飯福寺照信院のことと推定される。この寺院は京都天台宗聖護院の末寺で，本山派修験の道場であった。以上は何れも当地に於ける仏教の展開を知る好資料といえよう。

このように，本遺跡の周辺には縄文・弥生時代はもとより，中世・近世の遺跡も多存しているものと推測される。因みに現在の大岩田町は昭和45年よりの都城市行政区画の称である。当町は市の南部にあたり，南は今町，西は五十市，北西は都島町，東は下長飯町に隣接し，国道269号･10号線の分岐点でもある。なお10号沿いには都城警察署の大岩田検問所が所在している。

参考文献

島津家本『前編旧記雑録』卅九　近世後期成立。

角川日本地名大辞典編纂委員会『日本地名大辞典』45宮崎県　1986.10。

宮崎県『宮崎県史』資料編　考古１　1989.３。

拙編『都城島津家史料』第１～３巻。

Ⅲ．発掘調査の記録

調査はグリッド法に依り，10×10ｍのメッシュに区画Ｌ，東西方向をＸ軸に，Ｙ軸は磁北線に一致させた。この北西端を基点に，ＸＹ軸それぞれ算用数字をもって標記した。また調査区内を象弦に準じてⅠ～Ⅶの４区に分ち，東西・南北に巾２ｍの土層観察畦を存置することにした。

該地は永年畑地に利用されており，耕作に拠る攪乱が予想され，また種々の制約もあって重機を導入した。第Ⅰ層(耕土)の排土作業を北半のⅡ・Ⅲ区より行い，続いて南半のⅠ・Ⅳへと進め，その後に手掘り作業に入った。予察されたごとく，耕作に依る破壊は，御池ボラ層まで達している所もあった。

遺構の検出は，先ずⅡ区で道路状遺構（ＳＦ１）・ピット群・竪穴状遺構（ＳＣ２）の北側の一部を，Ⅲ区の東部にピット群・竪穴状遺構（ＳＣ１）・道路状遺構（ＳＦ２～５）・土坑（ＳＫ１・２）が確認された。しかしその西側は深度も浅く，耕作に依る破壊が甚しかった。Ⅰ区よりはＳＣ２の南側とピット群，Ⅳ区も同様のピット群が，また東縁の最深部より縄文晩期の土器片・打製石斧などの出土をみた。さらに調査区南端より溝状遺構（ＳＤ１）が確認されたが随所に破壊が及んでいた。なお本調査区外の南側の覆土保存区域に，２×５～10ｍの５トレンチを設定し，その西南縁より竪穴状遺構（ＳＣ３）および道路状遺構（ＳＦ６～８）を検出した。また各遺構，各地点の包含層より出土した遺物は，その数こそ決して多くはないが，縄文後期～弥生後期・古墳時代・古代・中世・近世に亘っている。

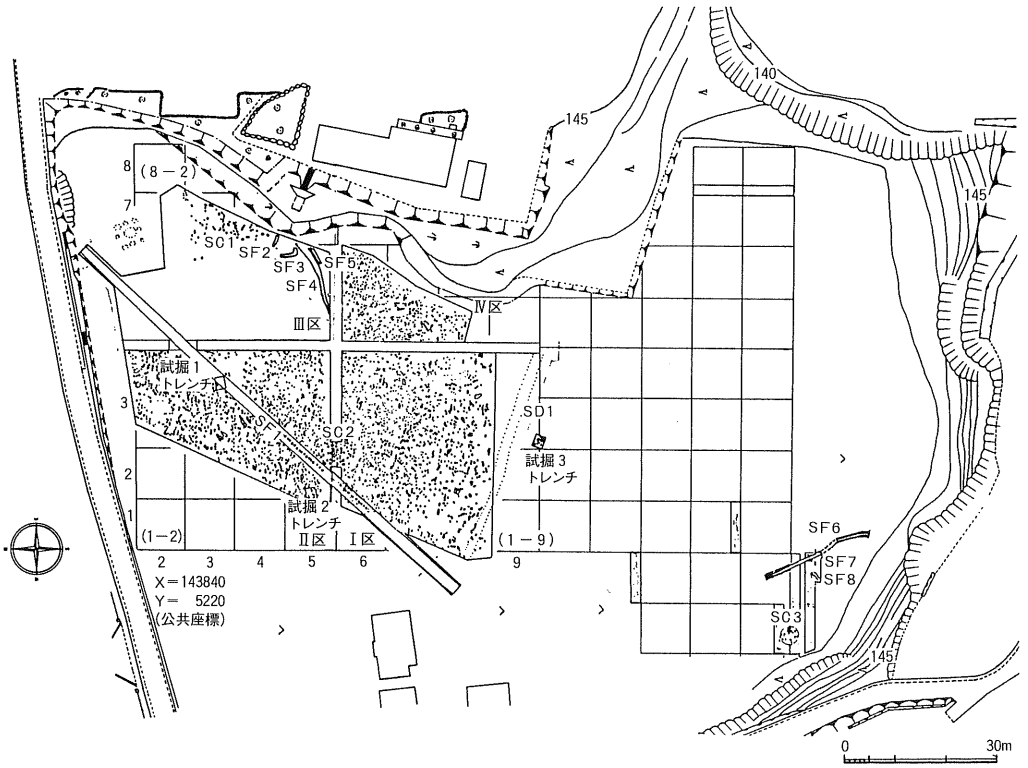


Fig. 2　大岩田村ノ前遺跡調査区および遺構分布図

1．層序

大岩田村ノ前遺跡は大淀川と梅北川の合流地点より南におよそ620ｍで，標高約158ｍの台地の東縁に位置する。この河川の沖積低地との比高差は大略18ｍである。調査区の土層は南北方向では，北より南へ傾斜し，ほぼ中央で最深部を形成し，東西方向は，東部の崖に向かうほど漸次その傾斜を増加させている。当遺跡の土層の層序は次のとおりである。

第Ⅰ層：表土（耕土）　灰オリーブ色を呈し，地形の平坦化・耕作を目的として，人為的にそれが繰り返されている。調査区内で14～57㎝の厚さを計る。

第Ⅱ層：灰白色降下火山軽石層　文明年間の桜島に起源を有する降下火山軽石。自然堆積は部分的に厚さ３～５㎝残存している。

第Ⅲ層：黒褐色土層　腐植を含み，弱粘質の砂質土。13～48㎝。

第Ⅳ層：御池ボラ混茶褐色土層。13～44㎝。

第Ⅴ層：暗黄色降下軽石層　霧島火山系噴出の軽石で，通称御池ホラ。33～46㎝。

第Ⅵ層：漆黒粘質腐植シルト層。厚さは29～31㎝。

第Ⅶ層：オレンジ色ガラス質火山灰層　通称アカホヤ。30㎝～。

第Ⅷ層：黒色弱粘質細粒腐植土層。

第Ⅸ層：褐色土層。

第Ⅹ層：シラス層。

と続く。遺物包含層はこれらのうち，Ⅲ・Ⅳ層で，縄文・弥生時代の遺物はⅣに多く，同期の遺構の検出面も同層およびⅤ層に属する。また中世のそれはⅢ層に顕著である。なおⅣ層の厚いところは２層に分たれるが，下位ほど御池ボラの混入度合が大きく，Ⅴ層えの漸移層を形成している。いまこれを便宜，土層断面図ではⅣ′と標記した。

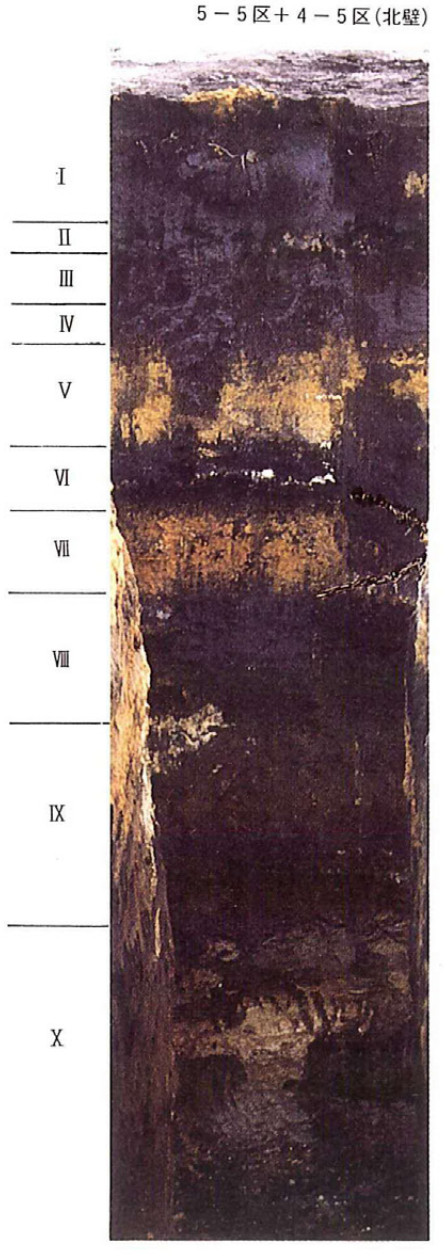


Fig. 3　大岩田村ノ前遺跡土層断面

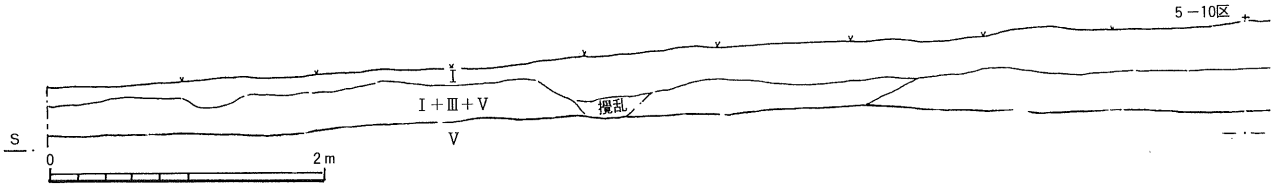
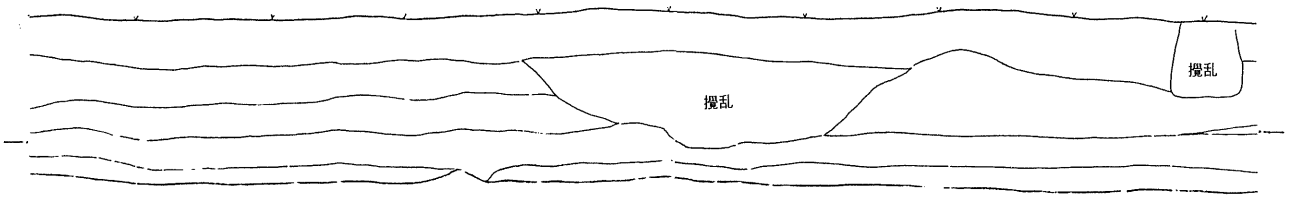


Fig. 5　南北方向東壁土層断面図



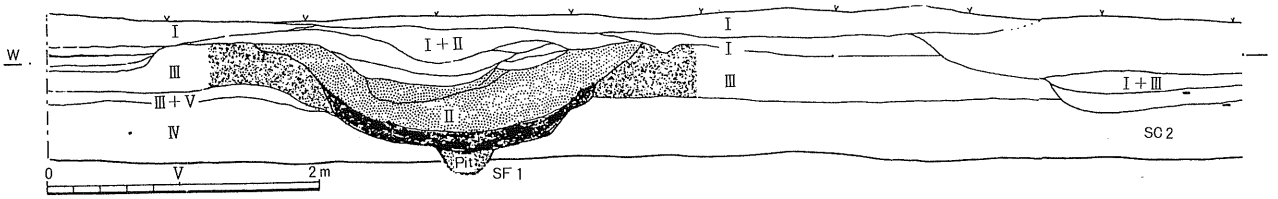
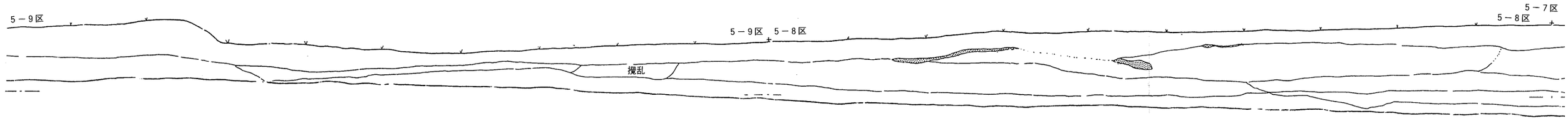
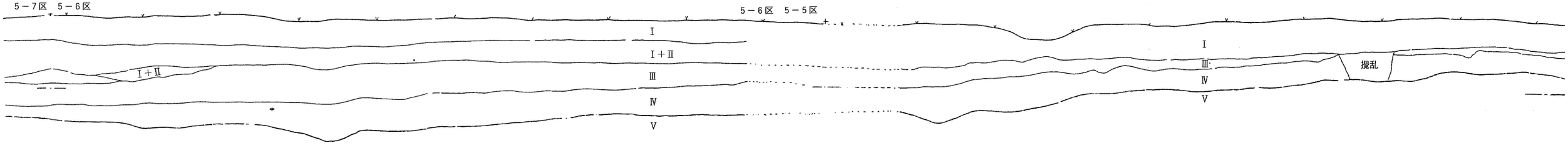
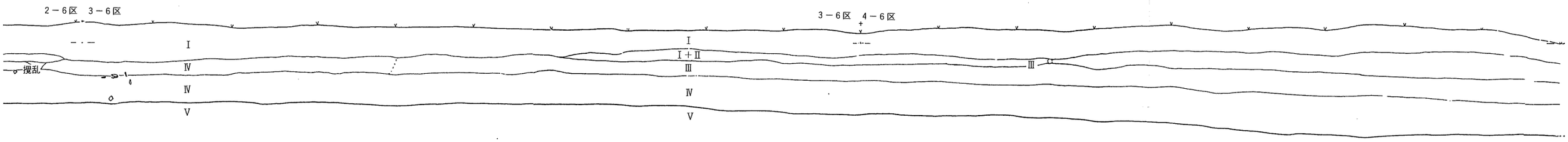


Fig. 4　東西方向南壁土層断面図

I：表土(耕土)
II：文明期桜島降下軽石層
III：黒褐色細粒土層
IV：御池ボラ混茶褐色土層(III＋V)
V：御池ボラ層


5－9区
5－9区　5－8区
5－7区
5－8区
攪乱


5－7区　5－6区
5－6区　5－5区
Ⅰ
Ⅰ＋Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅰ＋Ⅱ
Ⅰ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
攪乱


2－6区　3－6区
3－6区　4－6区
Ⅰ
Ⅳ
Ⅳ
Ⅴ
攪乱
Ⅰ
Ⅰ＋Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
Ⅲ

2．縄文時代の遺構と遺物

（1）　**ＳＰ**（Ｆig. ６・７，ＰＬ．１～４）　このＰｉｔ群は縄文・弥生期の遺構と推定されるが，便宜ここでふれることにしたい。調査区内より約3,000余のＰｉｔ（土坑も含む）を検出した。確認面はすべてⅤ層（御池ボラ）よりである。分布はⅢ区の西側が深度も浅く，現代の耕作による攪乱をうけているせいもあって，東部の斜面のみ割と保存がよく，小群をみせたが，大略は全調査区に周密である。供伴遺物も僅少で，如上の遺構で出土したのみである。Ｐｉｔ群は縄文・弥生両期にわたる遺構には相違ないが，切合い激しく遺物も極少であり，また規矩性に乏しかったので，その性格，機能など特定できなかった。今後はその規模・形態・埋土の分析など緻密な検討を重ねたい。なお各地点の包含層の遺物ついては後項で述べる。

Fig. 6　Ⅱ区遺構平面図

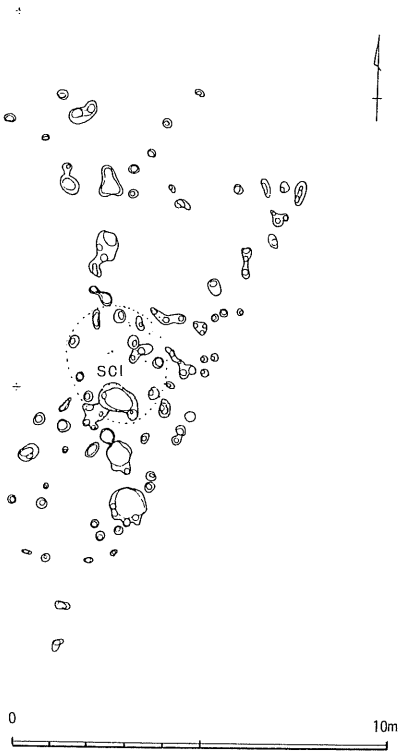


Fig. 7　Ⅲ区遺構平面図

（2）　**ＳＣ１**（Ｆig. 8，ＰＬ．6）　Ⅲ区の東側より検出された竪穴状遺構である。この遺構の西側は耕作による攪乱があり，東側も樹根などによる土層の分解が著しかった。壁や側溝などの確認はできなかったが，柱穴と推定されるＰｉｔの配置，出土遺物よりみて縄文時代の竪穴遺構と推定した。

確認面はⅤ層（御池ボラ層）で，平面観は長軸方向を南北に，長辺3.10ｍ，短軸2.70ｍを測る。柱穴と推定される９個のＰｉｔはおよそ長径36cm，短径30ｍ，深さ20～30cm程であった。この北東に位置するＰｉｔ，東西径34cm，南北径36cm，深さ23cm（検出面より）の覆土中より完形の椀形土器１個が出土した。遺構の床面に比定される部分は，あまり固くなく北東に９度の傾斜を有する。

出土遺物（Ｆig. 9，ＰＬ．18）

縄文式土器　上述のＰｉｔ覆土内より出土した。これは小形椀に属し，口径12.5cm器高6.5cmを計り丸底である。色調は浅黄色または灰褐色を帯び，器外面の調整はナデや部分的には横方向のミガキが観察される。器内面は丁寧なナデが明瞭で，胎土には小粒の軽石礫を混じている。

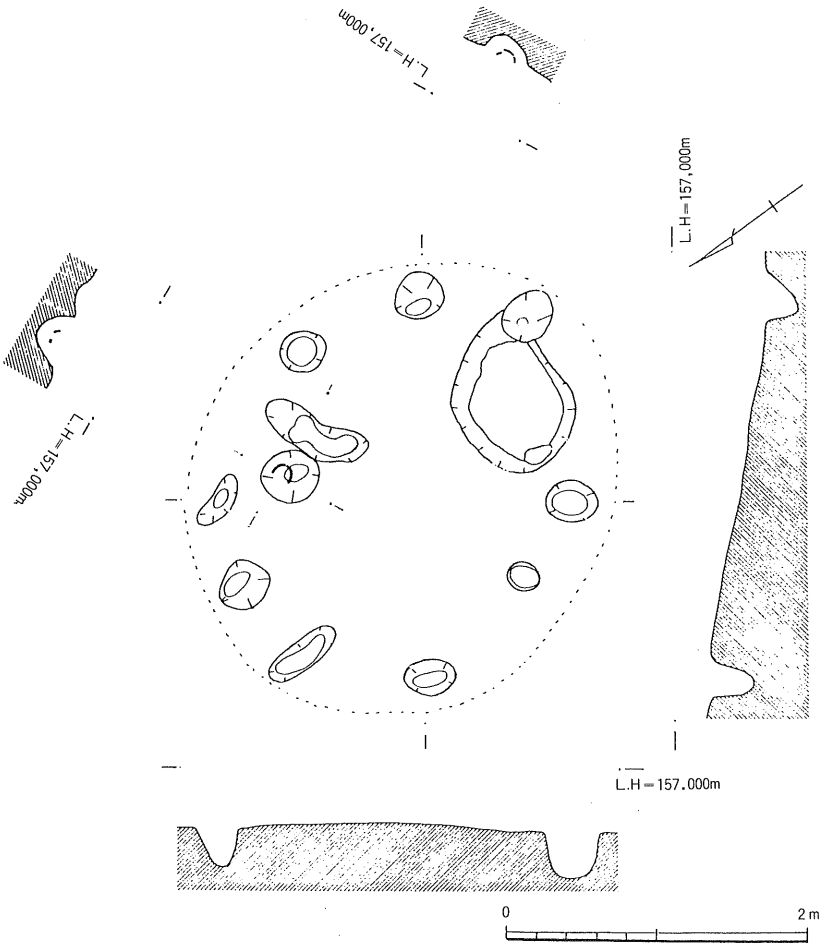


Fig. 8　SC１平面・断面図

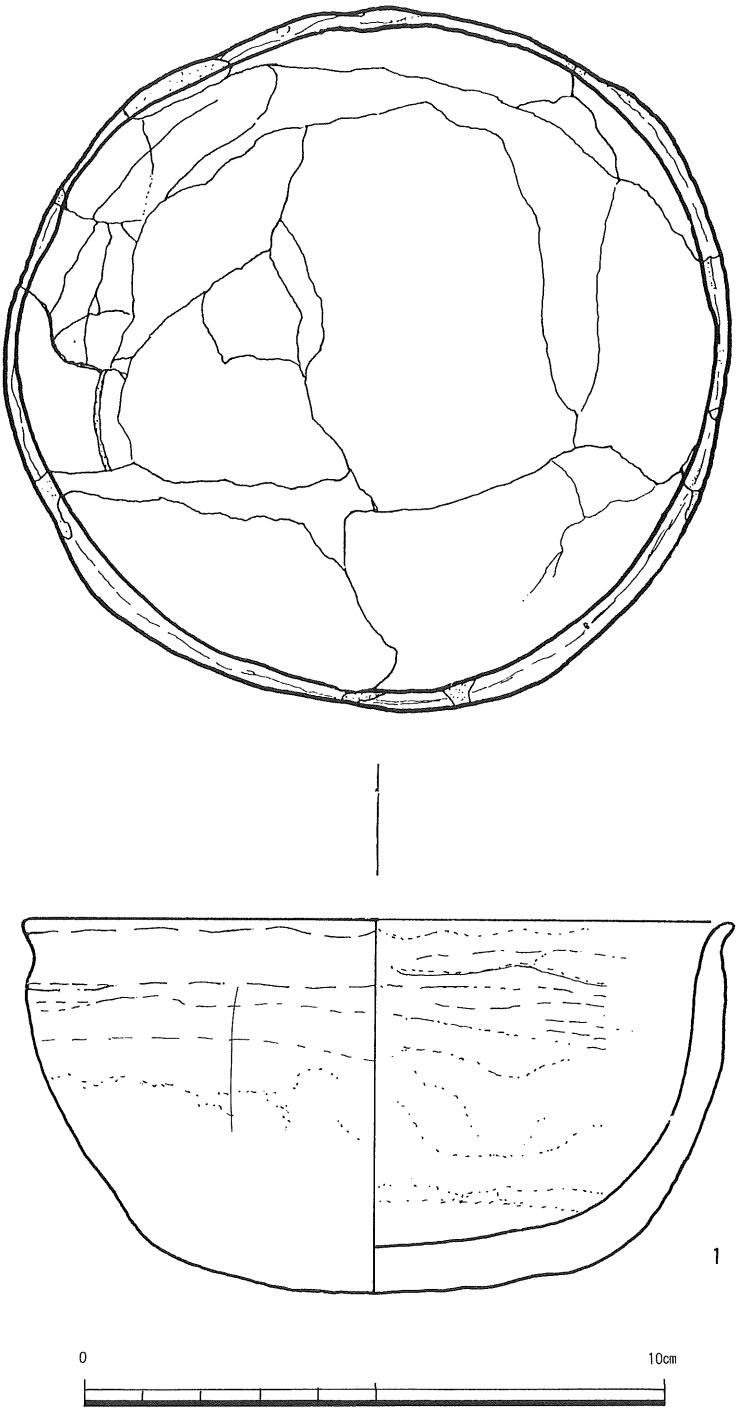


Fig. 9　SC 1 出土の縄文式土器

（3）　ＳＫ１（Fig. 26, 27, ＰＬ. 13）　Ⅳ区の東南部で検出された。確認面はⅣ（御池ボラ混暗黄色土）よりで，平面形態は不整楕円形を呈する土坑である。既掘部分の規模は長軸1.46ｍ，短軸（0.80ｍ但，既掘部分），深さ56cm（標高156,320ｍ）を測る。埋土は４層に分かれ，上層より御池ボラ混褐色土層（やや軟），径５mm内外の御池ボラを含む褐色土層（やや硬），径１mm位の御池ボラ混褐色土層（硬），下層は木炭粒混入褐色土層と重なる。底面の北側は少し深くなり，径４mmの御池ボラを含む暗褐土で固い。この上面に御池ボラの細粒がブロック状に存在していた。掘形最深部はⅣ層まで達していたが，遺物の出土はなかった。

ＳＫ２（Fig. 26・27, ＰＬ. 13）　ＳＫ１の北側に隣接しⅣ層より検出された土坑である。西縁をＳＦ５に切られているが，平面形態は不整楕円で，長軸1.12ｍ，短軸（0.5ｍ但，既掘部分），深さ40cm（標高156,320）の規模をもつ。埋土は単純な２層をなし，上層は御池ボラ混明褐色土層で，その北端に御池ボラ細粒混入暗褐色土，同じく御池ボラ混入褐色土（硬）がブロック状に入り，その下層は御池ボラ混褐色土層である。この土坑も掘形はⅥ層に及んでいた。

出土遺物（Fig. 10, ＰＬ. 19）

縄文式土器　ＳＫ２の西縁の２層より復元可能な小形鉢（標高176.26ｍ）が出土した。これは推定で口径（11cm），底径（5.3cm），器高（11.3cm）を測り，調整はタテ方向のケズリ状ナデやヨコ方向のナデが顕著である。色調は器外面で黒褐色または褐色を呈し，その一部には煤が付着している。器内は浅黄色に黒斑がみられる。また胎土には透明鉱物や砂粒を含んでいる。なお縄文期に属すると推定される道路状遺構（ＳＦ６）があるが，それは便宜別項に述べる。

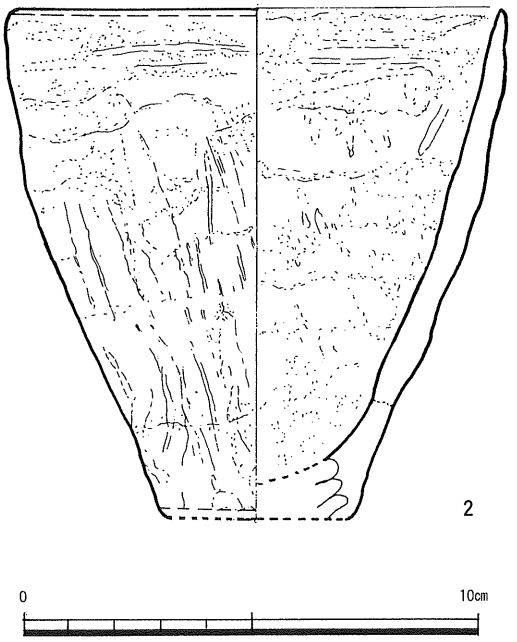


Fig.10　SK２西縁出土の縄文式土器

3．弥生時代の遺構と遺物

（1）　ＳＣ２（Fig. 11, ＰＬ．７～10）　Ⅱ区の南側（２－５・６区）のⅣ層より確認された。しかし遺構の中央を北東に走行する現代の攪乱をうけているなど，現況は決して良好ではなかった。遺構は壁と推定される部分が僅かに残存するのみで，側溝などは不分明であったが，Ｐｉｔの円形にまとまる配置や遺物の分布状態（水平・垂直），土層などより竪穴状遺構と推定した。平面観は径およそ4.60ｍ内外の円形と思われる。Ｐｉｔは切合いなど複雑な様相を呈していたが，柱穴と推察される外側Ｐｉｔは径34～38cm，深さ40～60cmで，内側のそれは径30～40cm，深さ30～59cmの間を測る。Ｐｉｔの深さは検出面（Ⅴ層）からである。また各Ｐｉｔの覆土には多少の土器片や微粒の炭化物が認められた。さらにＰｉｔは主柱穴・側穴・建替穴など明確にできなかった。なお出土遺物はⅣ層にほぼ集中しているので，ここが床面に近い部分と推定される。

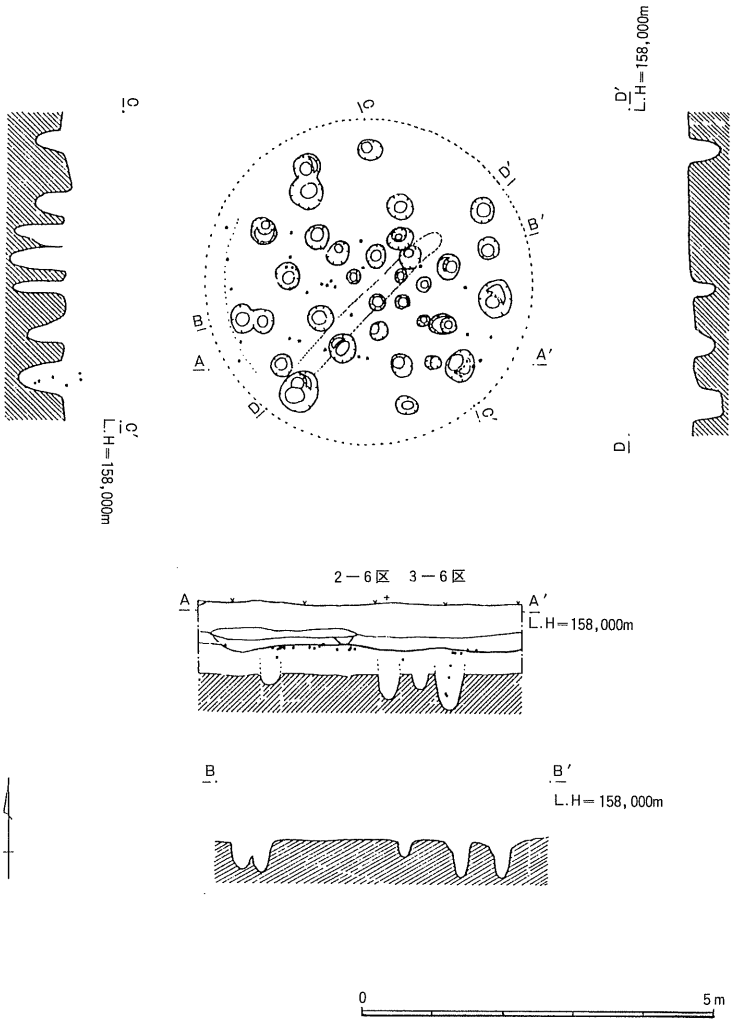


Fig.11　SC２平面・断面図

出土遺物（Fig，12－③～⑤・Fig．13－⑥・Fig．14－⑦，ＰＬ．21･22）

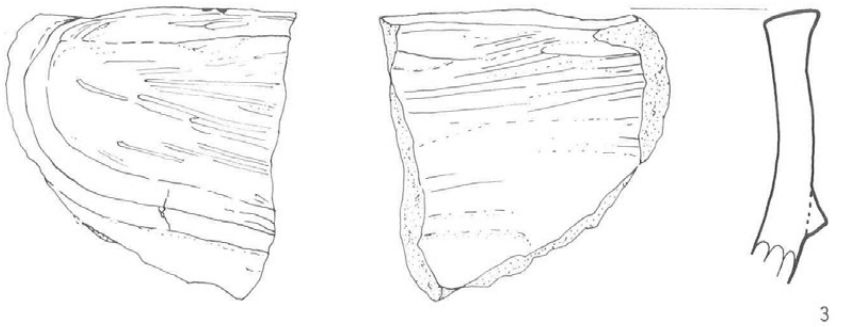
弥生式土器（③～⑦）　3は甕の口縁で，肥厚した口縁突帯に下面より上に弧を描く曲線の突帯が接合している。器外面は灰色，器内面は灰オリーブ色を呈する。器内外ともに横位の工具ナデである。胎土には石英・不透明鉱物がみられる。

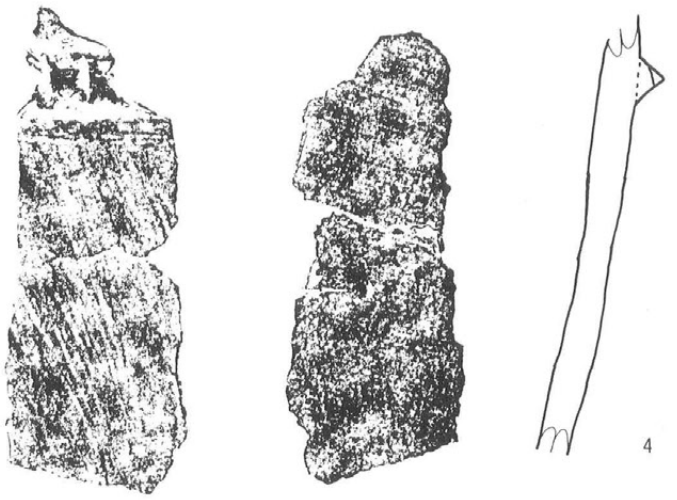
4甕の胴部下片で器外面は黒色を帯び，内面は淡橙色の色調である。外面の調整は縦位のミガキ，内面は丁寧なナデないしミガキが施され堅緻である。胎土の鉱物は3同様である。なお突帯のキザミは比較的長い。

5甕の胴部片で器外面は灰色を呈し，煤が付着しており，内面は青灰色である。外面の調整は明確でないが縦位のミガキと思われ，内面は横位のナデ手法がみられる。胎土には石英・不透明鉱物を混じている。なお突帯のキザミは短い。

6図上復元を試みた。器種は甕で復元口径（30.0cm），底径9.9cm，器高（33cm）を計る。口縁部は内斜する部分とほぼ平滑なところがある。口縁部とその下位および胴部に2条のキザミ突帯をめぐらせている。また底部は外に強く張り，底裏には棒状の圧痕がみられる。器外面は灰オリーブ色を帯び，煤が，膠着しており，内面は淡橙色である。調整は胴上半は横位のミガキ，胴下半は縦位のミガキで，内面は丁寧なナデ・ミガキが看取される。胎土には石英・黒色鉱物を含んでいる。

7これも図上復元してみた。復元口径（40.4cm），底径 7.8cm，器高（41.3cm）を測る割と大ぶりの甕である。口唇部は内斜し，口縁部の上面には偶数の突起が貼付けてある。口縁部に2条の無文突帯をめぐらす。また胴部にも同様の2条の突帯がめぐるが，この一部は上面に弧を描き，口縁部の突帯と接合させている。色調をみると，器外面は灰褐色および橙色で内面は浅黄色を呈し，器面の調整は外面の胴部には縦位のミガキ，器内面は丁寧なナデないしミガキがみられる。胎土には石英などの鉱物が目立つ。





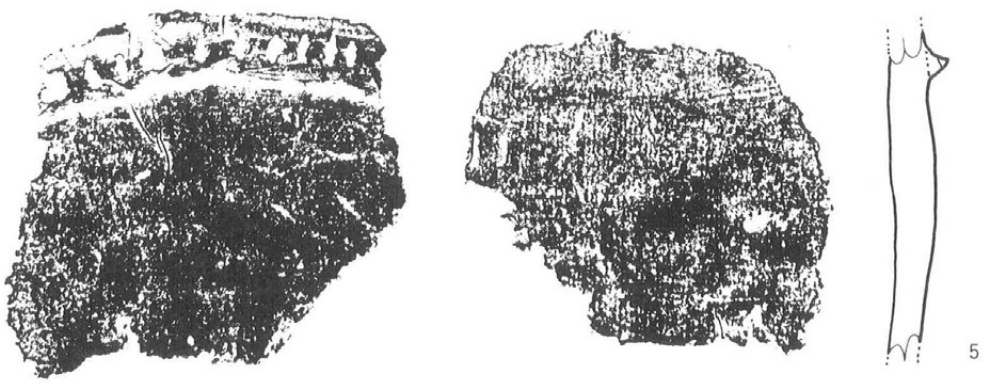


Fig.12　SC 2 出土の弥生式土器（1）

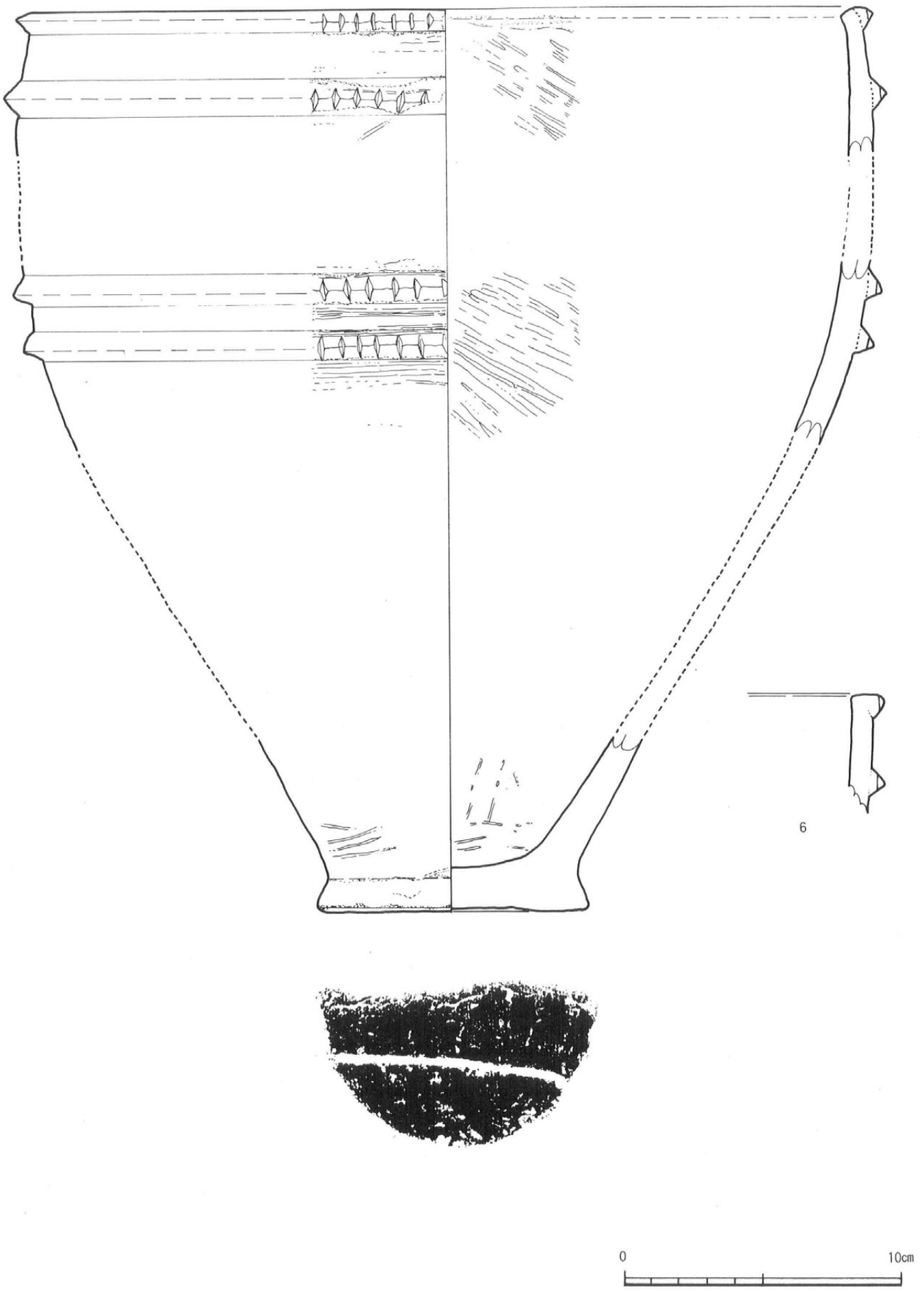


Fig.13　SC 2 出土の弥生式土器（2）

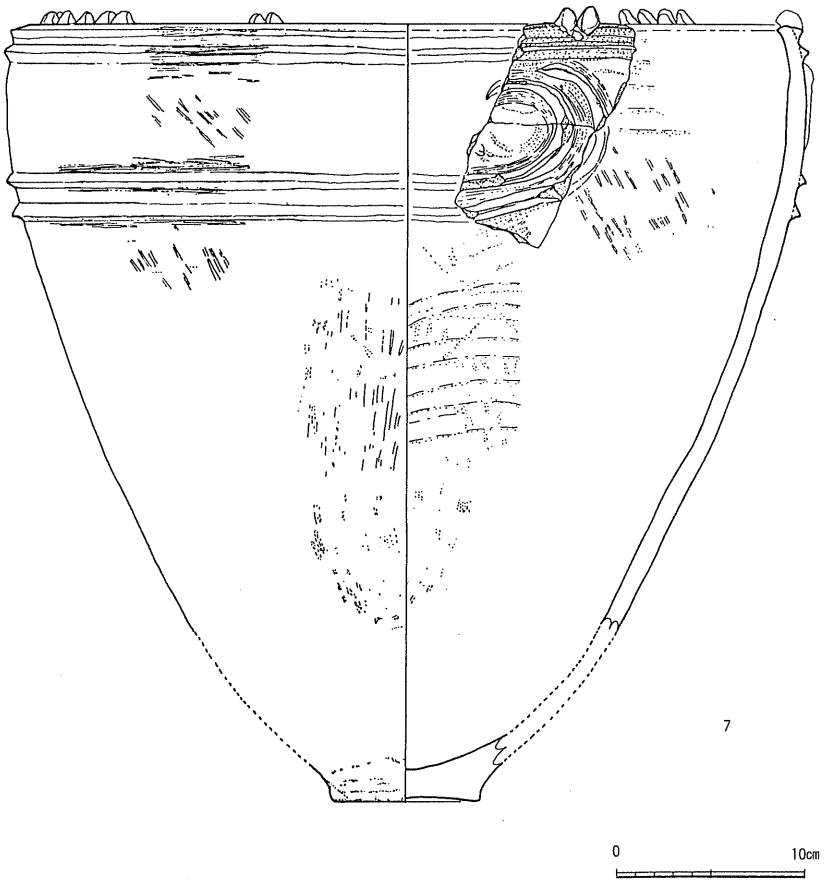


Fig.14　SC 2 出土の弥生式土器（3）

（2）　ＳＣ３（Fig. 15・16, ＰＬ. 11・12）　本遺跡の調査区外の西南部（－１－14・15区）より確認された。この地点も現代の耕作に依る土層の攪乱が及んでいた。遺物はⅣ・Ⅳ′層に顕著で，ＰｉｔはⅤ層より検出した。壁・側溝・炉址などは不明であったが，ＰｉｔがＰ円形に内外二重のまとまりを有し，また少量ながら遺物もまとまって出土したので，竪穴状遺構と推定される。平面観は約3.60ｍ内外の円形プラント思料される。Ｐｉｔは主柱穴・側穴・建替穴などが考えられるが，断定するには至らなかった。外側の柱穴は大略その径23～26cm，深さ17～34cm，内側のＰｉｔは径約20～25cm，深さ20～22cmを測る。またこの遺構の東に偏して不整形の長辺100cm，短辺75cm，深さ27cmの規模をもつ土坑が検出されたが，その埋土には微粒の炭化物を混じているものの，焼土などは存在しなかった。これは位置や覆土よりみて炉址とみるには疑問があり，貯蔵穴とも思われるが判定しがたい。出土遺物はこの遺構の東南部には片寄りをみせている。

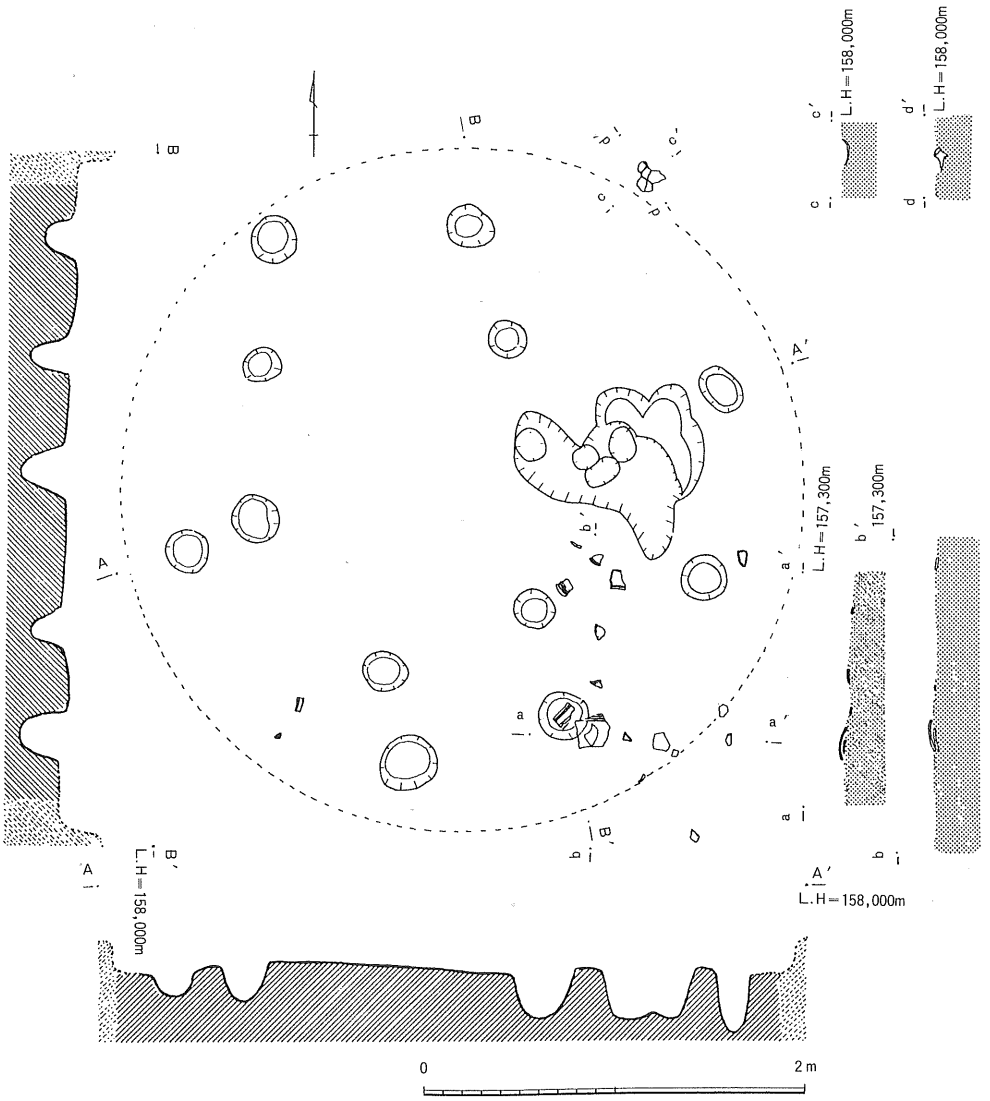


Fig.15　SC３平面・断面図

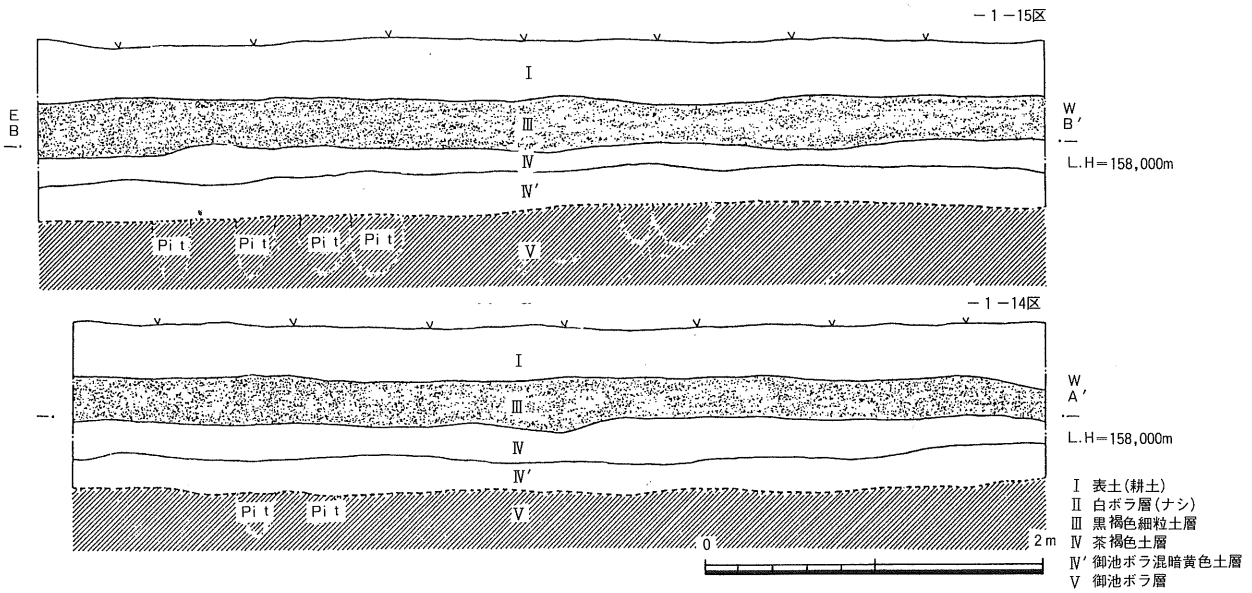


Fig.16　SC３北壁土層断面図

出土遺物（Fig. 7－⑧・Fig. 18－⑨・Fig. 19－⑩，PL. 23～25）

弥生式土器（⑧～⑩）　8は広口壺の口縁で口径30.5cmを測る。器外面はにぶい褐色を呈し，内面は褐色か橙色の色調である。器面の調整は，外面でミガキないし丁寧なナデを施し，内面ではナデ仕上げが顕著に看取される。胎土には黒雲母・石英などが含まれている。

9も甕で復元径（29cm）を計る。口縁部を肥厚，強く屈曲させ丁度たなごころを内傾させた形状を有する。口縁下には体部との調成の工具痕が列点のように残存する。胴部には4条の突帯が附されているが，これは各々貼付けの際の爪痕と思われ，その下より胴部はまるく張る。色調は器外面はにぶい褐色で煤が付着し，内面は暗褐色を呈する。調整は外面ナデ，内面は丁寧なナデないしミガキが施してある。なお胎土には透明鉱物が含まれる。

10器種は甕に属し，復元口径（22.0cm），底径6.6cm，器高（23.1cm）を測る。口縁部をたなごころを内に曲げたような形状を呈し，胴から脚台へとすぼまり，脚台の裏縁には1条のくぼみがある。器外面は浅黄色を帯び煤が付着している。器内面は暗灰色で，これはこげ付と思われる炭化物の膠着がある。器外面の調整は縦位のハケ目（5本1組？）が明瞭にみられ，内面はナデ仕上げである。胎土には如上の土器にはみられない角灰石を多く混じている。

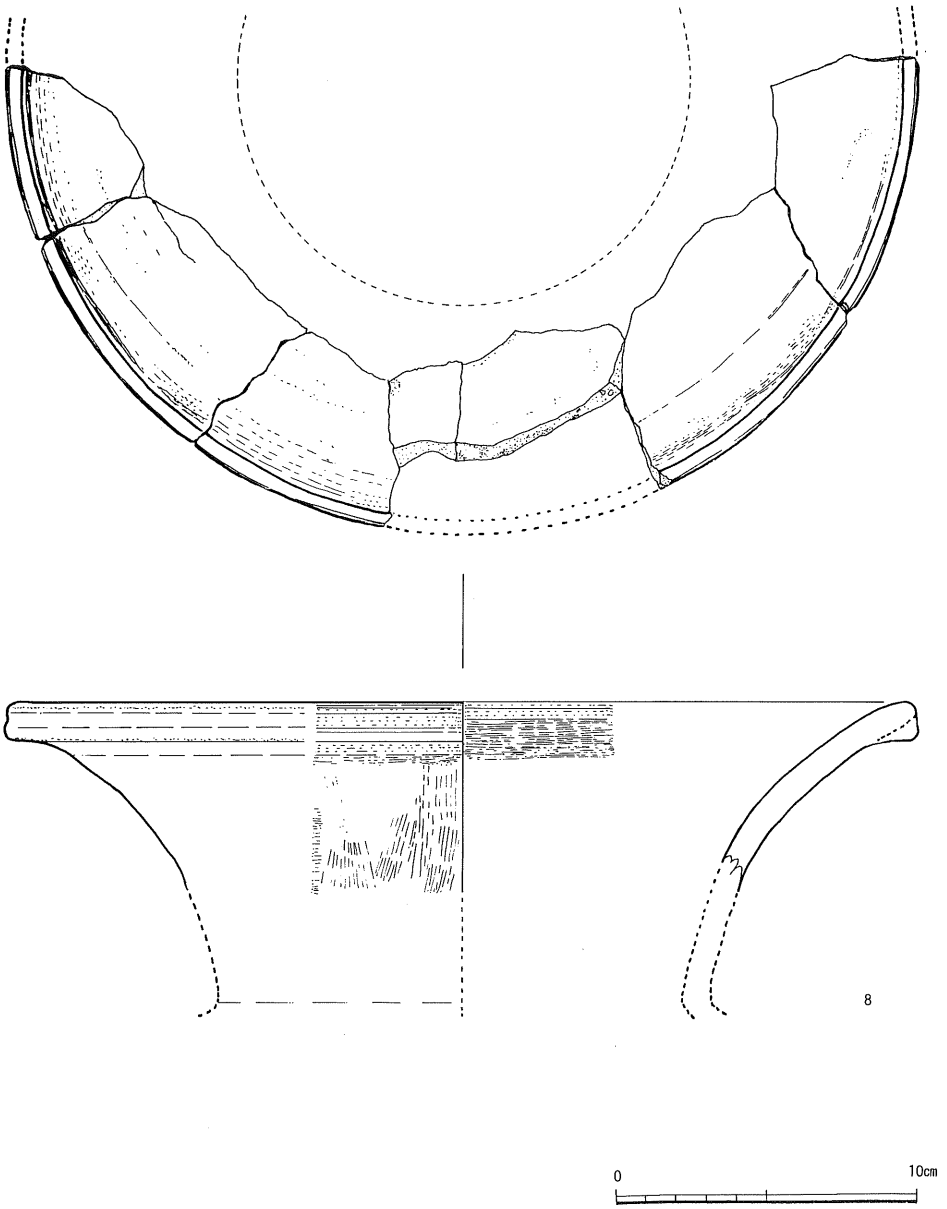


Fig.17　SC 3 出土の弥生式土器（1）

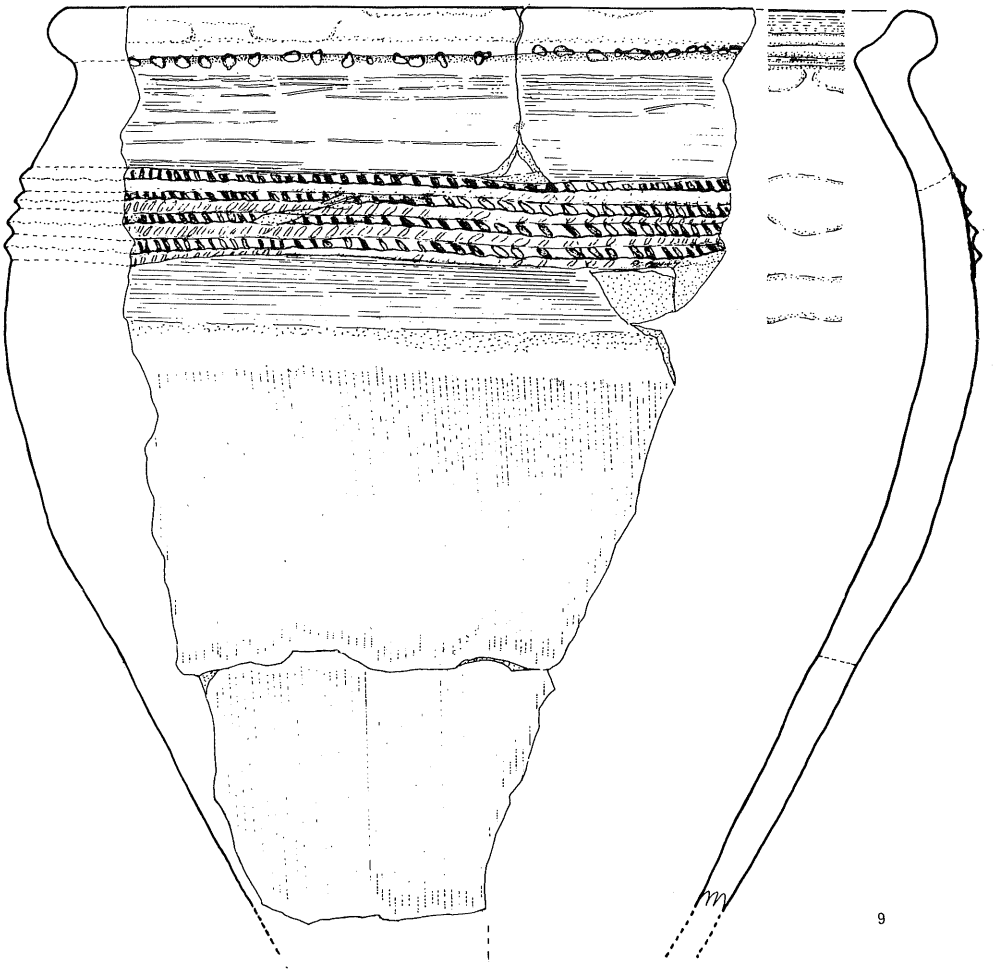


Fig.18　SC 3出土の弥生式土器(2)

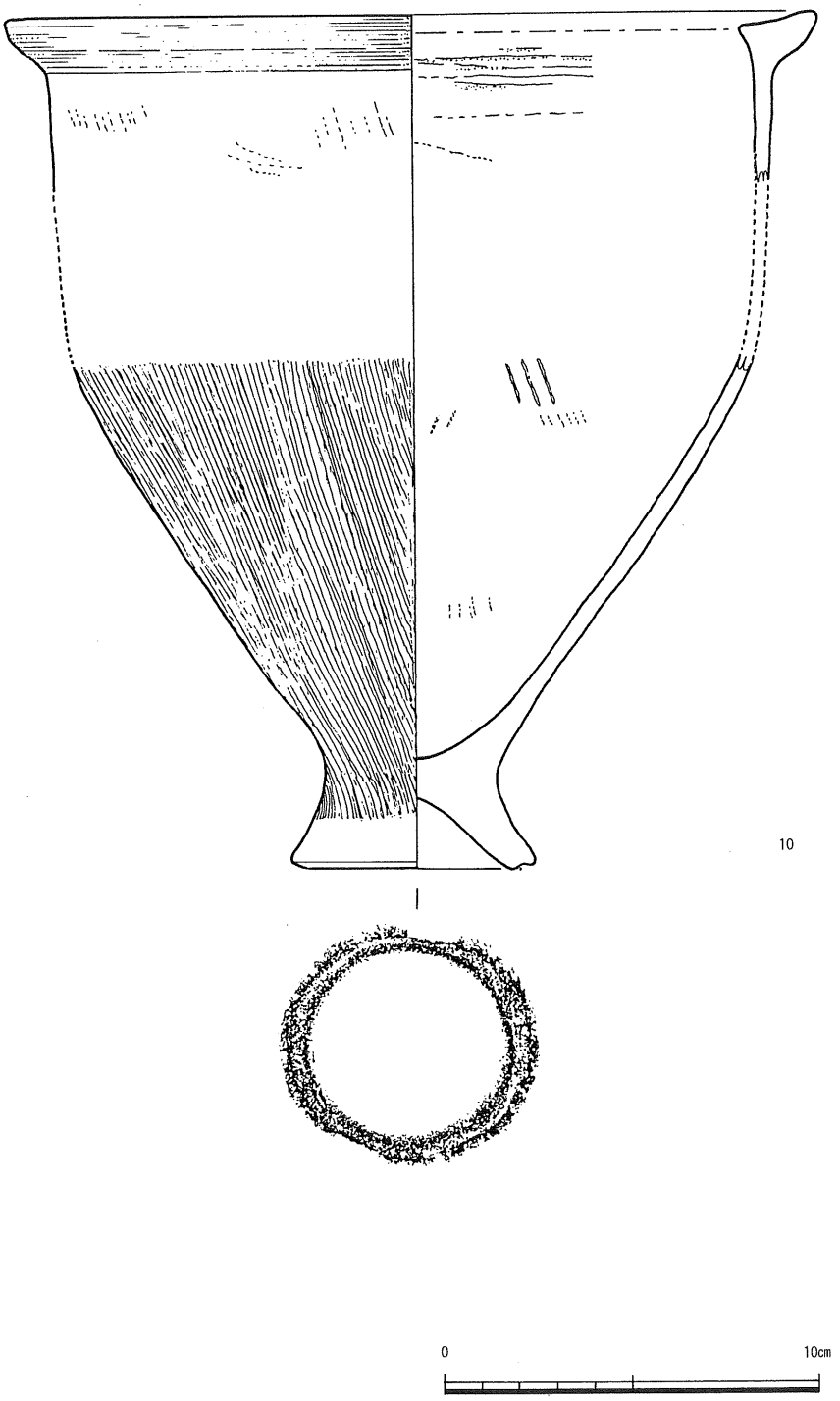


Fig.19　SC 3 出土の弥生式土器（3）

4．道路状遺構

（1）　ＳＦ１（Fig. 4・5・20・21，ＰＬ．15～17）Ⅲ区の北縁より確認された道路状遺構である。走行は南西－北東で，検出全長96.70ｍを測り，主軸Ｎ－41°－Ｅより６－２区でＮ－44°－Ｅと向きを東に３°振っており，上面巾は北東に走行する程狭小となる。掘形はⅢ下層から明瞭で，その埋土の上層は，白ボラ径1.5～2.0㎜を混じる黒色・暗褐色土との混土層（Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ層），下層はかなり厚く文明降下軽石（Ⅱ層）が堆積していた。最下層は黒色の粘質土層（御池ボラ粒を多少混ずる部分もある）が掘形の底を巻くように填土し，最深部（底面）にＰｉｔが検出された。

ＰｉｔはⅤ層（御池ボラ層）より掘り込まれ，覆土は硬く御池ボラを少し混ずる褐色土層である。このPitの上縁・掘形の側面には，鉄錆色を呈していたが，これは酸化鉄に依るものと思われる。ＳＦ１・Ｐｉｔの掘形の形態は共に椀状である。Ｐｉｔは基底部（硬化面）の南西－北東方向に沿って並び，その形態はほぼ楕円ないし円形を呈して，68個が確認された。規模は長径30～60㎝，短径28～40㎝，深さ20～30㎝の間を計り，Ｐｉｔの中心間隔は約65～70㎝を数えた。なおこれに伴う他の遺構は存在しなかった。

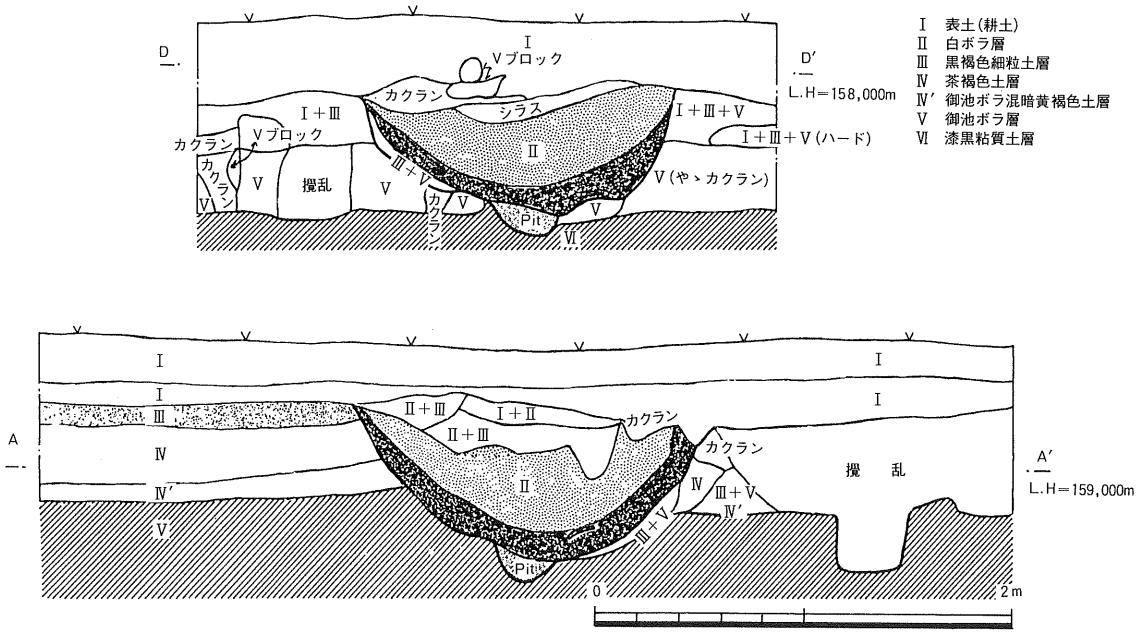


Fig.20　SF１南西壁堆積土層断面図(上：6-1区，下：0-7区)

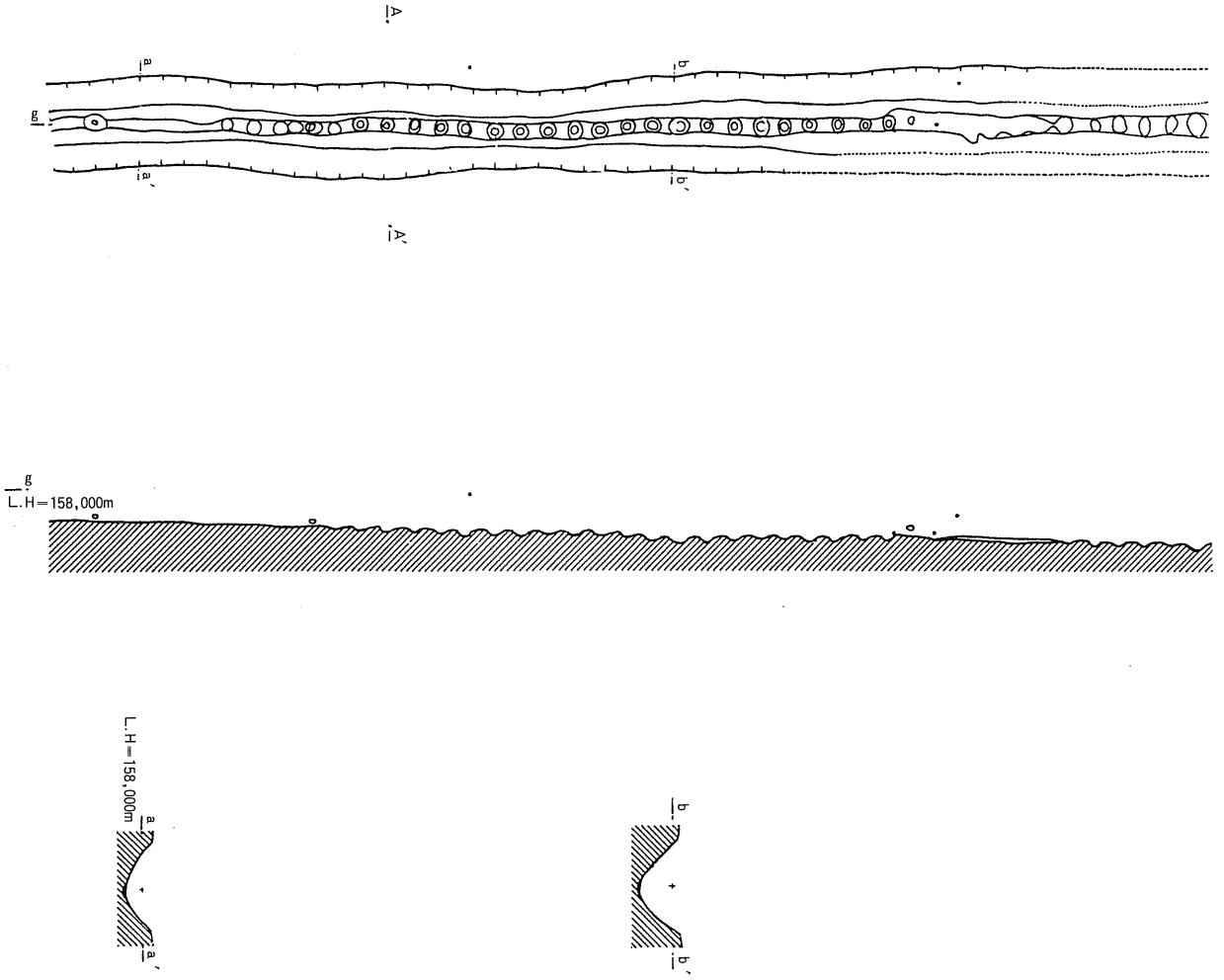
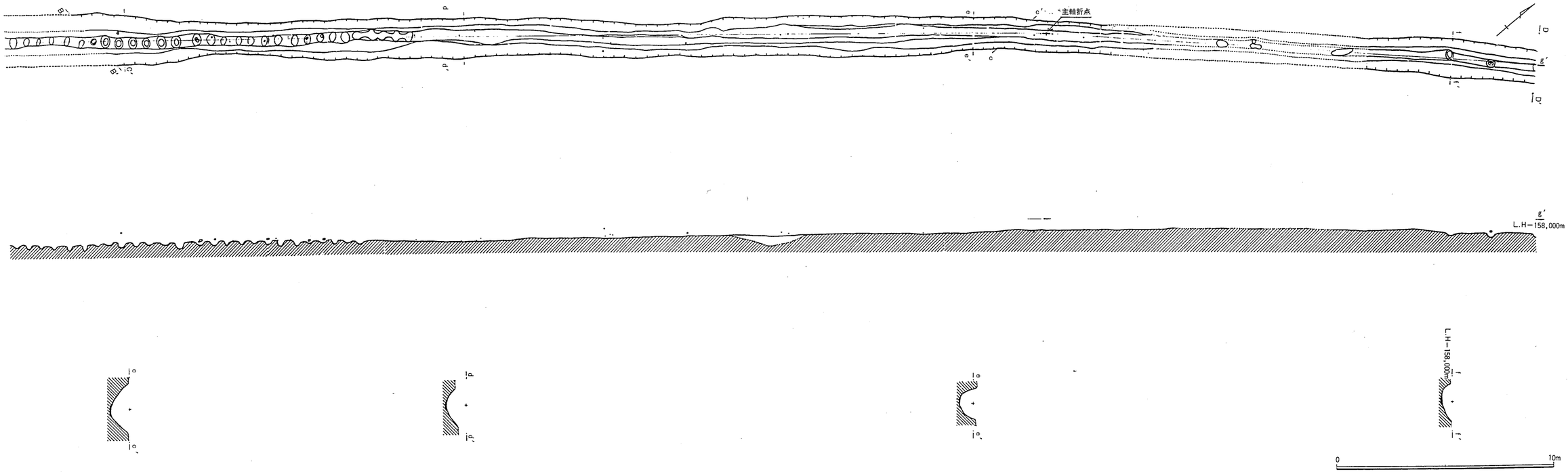


Fig.21　SF 1 平面・縦断面図


主軸折点
L.H=158.000m
0
10m

出土遺物（Fig. 22～25, PL. 26～29）

遺物は白ボラ層（Ⅱ層）の上半にも出土したが，この層は後世の攪乱が及んでおり，主に近世のものが多く，白ボラ下の黒色粘質土層よりは土師質・須恵質土器および14C末～15C中葉頃とみられる中国磁器を包含していた。これらは遺構の年代推定に手がかりを与え，また僅か一点ずつであるがこの層より人歯・銭貨などの貴重な資料も得た。総点数29点を数えたが，その主なものを次に掲示する。

挿図	図版	区・層	種別 器種	測定値(cm) 口径	底径	器高	色調	特徴	胎土	備考
22－11	26－11	6－1 Ⅳ	土器 深鉢	(18)	－	－	㊥ 暗褐色 ㊦ 褐色	㊥ 斜方向ナデ ㊦ 不整方向工具ナデ	黒雲母・石英 透明鉱物	西平糸, 縄文後期中葉
22－12	26－12	3－4 Ⅳ	土器 壺	－	－	－	㊥㊦ 浅黄色	㊥ 横ナデ ㊦ ナデ	石英・ 透明鉱物	弥生中期後半
23－15	27－15	1－6 白ボラ下	須恵器 ?	－	－	－	㊥㊦ 暗灰色	㊥ 平行タタキ ㊦ 清海波（同心円）タタキ	長石含む	平安期
23－16	27－16	4－4 白ボラ下	須恵器 甕	－	－	－	㊥ 黒灰色 ㊦ 灰色	㊥ 格子目タタキ ㊦ 平行タタキ	石英・ 軽石混る	平安期
23－17	27－17	0－7 白ボラ下	須恵器 甕	－	－	－	㊥ 灰褐色～青灰色 ㊦ 淡褐色	㊥ 平行タタキ，横位のナデ，自然釉 ㊦ ヘラ横位のナデ，自然釉	石英・ 小石混り	平安期
23－18	27－18	4－4 白ボラ下	須恵質 鉢	－	－	－	㊥㊦ 濁灰色	㊥ ヘラ状工具横位のナデ ㊦ ナデ	石英, 砂粒混る	東播系13C
23－19	27－19	0－7 白ボラ下	土器 カワラケ	－	(7.0)	－	㊥㊦ 橙色	㊥㊦ ナデ，見込みロクロ目痕， ヘラ切り底	長石混る	
23－20	27－20	2－6 ピット内	土器 土師坏	－	－	－	㊥㊦ 浅黄色	㊥㊦ ナデ，ヘラ切り底？	茶褐色鉱物 含む	磨耗甚しい
23－21	27－21	4－3 白ボラ下	土器 土師碗	－	高台径 (4.0) (3.2)	－	㊥㊦ 橙色	㊥㊦ 丁寧なナデ	長石含む	
23－22	27－22	1－6 白ボラ下	土器 土師碗？	－	－	－	㊥㊦ 浅黄色	㊥㊦ ヘラ横ナデ	角灰石混る	
24－23	28－23	2－5 白ボラ下	磁器 碗	(14.4)	－	－	㊥㊦ 淡青緑色	端反り碗, ㊦㊥ 釉貫入あり	精良, 灰白色	舶載磁器14C末 ～15C中葉
24－24	28－24	5－3	磁器 皿	(10.4)	－	－	㊥㊦ 淡緑色	稜花皿，㊦ 口縁下二条の沈線， 腰下焼成不良	暗灰色, 橙褐色	舶載磁器15C～ 16C中葉
24－25	28－25	4－3	磁器 青花皿	(12.0)	－	－	㊥㊦ 青白色	鎬皿，㊥ ㊦ に三重圏線， 如意頭文	灰白色	舶載磁器16C中 葉～16C末
24－26	28－26	0－7	陶器 土瓶	－	(5.3)	－	㊥㊦ 明褐色	㊥ 下面ロクロ痕，底煤付着	赤褐色, 白色鉱物含む	薩摩系, 近世後期
24－27	28－27	0－7	陶器 碗	－	高台径 (3.6) (3.0)	－	㊥ 腰部上灰白色, 下灰褐色 ㊦ 灰白色	高台露胎，見込みに砂粒膠着 ㊦ 釉貫入，釉かけわけ	精良, 明褐色	薩摩系, 近世後期
24－28	28－28	0－7	陶器 鉢	(26.4)	－	－	㊥㊦ 灰茶褐色	口唇部目痕, ㊥ 口縁下火ぶくれ	赤褐色, 白色鉱物含む	薩摩系, 近世後期

Tab. 1　SF1出土の遺物（1）

挿図	区・層	器種	測定値(cm) 長(最大)	幅(最大)	厚	重量(g)	色調	材質	備考
25－29	2－5	石器 剝片	1.35	1.05	0.35	0.28	半透明黒色	黒曜石	Pit内 石鏃脚部？
25－30	3-4 白ボラ下	石器 砥石	6.25	2.15	0.60	10.64	㊥ 明褐色 ㊦ 暗褐色	砂岩	㊦ 面に玉砥石状の擦痕 ㊦ 面は磨痕
25－31	2－5 Ⅳ	石器 礫核状	9.65	7.60	1.70	121.98	灰褐色	砂岩	SF1の掘形より
25－32	3-4 白ボラ下	銭貨	外縁外径 (2.50)	内郭内径 (0.60)	外縁厚 0.15	－	淡緑青色	銅	陽鋳銘「天圜冠寶」？ 淡緑青色 鋳技は良好
25－33	3-4 白ボラ下	人歯	(0.70)	0.75	0.09	－	㊥ 淡緑色・㊦ 灰白色	エナメル質	緑青沈着？ 歯冠部のみ残存 第3大臼歯

Tab. 2 SF1出土の遺物（2）

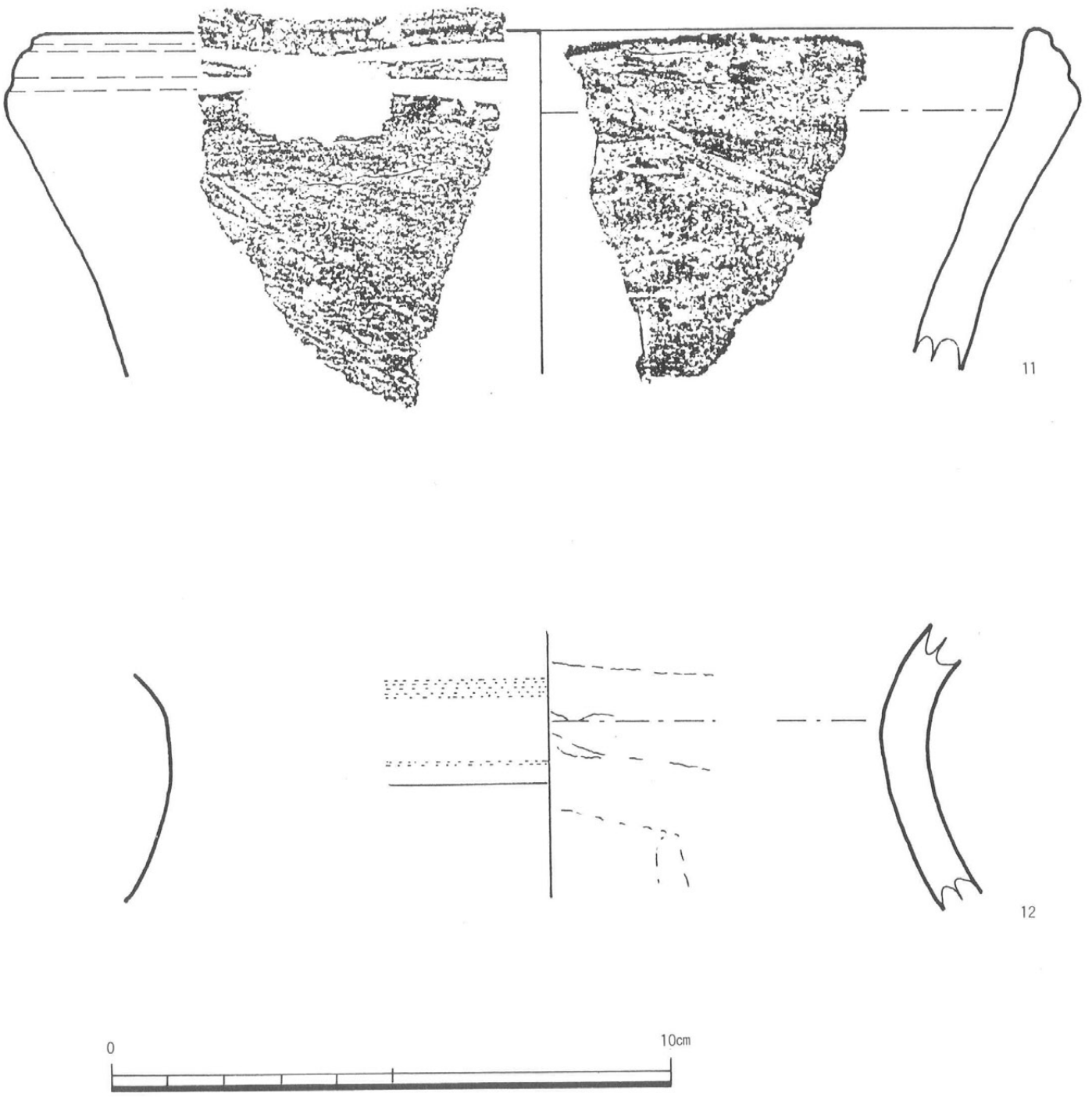


Fig.22　SF 1 出土の縄文・弥生式土器

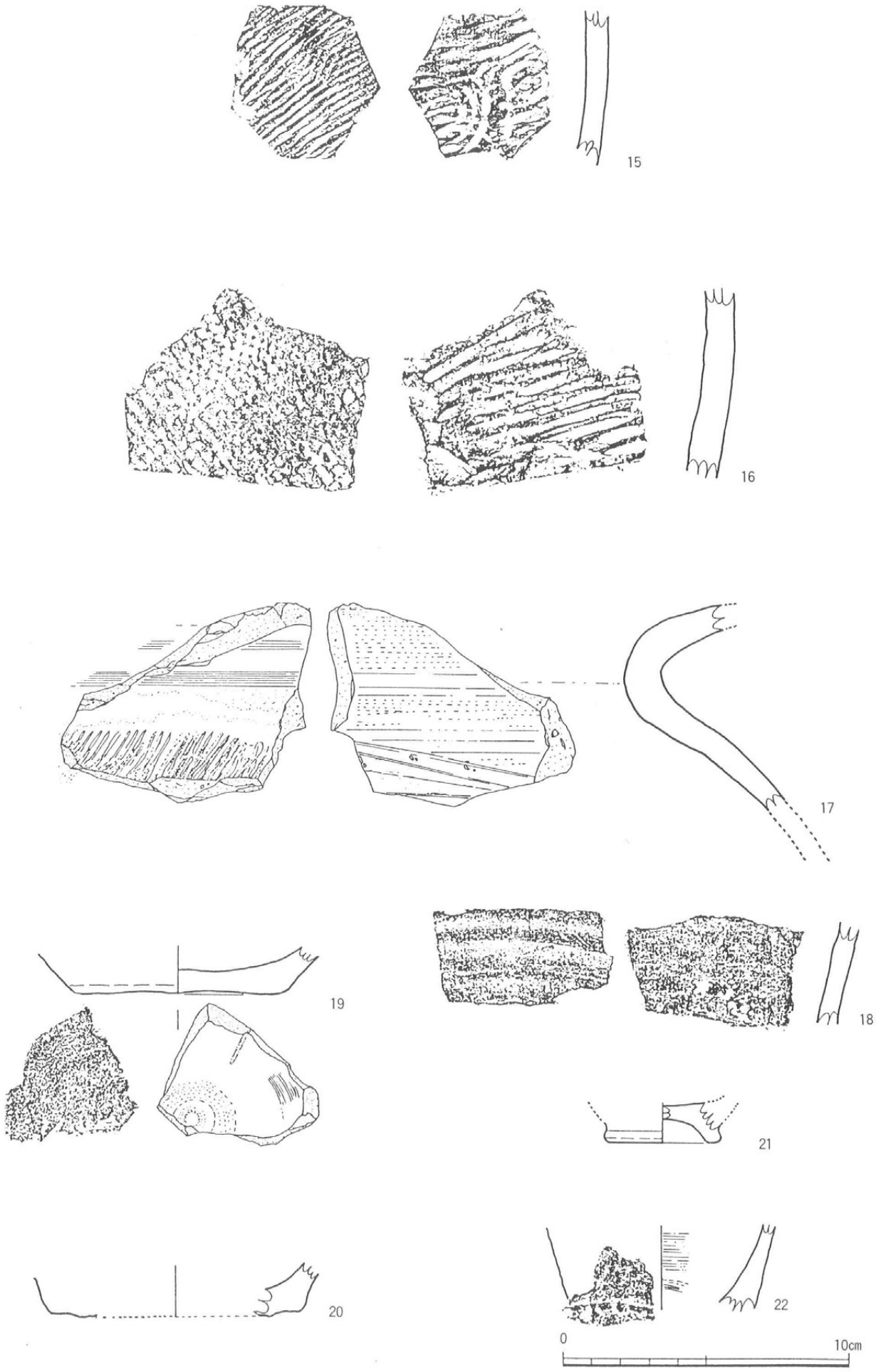


Fig.23　SF１出土の須恵・土師質土器

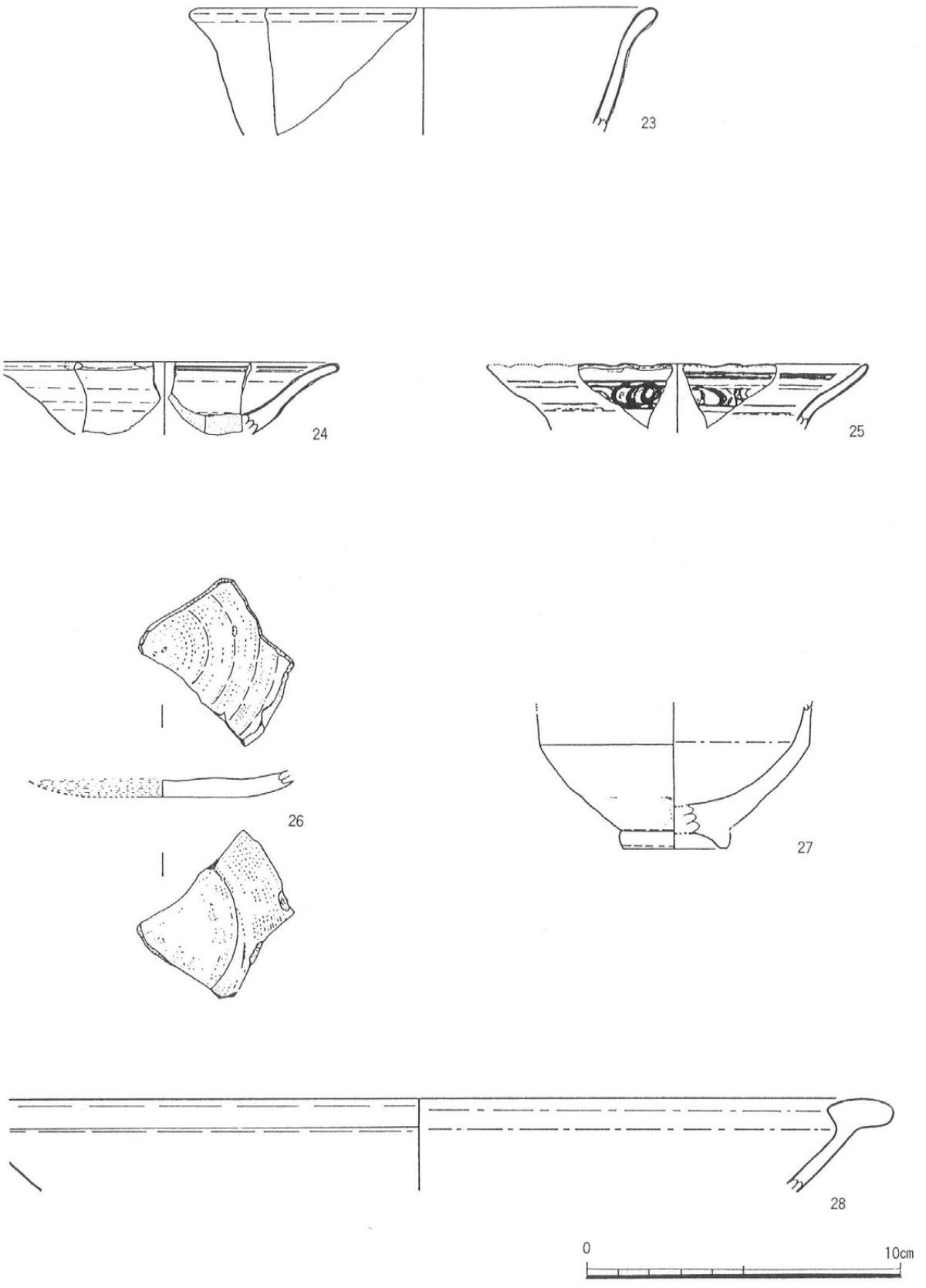


Fig.24　SF１出土の舶載磁器・近世陶器

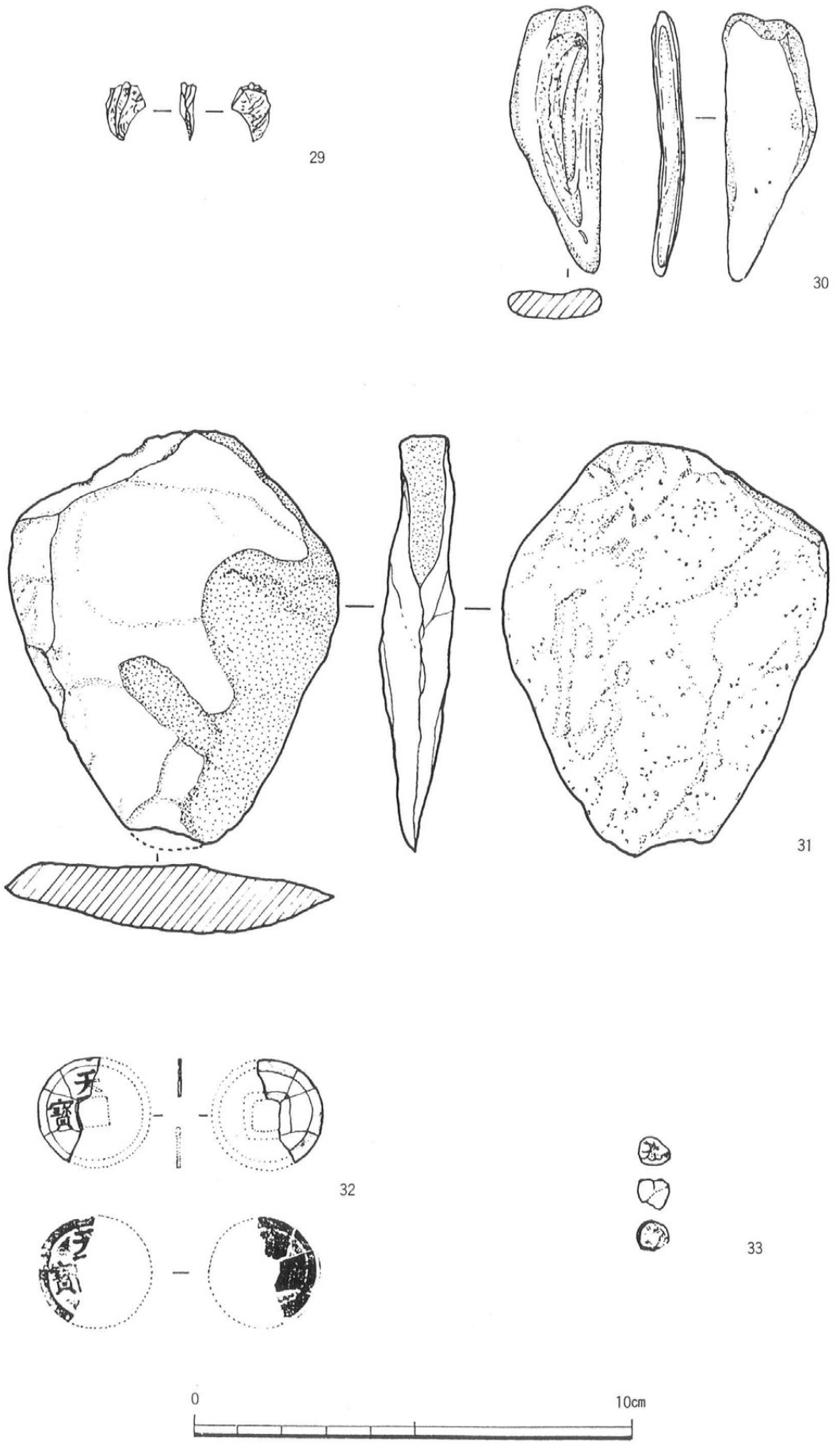
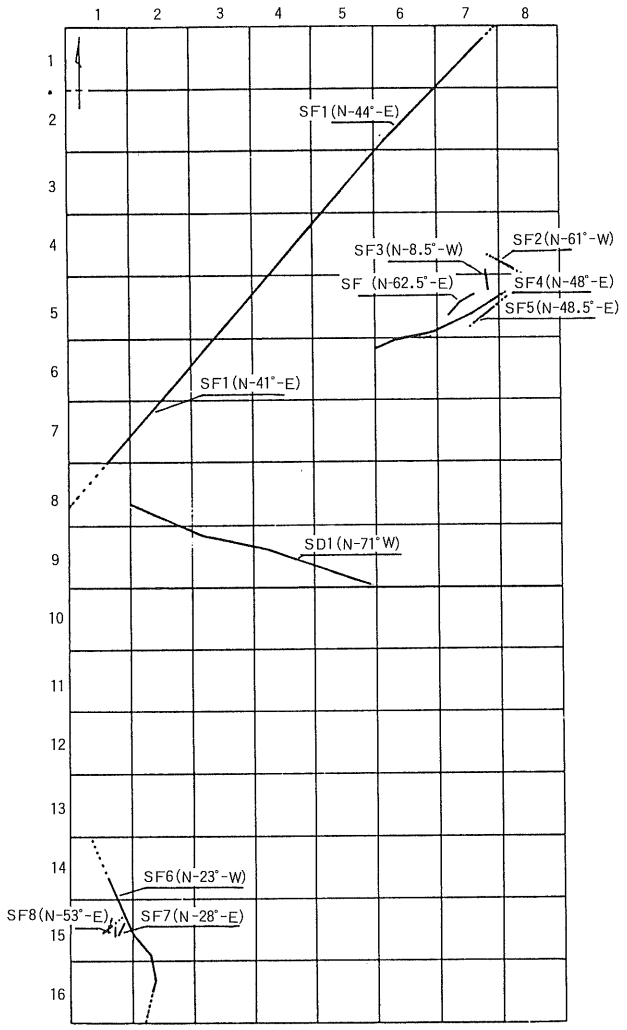


Fig.25　SF１出土の石器類・銭貨・人歯

遺構No	グリッド	検出面	規模			出土遺物	備考
			上面幅	底面幅	深(底面標高m)		
SF1	0-8～6-1	Ⅲ	2.30 1.60	1.10 0.75	0.90(157.100) 0.60(157.400)	29	検出全長96.70m 縦列のPitあり 遺物は古代末～中近世
SF2	7－4	Ⅳ	0.86	0.50	0.24(156.200)	0	全長2.00m 第1硬化面
SF3	6－4.5	Ⅳ	0.50	0.30	－(156.815)	0	全長3.30m 硬化面上
SF4	5-5～6-5	Ⅳ	2.00 0.70	0.75 0.42	0.40(156,100) 0.20(157.015)	1	全長21.50m Pitあり 土師小片
SF5	6－5	Ⅳ	0.30	0.30	0.16(156.580)	0	全長3.30m 硬化面上
SF6	0-14・1-16	Ⅳ	0.55	0.25	0.04(157.020)	2	全長19.20m Pitあり 縄文土器小片
SF7	0－15	Ⅳ	0.20	0.16	0.03(157.990)	0	全長0.35m
SF8	0－15	Ⅳ	0.54	0.40	0.05(157.930)	0	全長2.00m

Tab. 3　道路状遺構一覧表



Tab. 4　SF1～8，SD1主軸方向模式図

（2）　**ＳＦ２・３・５**（Ｆig. 26・27，ＰＬ．13）　これらは何れもⅢ区東南側に集中して検出された。ＳＦ２　枝道状の硬化面，全長2.00ｍを確認した。西側は攪乱のため不明。ＳＦ３これも同様の小規模のもので，硬化面を3.30ｍ検出した。なお両端は破壊されていた。ＳＦ５・ＳＦ４に沿う形で硬化面3.30ｍを確認した。以上の２・３・５道路状遺構からは遺物の出土はみなかった。

（3）　**ＳＦ４**（Ｆig. 26・27，ＰＬ．13）　上記同様にⅢ区内の南縁より確認された。ＳＦ１に次ぐ規模を有し，検出全長21.50ｍを測る。最深部の南側は溝状の掘形が存し，底面は硬化しており，これは平坦部に向かうに従い掘形も不分明となり，やがて枝道状の硬化面のみが残存していた。深部（南側の）に巾35㎝長さ60㎝の硬い土橋状の段が存在し，また西側の傾斜面にＰｉｔが７個検出された。これの形態は楕円形を呈し，規模は長径35～45㎝，短径20～30㎝，深さ８～8.5㎝，Ｐｉｔの中心間隔60～70㎝を測った。ＰｉｔはⅣ～Ⅴ層より検出され，その埋土は御池ボラ粒を混ずる暗褐色ですべて硬く，またこのＰｉｔもＳＦ１Ｐｉｔと同様に，鉄錆色が観察された。なおＰｉｔ内より土師質の極小片が出土したが，図示できるようなものではなかった。

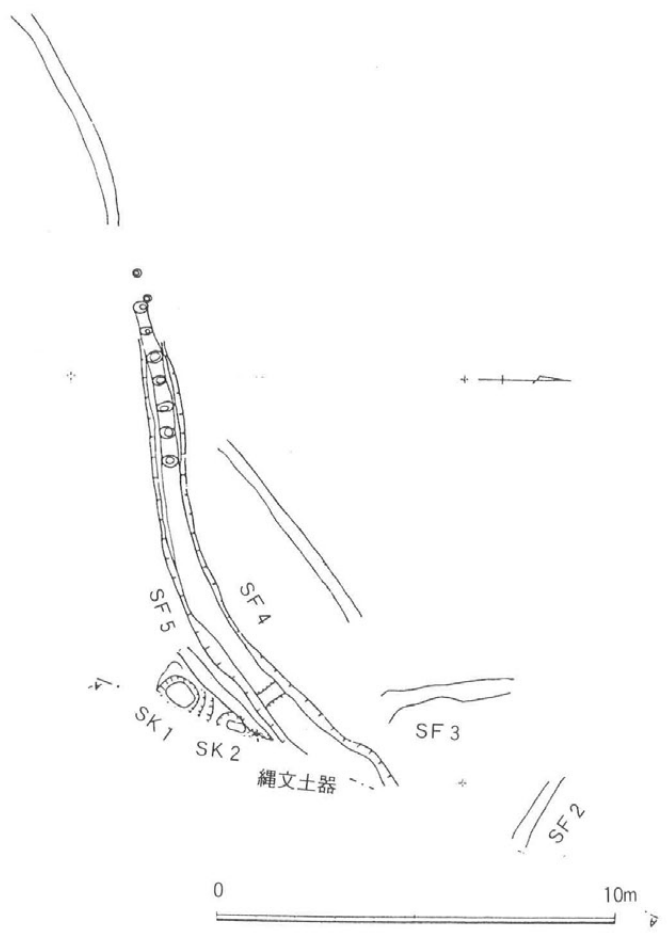


Fig.26　SF２～5, SK１・２平面図

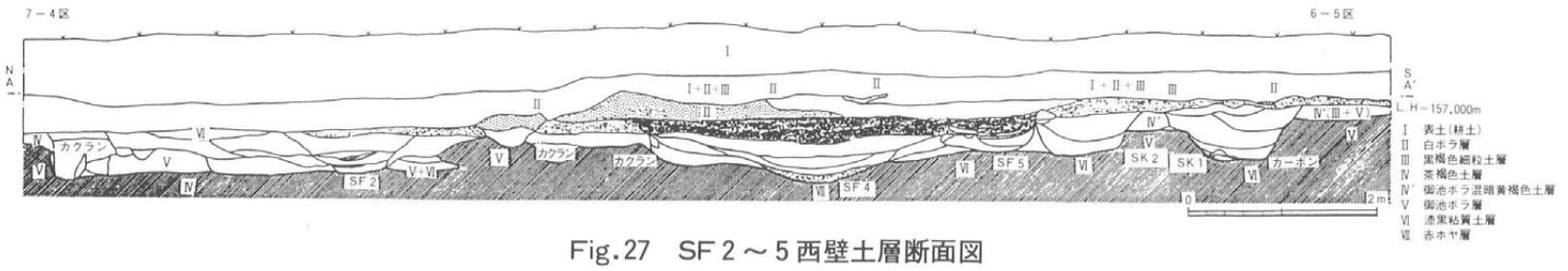


Fig.27　SF２～５西壁土層断面図

（4）　ＳＦ６（Fig. 28・29，ＰＬ．14）　本遺跡の南西部の調査区外より検出した。これも枝道状の小遺構で，南端の崖に落ちる傾斜面ではⅥ層（漆黒粘質土）に硬化面を確認。この部分は僅かながら溝状の掘形が認められた。これは北側に登るに従い，Ⅳ層の上面に硬化帯として検出された。この傾斜部分にほぼ円形の７個のＰｉｔがみい出された。これは長径25～30cm，短径25ｍ，深さ10cm程度を計り縦に連なる。またこの遺構の北西部は，現代の耕作により寸断しており，それより先は消滅していた。なお１区南端にＳＤ１（溝状遺構）が検出されたが，攪乱が甚だしかった。時期は近世後期のものと思われる。

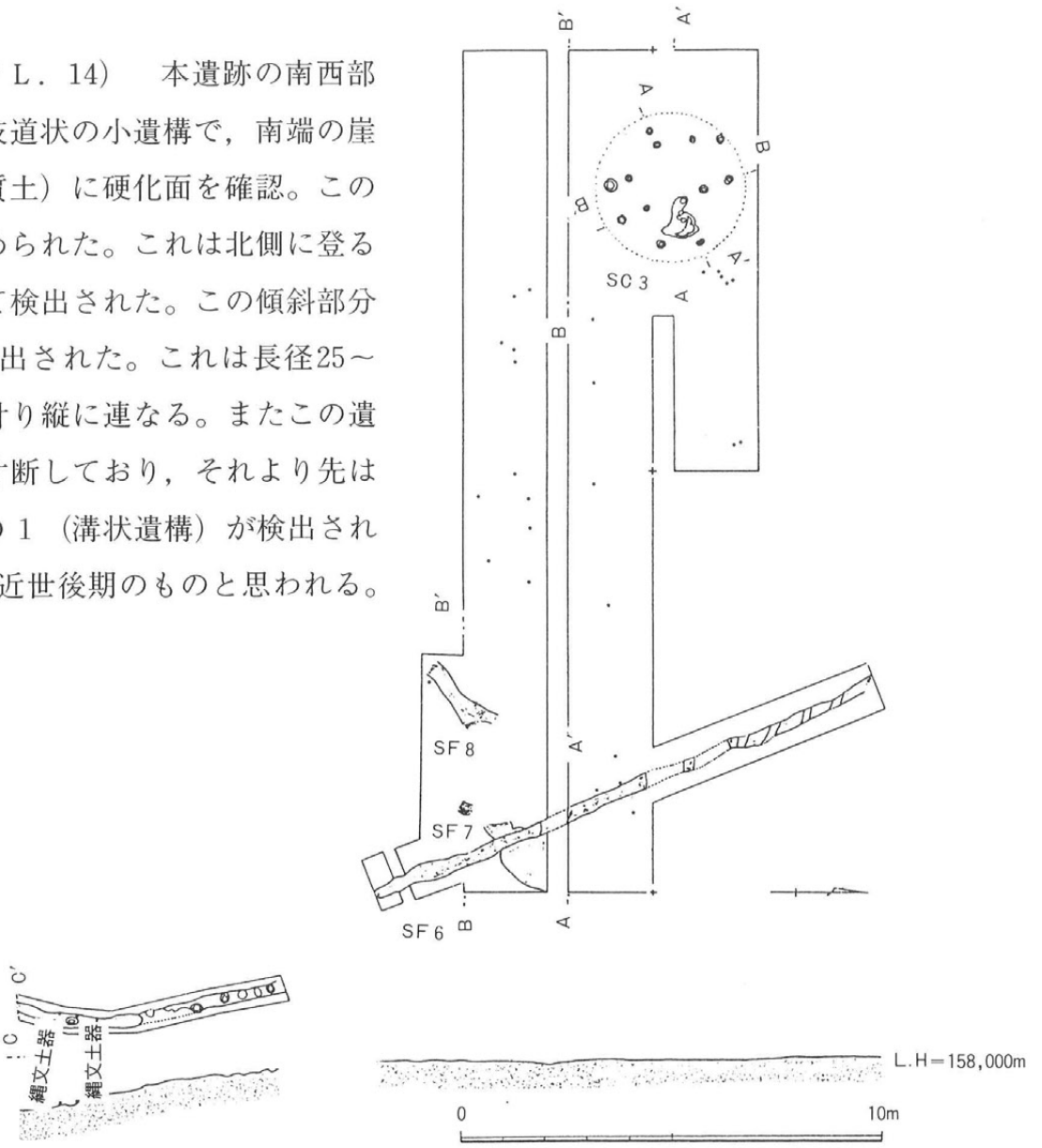


Fig.28　SF６平面・縦断面，SF７・８平面図

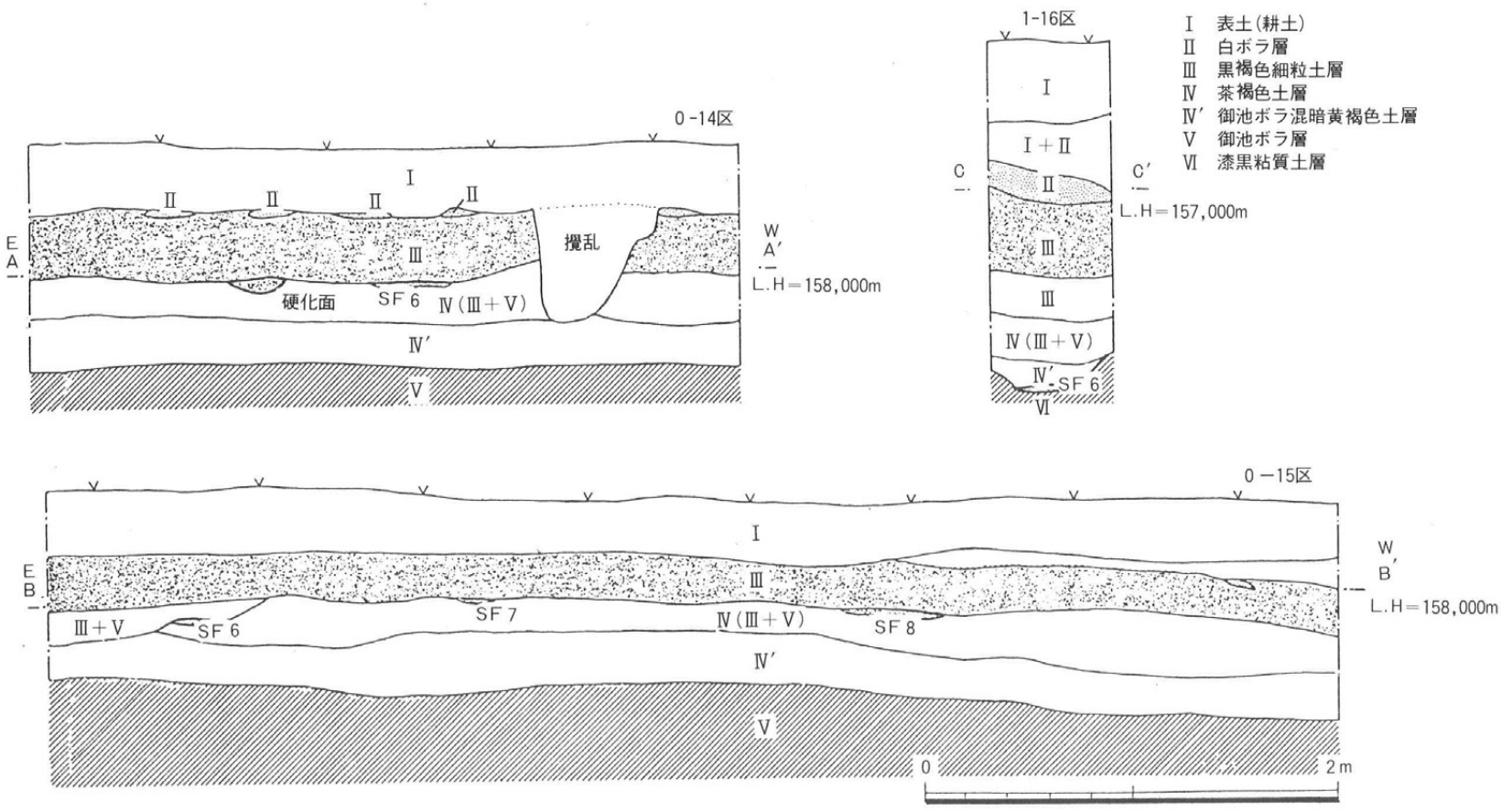


Fig.29　SF６～８北壁土層断面図

出土遺物（Fig. 30－⑬⑭，ＰＬ．26）

縄文式土器　南縁の傾斜する硬化面直上で検出された。何れも小破片であるが，13は器外面は褐灰色，内面は浅黄色を帯ぶ。胎土には透明鉱物・赤色鉱物が含まれている。14は外面は黒色を呈し，煤が付着している。器内面は灰褐色で，胎土に透明鉱物を混ずる。

（5）　ＳＦ７・８（Fig. 28・29，ＰＬ．14）　ＳＦ６同様の調査区外で検出したが，現代の攪乱が甚だしく，ＳＦ７は硬化面0.35m，ＳＦ８で2.00mを確認したのみである。ともに遺物の出土はなかった。

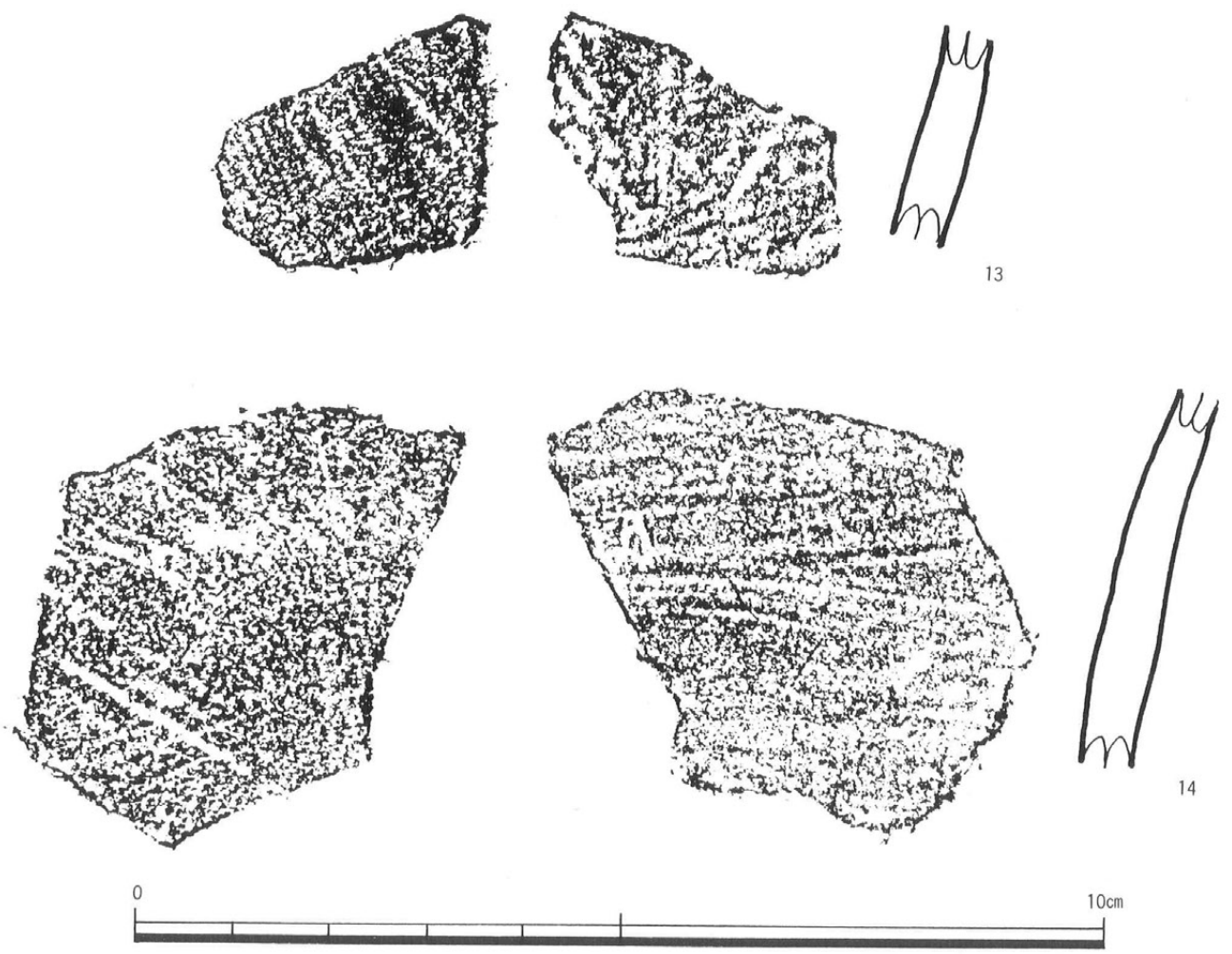


Fig. 30　SF６出土の縄文式土器

5．包含層出土の縄文・弥生・古墳・歴史時代の遺物

（1）　**縄文式土器**（Fig. 31～33, PL. 30～32）　各地点の包含層ならびに表面採集に関わる縄文土器数は決して多くはないが，その内22点を図示・表掲する。以下これらの遺物についてはⅣ小結で言及することにしたい。

挿図	図版	区・層	器種	測定値(cm) 口径	底径	器高	色調	調整・文様	胎土	備考
31－34	30－34	6－6 Ⅳ′	深鉢	－	－	－	褐色・にぶい橙色	㊥ ヨコ方向の貝殻条痕同刺突文，二枚貝腹縁 ㊦ ナデ	透明，白色の鉱物4㎜程度の礫含む	市木式系
31－35	30－35	0－6 Ⅳ′	深鉢	－	－	－	外面に煤付着橙色	㊥ ヨコ方向の貝殻条痕同刺突文，二枚貝腹縁	透明・白色鉱物含む	市木式系
31－36	30－36	6－6 Ⅳ′	?	－	－	－	橙色	㊥ タテ・ナナメ方向の貝殻条痕 ㊦ ナデ	透明・白色鉱物含む	市木式系
31－37	30－37	3－7 Ⅳ′	深鉢	－	－	－	にぶい橙・褐色	㊥ ヨコ方向の貝殻条痕　凹線文 ㊦ ナデ	透明・白色鉱物含む	市木式系
31－38	30－38	表面採集	深鉢？	－	－	－	黒色	㊥ ナデ　縄文 ㊦ ていねいナデ（ミガキ状）	透明鉱物	
31－39	30－39	3－7 Ⅳ′	深鉢	－	－	－	㊥ 淡褐色 ㊦ 灰黒色	㊥ ナデ　沈線文 ㊦ ていねいなナデ	透明鉱物，6㎜程度の砂粒含む	納曽式系？
31－40	30－40	3－7 Ⅳ′	深鉢	－	－	－	㊥ 橙色 ㊦ 褐色	㊥ ナデ　沈線文 ㊦ ナデ	透明鉱物，白色鉱物含む	納曽式系？
31－41	30－41	3－7 Ⅳ′	深鉢	－	－	－	㊥ 褐色 ㊦ 浅黄色	㊥ ナデ　沈線文 ㊦ 左方向のケズリ	透明鉱物	納曽式系？
31－42	30－42	表面採集	深鉢	－	－	－	にぶい橙色 ㊦ 灰黒	㊥ ナデ　口唇部に沈線・縄文，波頂部にキザミ ㊦ ナデ	石英，透明鉱物含む	西平式系
31－43	30－43	7－2 Ⅳ	深鉢	－	－	－	㊥ 暗褐色 ㊦ 橙・灰オリーブ	㊥・㊦ 共にていねいなナデ口唇部に沈線	黒雲母	西平式系
31－44	30－44	5－2 Ⅳ	深鉢	－	－	－	㊥ 暗褐色 ㊦ 褐色	㊥ ナデ　沈線文 ㊦ ていねいなナデ	黒雲母・白色鉱物	西平式系 器壁にドングリの実痕
32－45	31－45	5－6 Ⅳ	深鉢	(21.7)	－	－	㊥ 暗褐色，黒色 ㊦ 灰褐色	㊥ 口縁ヨコ方向のナデ，同下ヨコ方向のミガキ ㊦ ヨコ方向のミガキ，ナデ	透明鉱物・黒色鉱物・長石	中岳式系
32－46	31－46	5－8 Ⅳ	鉢・深鉢	(23.4)	－	－	㊥ 橙色 煤付着 ㊦ 灰オリーブ	㊥ 上，ヨコ方向ミガキ，下タテ方向ミガキ ㊦ ていねいなナデ	黒色鉱物，透明鉱物，軽石粒含む	中岳式系
33－47	32－47	0－11 Ⅳ	浅鉢	(19.2)	－	－	㊥ 灰オリーブ ㊦ 灰オリーブ	㊥ ヨコ方向のミガキ ㊦ ヨコ方向のミガキ	微砂粒，透明鉱物含む	黒川式系
33－48	32－48	表面採集	浅鉢	－	－	－	㊥ 灰黒色 ㊦ 灰色	㊥ ヨコ方向のミガキ ㊦ ナデ	微砂粒，透明鉱物含む	黒川式系
33－49	32－49	6－7 Ⅳ	鉢　?	－	－	－	㊥ 灰色 煤付着 ㊦ 黒色	㊥ ミガキ ㊦ ヨコ・タテ方向ミガキ	微砂粒含む	黒川式系
33－50	32－50	0－15 Ⅳ	浅鉢	－	－	－	㊥ 灰褐色 ㊦ 灰オリーブ	㊥ ヨコ方向ミガキ ㊦ ヨコ方向ミガキ	微砂粒含む	黒川式系
33－51	32－51	表面採集	浅鉢	－	－	－	㊥ 灰褐色 ㊦ 暗褐色	㊥ ヨコ方向ミガキ ㊦ ヨコ方向ミガキ	微砂粒含む	黒川式系
33－52	32－52	8－14 Ⅳ	深鉢	－	－	－	㊥ 灰褐色 煤付着 ㊦ 灰オリーブ	㊥ ナデ ㊦ ナデ	透明鉱物，砂粒含む	
33－53	32－53	3－7 Ⅳ	深鉢？	－	－	－	㊥ 暗褐色 煤付着 ㊦ 浅黄，黒斑あり	㊥ ヨコ方向のナデ ㊦ ナデ	透明鉱物	
33－54	32－54	表面採集	深鉢	－	－	－	㊥ 橙色 ㊦ 灰色	㊥ ヨコ方向ナデ 口唇部に指キザミ(指爪痕) ㊦ ヨコ方向にていねいなナデ	微砂粒含む	夜臼式系

Tab. 5　包含層出土の縄文式土器一覧表

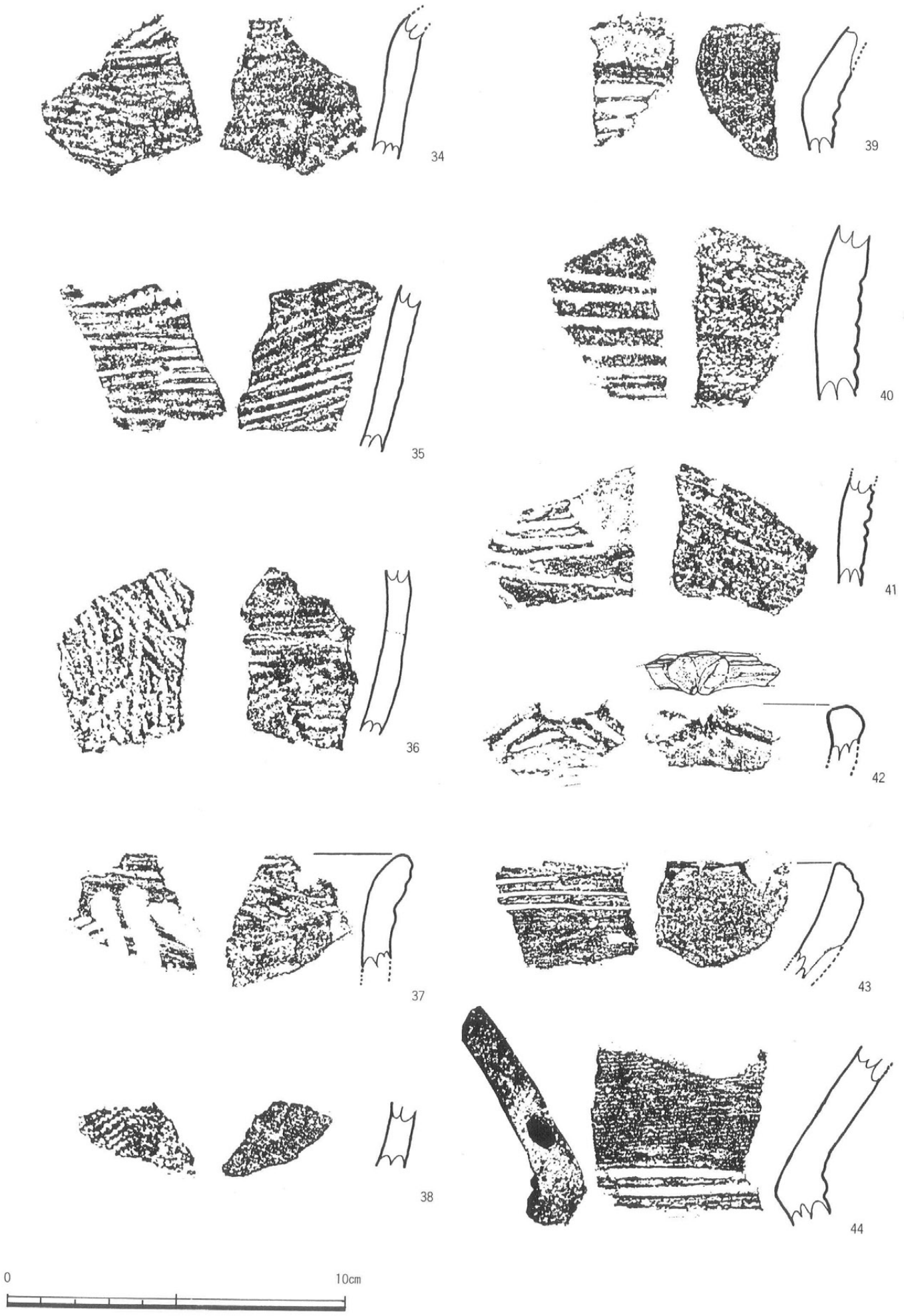
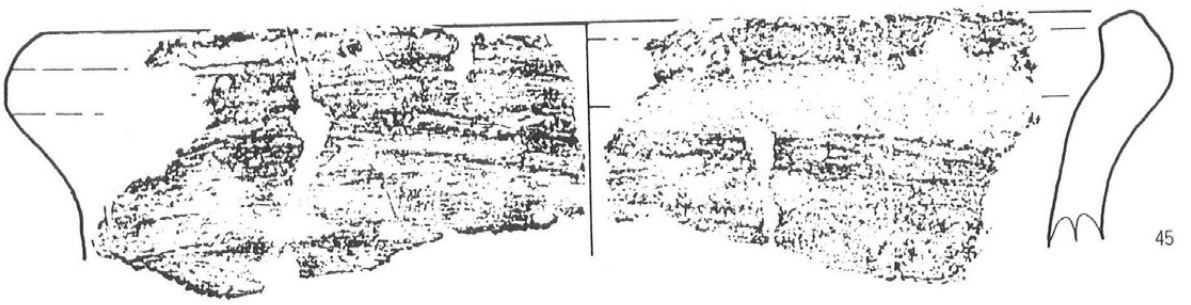


Fig.31　包含層出土の縄文式土器(1)



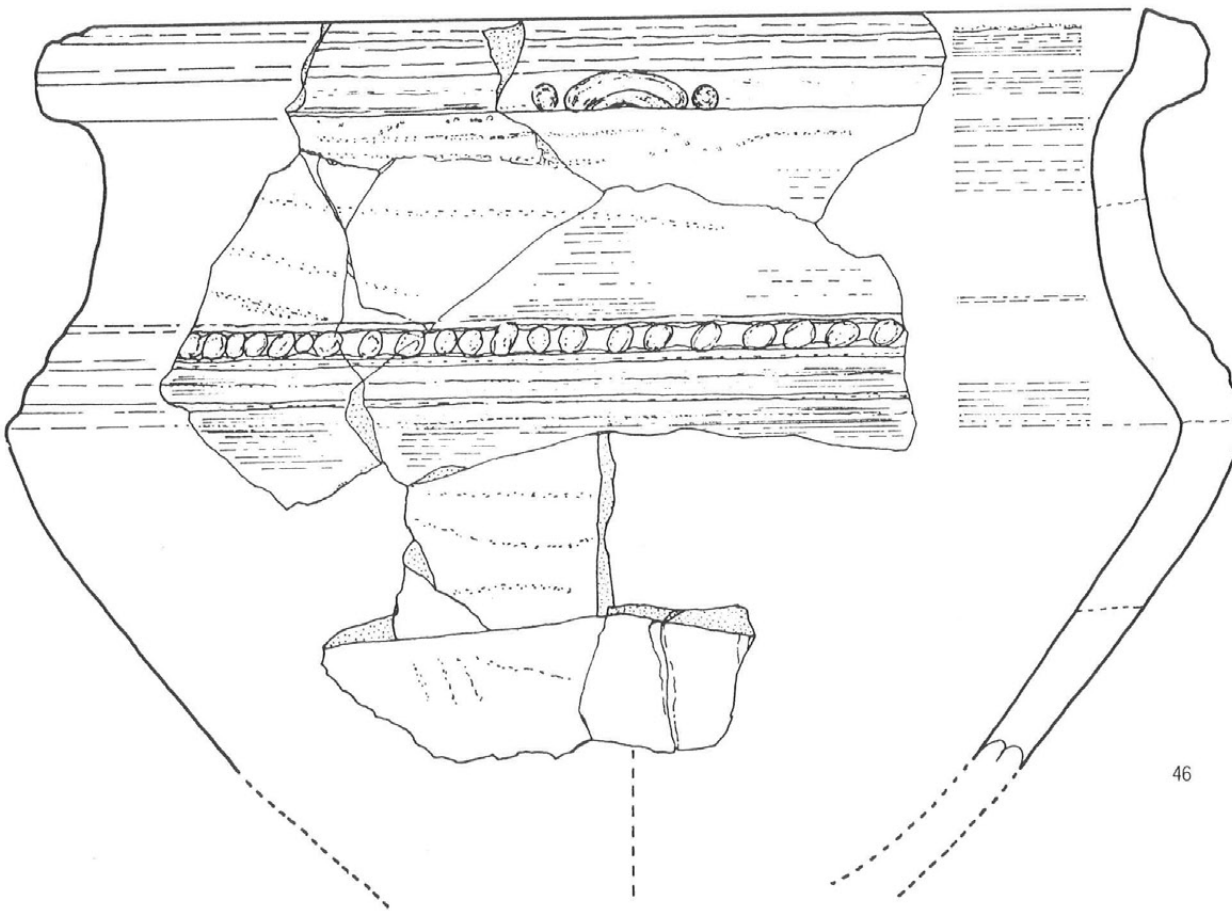


Fig.32　包含層出土の縄文式土器(2)

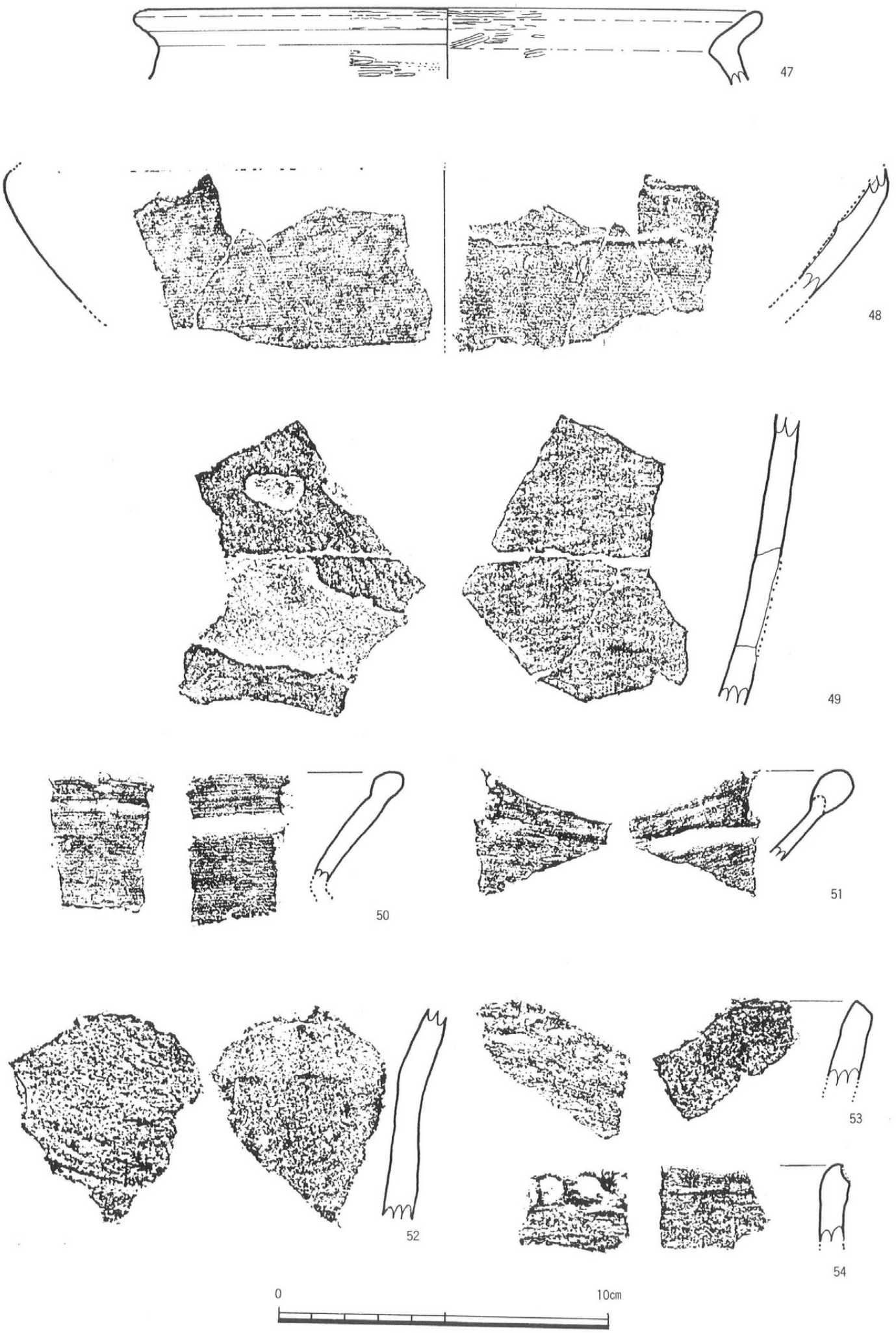


Fig.33　包含層出土の縄文式土器(3)

（2） **弥生式土器**（Fig. 34・35, PL. 33・34） 調査区内の包含層および表面採集の弥生土器は，掲示できるものは僅少である。いまその特徴などを要括すれば下表のごとくである。なおこれについての所見も小結でふれることにする。

挿図	図版	区・層	器種	測定値(cm)			色調	調整	胎土	備考
				口径	底径	器高				
34－55	33－55	4－7 Ⅳ	壺	－	－	－	外 浅黄，淡橙色 内 灰色	外 ミガキ　沈線あり 内 ミガキ	微砂粒	
34－56	33－56	試2 T Ⅳ	甕	(26.2)	－	－	外 灰オリーブ,煤付着 内 灰褐色	外 上ヨコ方向のミガキ,下タテ方向のミガキ 内 タテ方向ミガキ，上半は磨滅	透明鉱物	
34－57	33－57	試2 T 1－5 Ⅳ'	甕	(30.7)	－	－	外 黒色 内 灰色	外 タテ方向ミガキ 内 ナデ	粗い，透明鉱物，黒色鉱物	口縁に突起状
34－58	33－58	－1－15 Ⅳ	甕	－	－	－	外 黒色，炭化物付着 内 灰オリーブ	外 ていねいなナデ 内 ナデ	透明鉱物	SC2－④との類似
35－59	34－59	2－4 Ⅳ	壺	(12.2)	－	－	外 橙色 内 灰褐色	外 ヨコ方向ミガキ　沈線あり 内 ていねいなナデ	黒雲母 石英	
35－60	34－60	－1－14 Ⅳ	壺	(12.6)	－	－	外 暗褐色 内 橙色	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	黒雲母 石英	
35－61	34－61	0－15 Ⅳ	甕	(24.8)	－	－	外 褐灰色,灰オリーブ 内 橙色	外 ヨコ方向ナデ，口唇はヨコナデ 内 ナデ	黒雲母 石英	
35－62	34－62	－1－14 Ⅳ	甕	(27.2)	－	－	外 褐色，淡橙色 内 淡橙色	外 ヨコナデ 内 ていねいなナデ	黒雲母 石英	
35－63	34－63	0－15 Ⅳ	甕	(25.3)	－	－	外 暗褐色 内 褐色	外 ヨコナデ 内 ていねいなナデ	黒雲母 石英	
35－64	34－64	－1－15 Ⅳ	甕	(16.7)	－	－	外 橙色，煤付着 内 橙色	外 ヨコナデ 内 ナデ	黒雲母 石英	
35－65	34－65	0－15 Ⅳ	甕	－	－	－	外 淡橙，浅黄色 内 灰色，炭化物付着	外 上タテ方向ミガキ，下タテ方向ハケ目 内 ナデ	石英 透明鉱物	
35－66	34－66	4－2 Ⅳ	甕	－	－	－	外 浅黄，灰白色 内 浅黄色	外 ていねいなナデ 内 ナデ	粗い砂粒 目立つ	

Tab. 6　包含層出土の弥生式土器一覧表

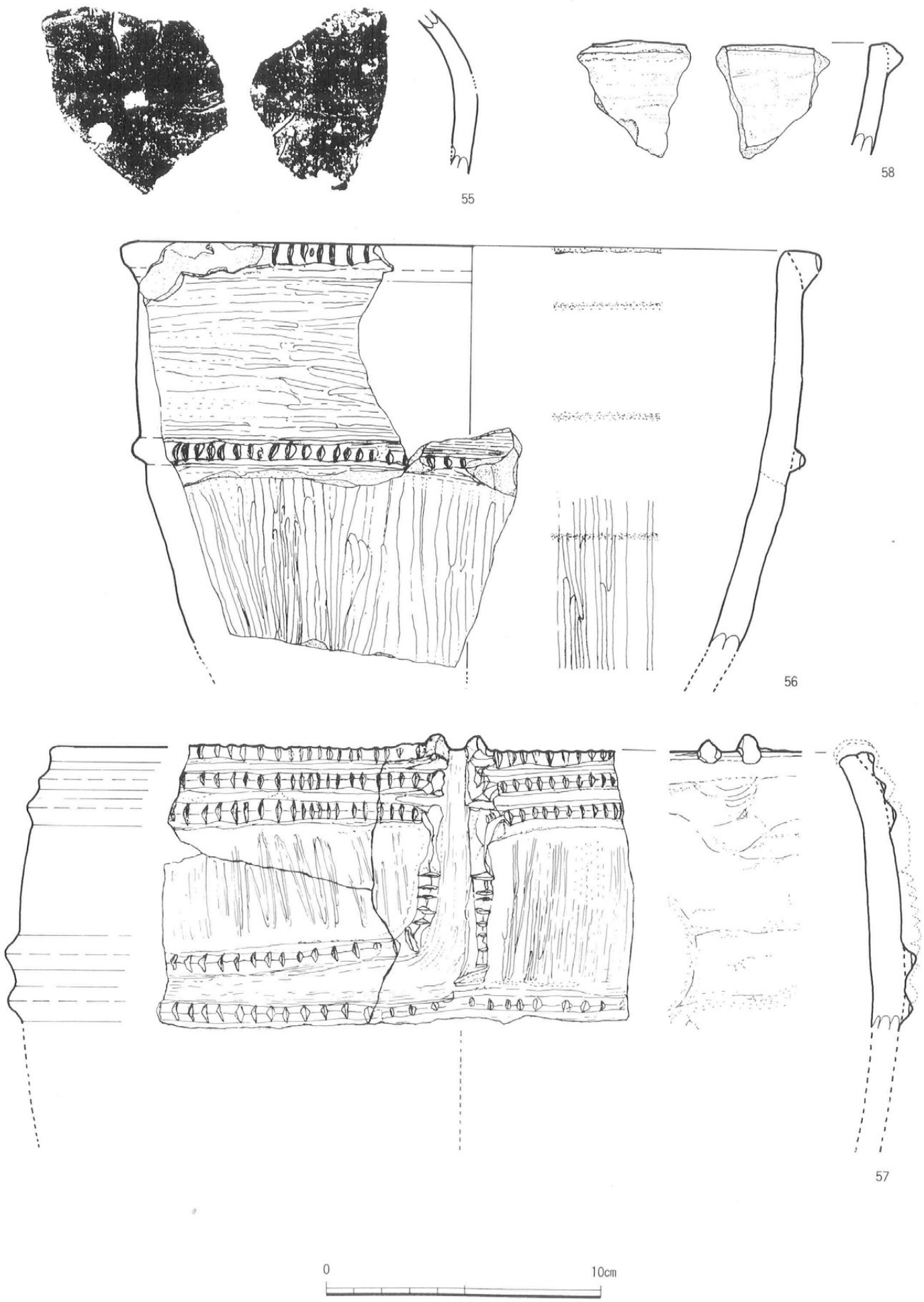


Fig.34　包含層出土の弥生式土器(1)

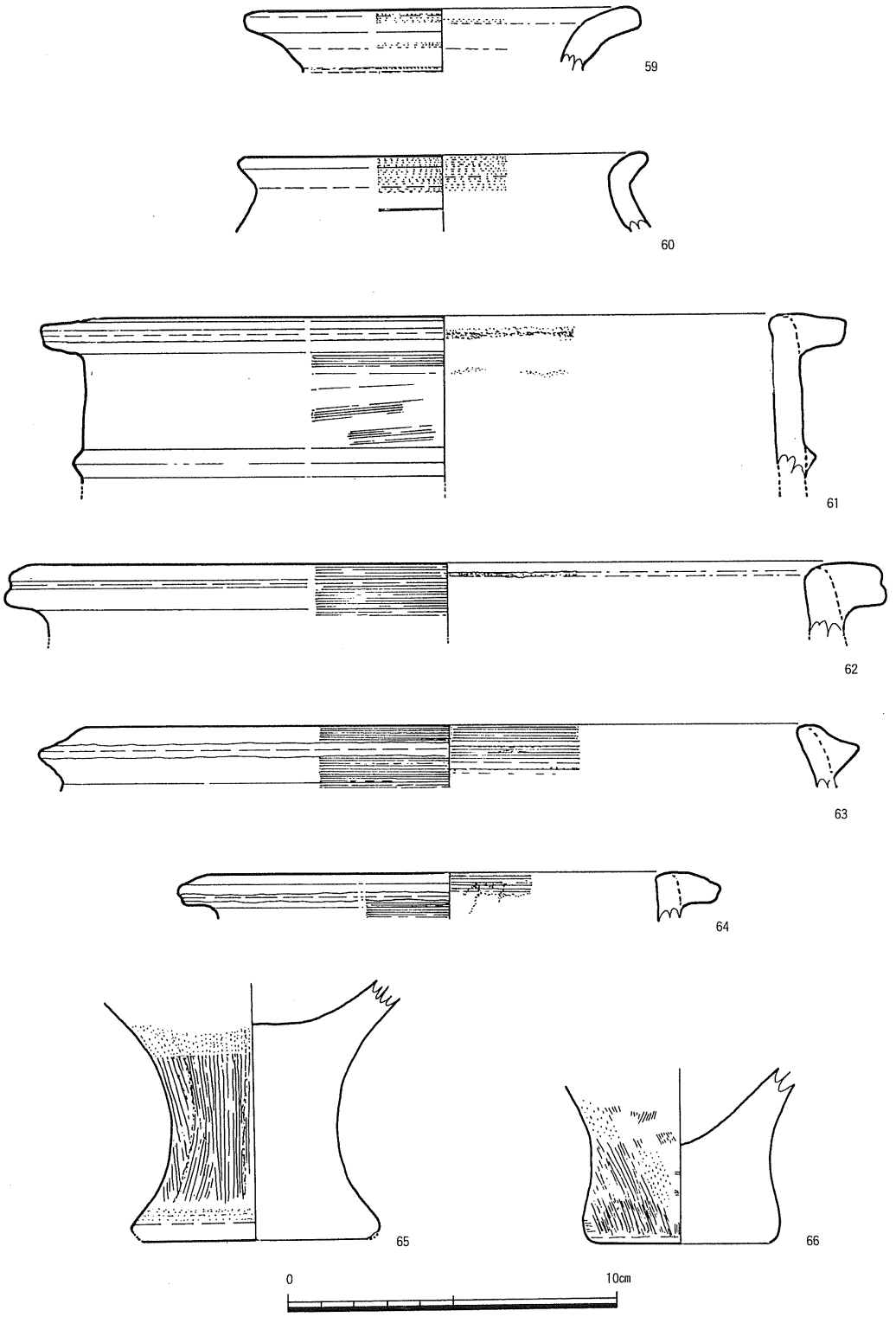


Fig.35　包含層出土の弥生式土器(2)

その他の土製品（Fig. 36－㊼・㊽，ＰＬ．35）　該期のものかどうか不明であるが，以下の２点は便宜ここに収めた。

土錘　０－７区Ⅰ層（耕土）より出土した。長さ4.6cm，中央径1.4cm，孔径3.5cm，重さ7.98ｇを測る。紡錘形の土錘で，表面の⅓は浅黄色を呈し，他は灰黒色である。表面は丁寧なナデで調整してあり，中央に円孔を穿っている。両端部には使用による擦痕がみられる。なお胎土は精良で透明鉱物を少し含む。

円盤状土製品　３－７区Ⅳ層出土。外面は浅黄色を帯び，裏面は灰色を呈する。両側面に抉り１個ずつが存するが，片面は欠失している。調整は周辺部を打ち欠き，壁面を擦りほぼ円形に仕上げてある。胎土には石英を多く混ずる。最大径3.2cm，厚さ0.75cm，重さ5.53ｇを計る。小に過ぎるが，土器片再利用の土錘的要素が考えられる。

（３）　古墳時代の土器（Fig. 36，ＰＬ．35）

高坏　調査区外の０－16区Ⅳ層出土。外内面ともに浅黄・橙色を呈し，坏は下面に突起（芯）を造り出し，これを脚部の上面に嵌込んである。この芯の下面には，指頭による押圧痕が観察され，脚部の内面はヘラによるしぼり痕がある。外面は丁寧なナデ仕上げとなっている。また脚部の裾部は極端に開く。時期はおそらく古墳時代の中期に位置づけられよう。

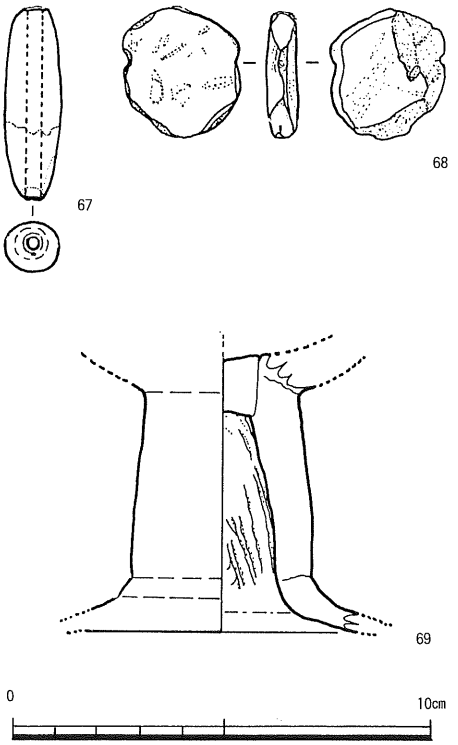


Fig.36　包含層出土の土製品・古墳時代の土器

（4） **古代・中世の土器・舶載磁器**（Fig. 37～39, PL. 36～38） ここではかわらけ類（㉒・㉓），須恵器（⑩・⑪），中世に中国より舶載された磁器（㉔～㊾）を一括して掲示する。

挿図	図版	区・層	種別 器種	測定値(cm) 口径	底径	器高	色調	特徴	備考
37－70	36－70	4－4 Ⅰ	須恵器	－	－	－	㊥ 明褐色 ㊦ 灰褐色	㊥ 格子目タタキ ㊦ 青海波(同心円)タタキ	平安期
37－71	36－71	表面採集	須恵器椀	－	高台径 (7.1) (7.4)	－	灰色	㊥ 回転ナデ ㊦ ヘラ状工具ナデ，体部と高台の境を強く押えナデ，稜あり，畳付を丸く仕上げ	平安期
37－72	36－72	－1－14 Ⅰ	土器 土師皿	－	(2.7)	－	㊥ 浅黄色 ㊦ 灰オリーブ色	㊥ ㊦ 回転ナデ，糸切り底，胎土精良	16C
37－73	36－73	0－15 Ⅰ	土器 土師坏	－	(4.5)	－	淡橙色	㊥ ロクロ痕ナデ，糸切り底 ㊦ ロクロ痕ナデ，胎土良	16C
38－74	37－74	0－15 Ⅰ	磁器 青花碗	(14.6)	－	－	淡青色	㊥ ヘラ描文 ㊦ 全体貫入入る	明代前半
38－75	37－75	0－15 Ⅰ	磁器 青花碗	－	(7.2) (6.0)	－	淡緑色	高台施釉，底露胎	
38－76	37－76	0－15 Ⅰ	磁器 青花碗	(9.8)	－	－	淡赤褐色	㊥ ヘラ描鎬蓮弁，全体貫入入る 焼成不良	
38－77	37－77	表面採集	磁器 青花碗	－	(5.1) (4.5)	－	淡緑色	全体貫入，高台施釉	
38－78	37－78	0－11 Ⅰ	磁器 青磁皿	(9.8)	－	－	淡緑色	全体貫入入る	
38－79	37－79	4－4 Ⅰ	磁器 青磁皿	－	－	－	淡青緑色	稜花皿，㊦ ヘラ描文，全体貫入	
38－80	37－80	－1－15 Ⅰ	磁器 青磁皿	－	－	－	灰緑色	腰折皿，全体貫入	
38－81	37－81	5－6 Ⅰ	磁器 青磁小皿	－	(2.8) (2.1)	－	淡青色	㊥ 蓮弁文，全体貫入，底露胎	明代
38－82	37－82	表面採集	磁器 青白磁皿	(8.0)	－	－	青白色	口唇鎬， ㊥㊦ 型押し菊花文 全体貫入	
39－83	38－83	5－6 Ⅰ	磁器 青白磁皿	(11.6)	(5.5) －	－	淡青白色	㊥ 口縁下に二重圏線， 外面下部無釉	
39－84	38－84	表面採集	磁器 白磁皿	－	4.0 3.4	－	灰白色	見込みに目痕，切高台，底無釉	摩耗甚しい
39－85	38－85	表面採集	磁器 白磁皿	－	5.3 4.2	－	濁白色	高台露胎	
39－86	38－86	2－5 Ⅰ	磁器 青花碗	(10.0)	－ (3.6)	－	青白色	㊥ 文字文様？文様下に二重の圏線 ㊦ 二重圏線，見込みに印章文様，碁笥底	15C末～16C中葉
39－87	38－87	5－6 Ⅰ	磁器 青花碗	(9.8)	－	－	青白色	㊥ 口縁下一重，下部に二重圏線 ㊦ 口縁下一重，見込みに二重の圏線	
39－88	38－88	表面採集	磁器 青花碗	－	－	－	青白色	端反り碗，口縁下に重圏線， 如意頭文	15C末～16C中葉
39－89	38－89	5－5 Ⅰ	磁器 青花碗	－	－	－	青白色	蓮子碗，㊥ 波濤文？ ㊦ 下面に重圏線	15C末～16C中葉

Tab. 7 包含層出土の古代・中世土器・舶載磁器一覧表

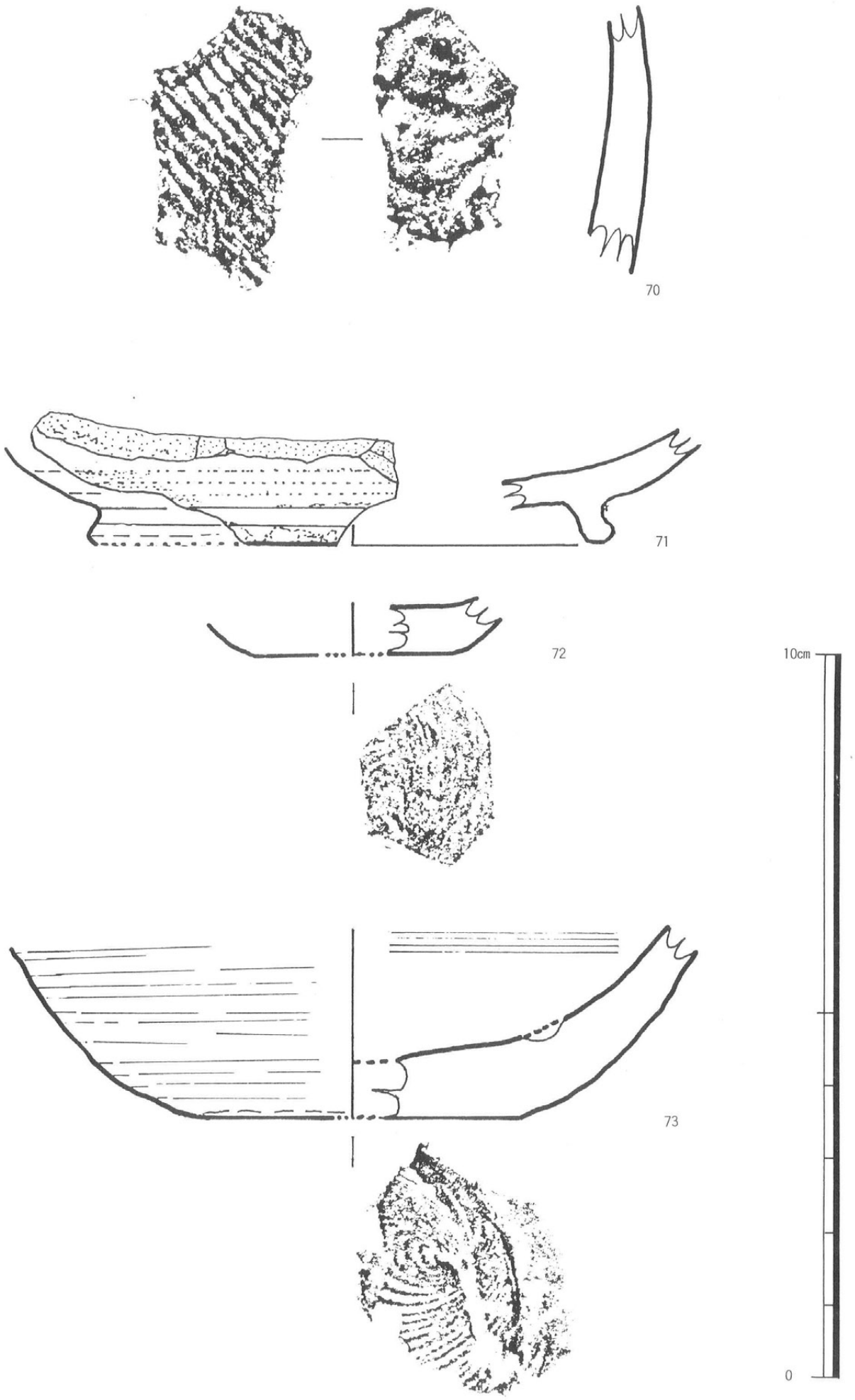


Fig.37　包含層出土のカワラケ・須恵器(1/1)

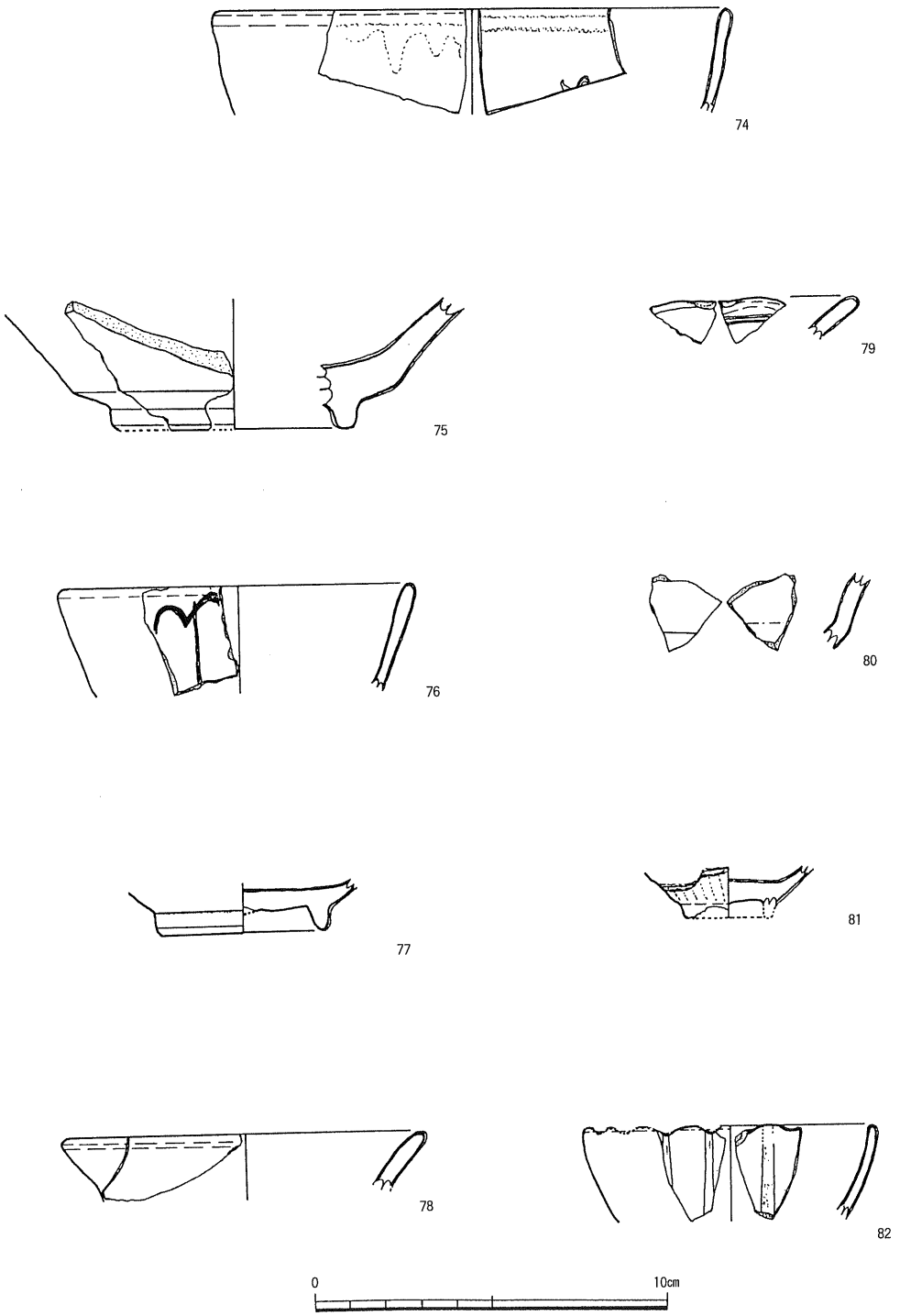


Fig.38　包含層出土の舶載磁器（1）

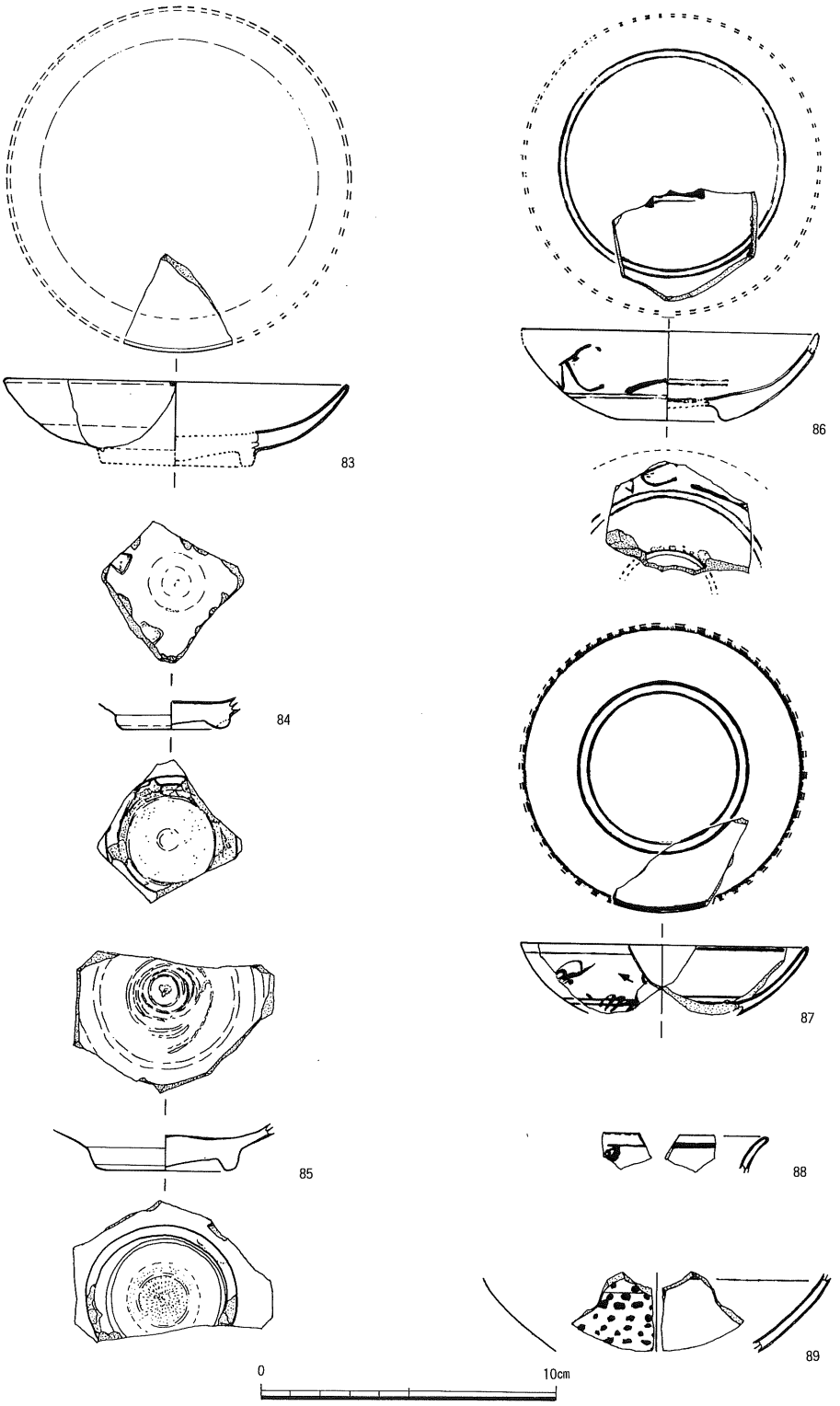


Fig.39　包含層出土の舶載磁器(2)

（5） 近世の国産陶磁器（Fig. 40・41, PL. 39・40） 肥前系磁器（⑩・⑪），在地系の陶磁器（⑫～⑫）の23点を表示すると次のようになる。

挿図	図版	区・層	種別 器種	測定値(cm) 口径	底径	器高	色調	特徴	備考
40－90	39－90	5－7 Ⅰ	磁器 小皿	(4.0)	高台径 1.5 1.0	1.2	灰白色	紅皿，㋐ 下面露胎，ヘラ描菊花文 ㋒ 白色釉，畳付に一部釉かかる	18C前半 肥前系
40－91	39－91	表面採集	磁器 染付碗	－	5.1 4.6	－	淡青白色	広末碗，㋐ 高台上面に文様，高台に二重圏線，底に文様 ㋒ 見込み重圏線内に文様	1780年～1800年 肥前系
40－92	39－92	0－11 Ⅰ	陶器 染付碗	－	4.7 4.5	－	灰青色	㋐ 高台上面に重圏線，畳付露胎 全体貫入入る，胎土暗灰色	摩耗甚しい 薩摩系？
40－93	39－93	8－19 Ⅰ	磁器 染付碗	(10.4)	(3.5) －	6.9	淡青白色	㋐ 口縁下に重圏線，格子目文様，高台上面に二重圏線，高台に重圏線 ㋒ 口縁下に二重圏線，松葉文様，見込みに重圏線，目痕	薩摩系？
40－94	39－94	1－13 Ⅰ	磁器 碗	(8.8)	－	－	灰白色	端反り，胎土は精良で淡白色	薩摩系？
41－95	40－95	6－3 Ⅰ	陶器 甕	－	－	－	茶褐色	㋐ 口唇部の凹面無釉， 胎土は石英・長石を含む	薩摩系
41－96	40－96	－1－14 Ⅰ	陶器 碗	－	(3.2) (2.6)	－	淡褐色	全体施釉，胎土は精良で灰褐色	薩摩系 龍門司窯？
41－97	40－97	－1－14 Ⅰ	陶器 碗？	－	(4.1) (3.0)	－	㋐ 黄褐色 ㋒ 灰白色	高台の下面，底は露胎，胎土は明褐色で白色鉱物が混る	薩摩系
41－98	40－98	6－2 Ⅰ	陶器 飲食器	－	3.0 3.8	－	㋐ 高台～腰部茶褐色，上は灰白色 ㋒ 灰白色	㋐ 釉内貫入，高台露胎，底ロクロ目痕 ㋒ 釉内貫入，砂粒付着，胎土は淡褐色で白色鉱物多混	薩摩系
41－99	40－99	4－4 Ⅰ	陶器 擂鉢	－	－	－	㋐ 茶褐色 ㋒ 暗褐色	㋐ ロクロ目痕，褐釉，胎土は赤褐色で砂粒を含む ㋒ 櫛目は縦位，一部交叉	薩摩系
41-100	40-100	6－3 Ⅰ	陶器 土瓶(蓋)	(4.5)	底径 6.2	－	㋐ 明褐色 ㋒ 赤褐色	つまみ欠失，胎土は長石・石英を含む	薩摩系
41-101	40-101	－1－14 Ⅰ	陶器 土瓶(蓋)	(6.0)	8.5	－	㋐ 明褐色 ㋒ 淡褐色	つまみ欠失，褐色釉， 胎土は赤褐色で長石・石英多混	薩摩系
41-102	40-102	1－13 Ⅰ	陶器 土瓶(把手)	－	－	－	㋐ 黒褐色 ㋒ 淡灰茶色	径0.6cmの円孔を穿つ，飴釉，胎土は赤褐色， 長石・石英を含む	薩摩系
41-103	40-103	0－14 Ⅰ	陶器 土瓶(身)	－	－	－	㋐ 茶褐色 ㋒ 赤褐色	㋒ 下面無釉，胎土は赤褐色で長石が混る	薩摩系
41-104	40-104	表面採集	陶器 土瓶(注口)	－	－	－	㋐ 暗茶褐色 ㋒ 黄褐色	注口・身の接合部に ⁂ の円孔を穿つ， 注口の下面無釉，胎土赤褐色で長石含む	薩摩系
41-105	40-105	表面採集	陶器 土瓶(注口)	－	－	－	明褐色	㋐ 滑沢あり，内面の身・注口の接合部に⁂の小円孔を穿ち，その上面の一部は露胎	薩摩系
41-106	40-106	2－5 Ⅰ	陶器 土瓶(注口)	－	－	－	紫褐色	胴部と注口の接合部に ⁂ 形の小孔を穿つ， 胎土は暗灰褐色	薩摩系
41-107	40-107	5－2 Ⅰ	陶器 土瓶(注口)	－	－	－	茶褐色	身・注口の貼付部分に上下楕円形の二孔を穿つ， 胎土赤褐色	薩摩系
41-108	40-108	1－13 Ⅰ	陶器 土瓶(底)	－	－	－	㋐ 明褐色 ㋒ 暗黄茶色	脚貼付，脚附近に煤付着，胎土赤褐色， 白色鉱物混る	薩摩系
41-109	40-109	2－5 Ⅰ	陶器 土瓶(底)	－	(4.4)	－	㋐ 黒褐色 ㋒ 明褐色	㋐ 下面より碁笥底状の部分は無釉，上面は黒褐色釉 ㋒ 褐色釉，胎土は灰褐色で黒色鉱物多混	薩摩系
41-110	40-110	5－7 Ⅰ	陶器 急須(蓋)	2.6	6.6	2.8	㋐ 濁白色 ㋒ 灰オリーブ色	㋐ 緑に重圏線，沈線内の釉は灰緑色，小貫入入る ㋒ 無釉ロクロ目痕，造り出し鐔欠損	薩摩系？
41-111	40-111	表面採集	陶器 徳利	－	－	－	㋐ 淡灰茶色 ㋒ 灰色	㋒ ロクロ目痕，胎土は暗灰色 で精良，俗に小サメ肌	薩摩系 (龍門司窯)
41-112	40-112	表面採集	陶器 徳利(身)	－	－	－	㋐ 淡灰茶色 ㋒ 明褐色	内面にロクロ目痕，上と同一個体？， 俗に小サメ肌	薩摩系 (龍門司窯)

Tab. 8 包含層出土の近世国産陶磁器一覧表

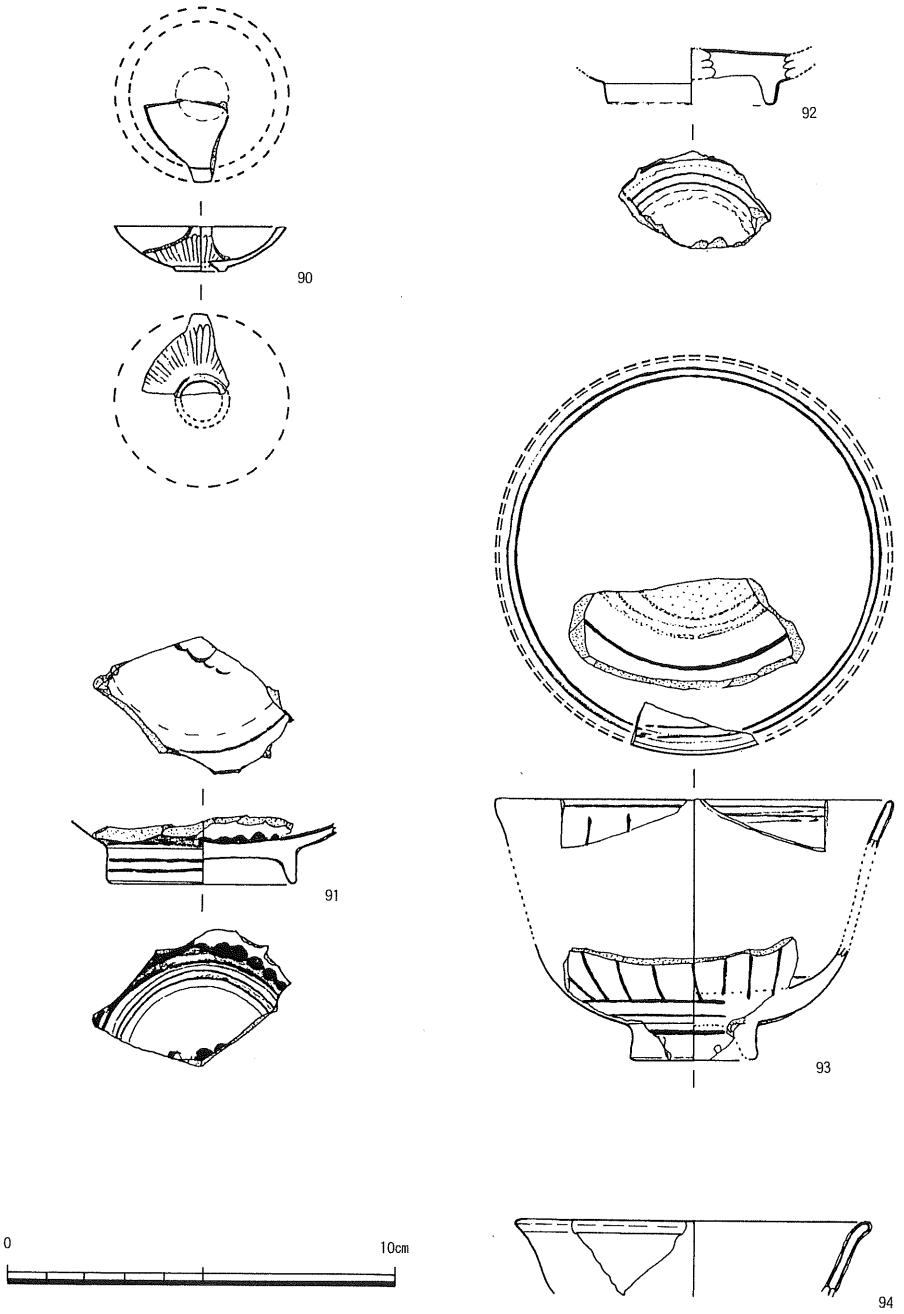


Fig.40　包含層出土の国産近世磁器

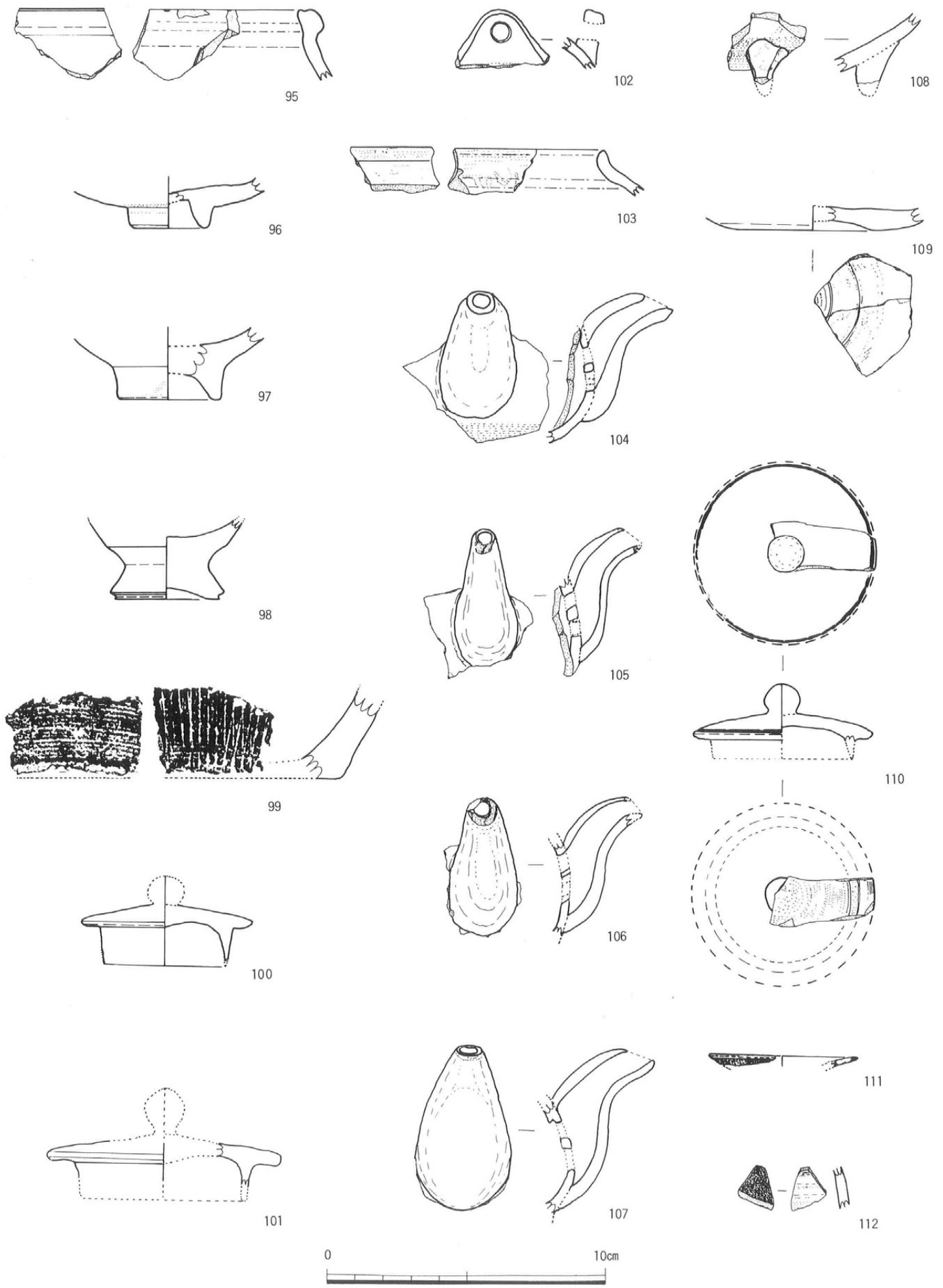


Fig.41　包含層出土の在地系近世陶器

（6） **石器類**（Fig. 42～44, PL. 41～43） 原形を窺うものは僅かであるが，既存部を実測し掲示すると下表のとおりである。

挿図	図版	区・層	器種	測定値(cm)				色調	石質	備考
				長(最大)	幅(最大)	厚	重量(g)			
42-113	41-113	3－5 Ⅳ	石鏃	2.55	1.50	0.45	0.62	灰黒色	頁岩	先端の角度30° 片脚欠損
42-114	41-114	－1－15 Ⅳ上	剝片	2.70	1.45	1.00	2.91	半透明黒色	黒曜石	全体パティナ
42-115	41-115	－1－15 Ⅳ	剝片	2.60	1.75	1.40	4.72	不透明黒色	黒曜石	不純物混る
43-116	42-116	5－7 Ⅳ′	石斧	(12.20)	7.60	1.40	167.41	灰茶色	安山岩	打製 基部(上)欠損
43-117	42-117	2－6 Ⅳ	敲石	5.90	5.20	4.00	166.66	淡灰褐色	砂岩	片面浅い凹み 側面に敲打痕
43-118	42-118	3－8 Ⅳ	敲石	7.05	5.00	3.55	167.16	淡褐色	砂岩	側面敲打痕欠失 片面欠失
44-119	43-119	0－11 Ⅰ	石斧	2.30	3.05	1.00	9.34	灰茶色	砂岩	磨製 基部(上)小片
44-120	43-120	表面採集	砥石	3.55	3.05	1.00	18.56	黒灰色	頁岩	全体磨痕あり
44-121	43-121	2－15 Ⅰ	石錘	4.60	(3.95)	1.30	32.66	淡灰褐色	砂岩	側面に抉り
44-122	43-122	－1－14 Ⅰ	砥石	5.00	3.60	1.00	26.38	赤褐色	硅石	上面使用，窪みあり 側面の一方に線刻 二次的に被熱
44-123	43-123	試2T Ⅰ	礫器状	5.20	7.00	1.60	45.50	淡灰色	砂岩	石匙状

Tab. 9 包含層出土の石器類一覧表

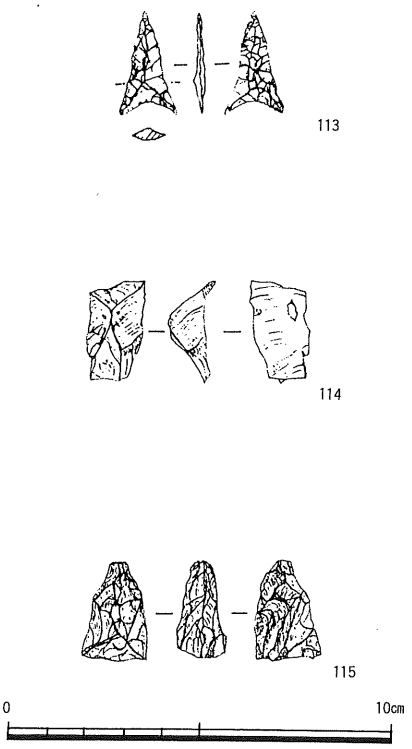


Fig.42 包含層出土の石器類(1)

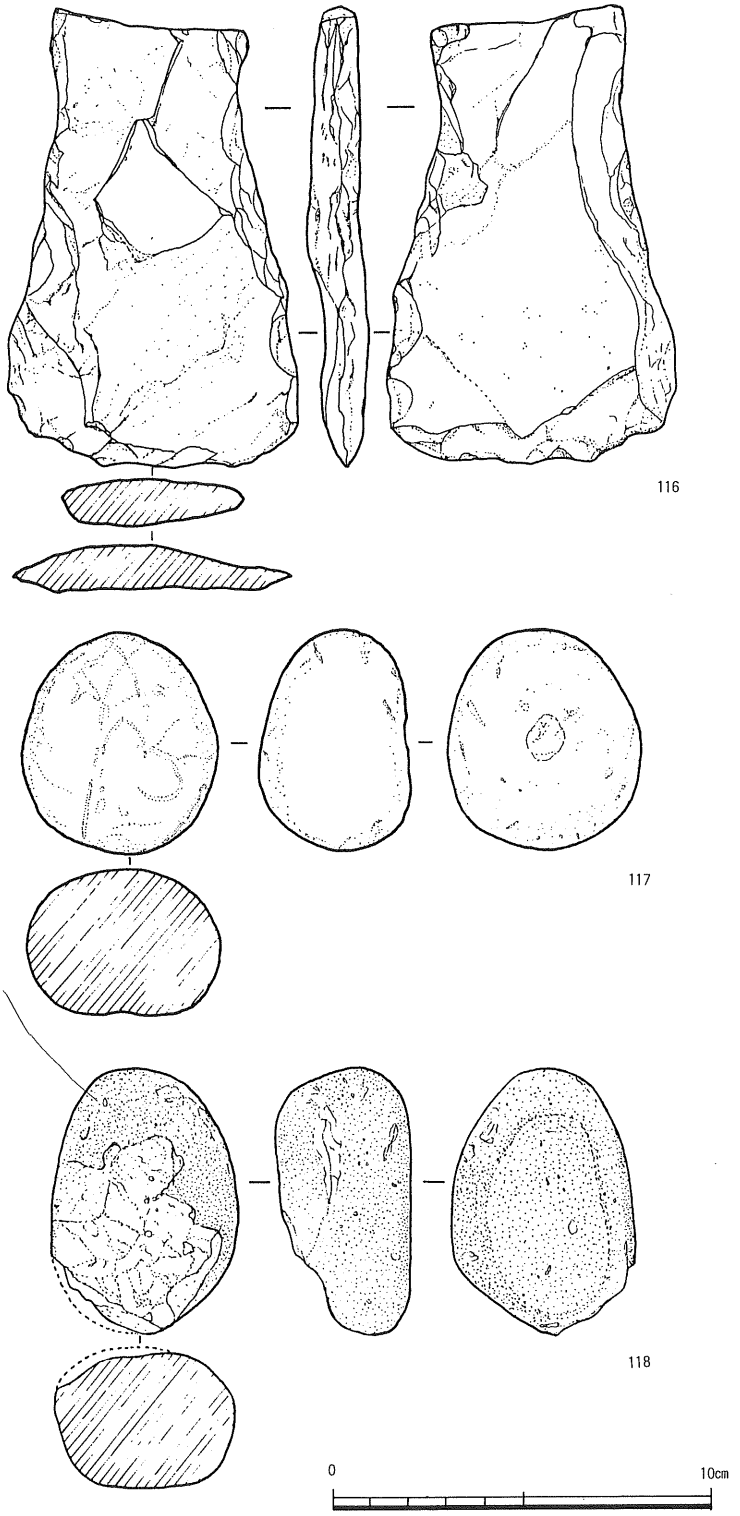


Fig.43　包含層出土の石器類(2)

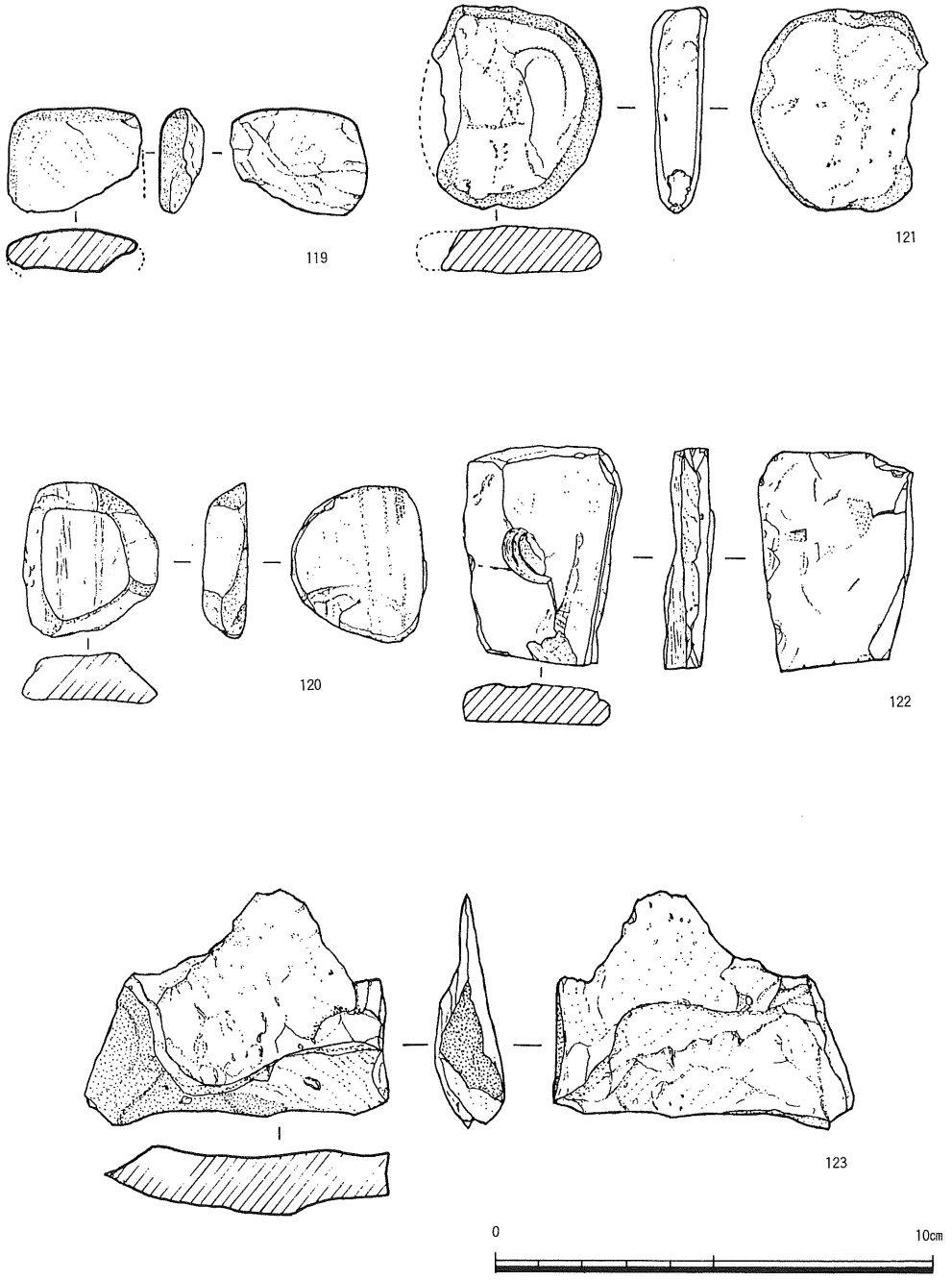


Fig.44　包含層出土の石器類（3）

（7） 金属器類（Fig. 45, PL. 44）

鉄鏃（124） 表面採集で，土層など不明であるのが遺憾である。いわゆる柳葉式に属し細い茎が付く。鋒の上半を欠損しており，刃部は鏃身の両側縁で尖っている。錆の付着により保存状態は良好でないが，身幅1.4cm，厚さ0.4cm，茎の幅0.4cm，厚さ0.3cmを測る小品である。なお通常みられる茎の木質繊維などは確認できなかった。

鉄釘（125・126） 125は8－13区Ⅰ層より出土した。巻頭釘と推定されるが，頭部・脚部を失っている。錆の付着が著しいが，残長4.8cmを計る。126も同様の巻頭釘と思われる。8－14区Ⅰ層出土の錆付であるが，長さ5.3cm，頭幅0.7cmを測る。

煙管（127） 表面採集である。雁首のみ存し，吸口は出土しなかった。火皿の部分と取付部とが剝離している。また灰叩き部は吸がら落としの叩痕がみられ，緑錆化も進捗している。

128は鉄製品で緑錆が沈着しており，腐蝕が甚だしい。刀装具とも思われるがいまのところ不明である。8－14区Ⅰ層より出土した。

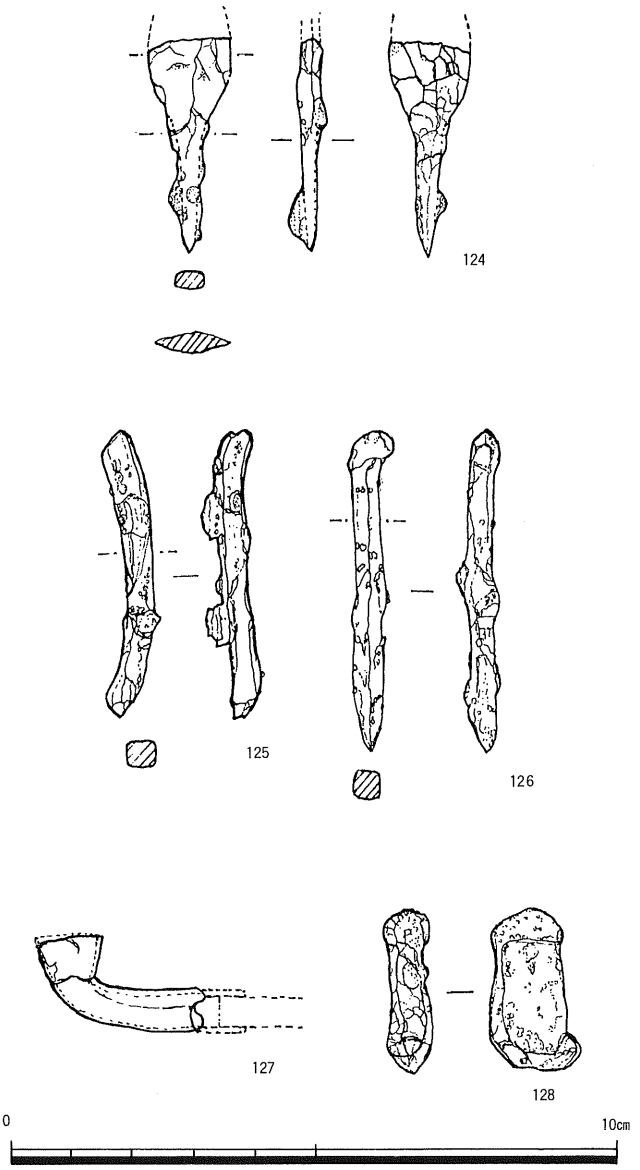


Fig.45 包含層出土の金属器類

Ⅳ. 小　結

（1）包含層・遺構内出土の縄文土器について

縄文土器は主に第Ⅳ層（御池降下軽石層の上）から出土しているが，大半は破片資料で，全形を知り得るものは少ない。それらの所属時期は後期から晩期にかけてのものである。次に示す４つの段階に分け，従来の型式名と対比させながら見てみたい。

〈後期中葉〉

34～37は，その胎土・器面調整（貝殻条痕）が共通している。34，35に見られる二枚貝等の腹縁部による刺突文や，37の凹線文の手法から，市来式土器（註１）に該当する。

39～44は胴部から「く」の字に外反して，内彎する口縁部に至るもので，口縁端部と胴部に文様帯が設けられている。42は波状口縁の頂部にあたり，刻みが見られる。44は割れ口に観察される空洞の形から，土器製作時において粘土にドングリ類が混入していたものと思われる。ＳＦ－１出土の11を含めて，これらの土器は，沈線文間に磨消縄文が認められないものの，いわゆる西平式土器（註２）あるいはそれに前後する時期のものであろう。

38は唯一の縄文施文土器で，色調・胎土が他の土器と比べて異なっている。当該期の磨消縄文土器（註３）であろう。

〈後期後葉〉

46は本遺跡出土の有文土器の中で，底部を除いて唯一全形をうかがうことのできる資料である。口縁部が肥厚し，胴部が膨らむもので，口縁部外面と肩部に凹線文や凹点文を施している。外器面は口辺部が横方向に，胴部以下が縦方向に研磨されているが，ススが付着しており，煮沸容器として使用されたものと思われる。この土器は鹿児島県末吉町の中岳洞穴で出土した中岳２類土器（註４）に類似しており，黒色磨研土器様式（註５）の在地形態と考えられるが，その編年的位置付けについては後期後葉から晩期前半まで幅があり，明確ではない。本資料に関しては，中岳２類土器群の中でも古段階・後期後葉に納まるもの考えられる（註６）。45は口縁部に文様がみられないが，当該期の所産と見てよいであろう。なお52，53はこの時期の粗製土器の可能性がある。

〈晩期前半〉

47～51は器内外面ともに研磨された浅鉢形土器である。口唇部は玉縁状につくられ，51にはヒレ状の突起がみられる。黒川式土器（註７）に該当する。当遺跡においては，これらに伴う深鉢形土器が不明確で，該当する資料を見出だせない。ＳＣ－１出土の１は，この時期の椀形土器である。

〈晩期後半〉

54は，口縁端部に指先による刻みが施されているもので，口縁部の肥厚は粘土紐の貼りつけによるものではないが，いわゆる突帯文系土器（註８）と判断した。（乗畑）

註１　河口　貞徳　1957　「南九州後期の縄文式土器」『考古学雑誌』第42巻第２号
　　本田　道輝　1981　「市来式土器」『縄文文化の研究』４　縄文土器Ⅱ　雄山閣

註２　小林　久雄　1939　「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』第11巻　特輯　土器の研究
註３　松永　幸男　1989　「九州磨消縄文土器様式」『縄文土器大観』４　後期　晩期　続縄文　小学館
註４　河口貞徳編　1980　『中岳洞穴』　末吉町教育委員会
註５　島津　義昭　1989　「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』４　後期　晩期　続縄文　小学館
註６　桒畑　光博　1989　「東南部九州におけるある縄文土器の型式組列　－中岳Ⅱ式土器の再検討－」『鹿児島県考古』第23号
註７　河口　貞徳　1952　「黒川洞窟発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第２号
註８　山崎純男・島津義昭　1981　「九州の土器」『縄文文化の研究』４　縄文土器Ⅱ　雄山閣

（２）遺構内出土の弥生土器について

ＳＣ－２出土土器（３～７）

３～７は甕である。これらは，突帯の本数や刻目の有無に違いが認められるものの，いずれも胎土・色調等は似通っており，同一時期の所産と見てよいであろう。また，３を除けば，器面にヘラ様の工具によるミガキ状の調整が行われている。６と７は図上で完形に復元できた資料で，口縁部と胴部に２条の近接した突帯がめぐっている。６は口縁部内側に部分的に小さい張り出しを持ち，底部は厚く張り出す。７は内彎気味の口縁部上面に突起を持ち，胴部の突帯をはね上げている。３は胴部の突帯をはね上げて口縁部の突帯に接続している。６と７の類例は鹿児島県鹿屋市榎木原遺跡で出土しており（註１），７は器面調整においても共通している。榎木原遺跡では前期末から中期初頭に位置付けられている。

ＳＣ－３出土土器（８，９，10）

９と10は甕である。両者の外器面を観察すると，ともにススが付着し，煮沸容器であったものと認められるが，９は褐色を呈し，厚手で，ナデ調整であるのに対し，10は灰白色を呈し，薄手の器壁で，ハケメが見られる。また，底部には脚台がつき，その内面は丁寧にナデられる。10はカクセン石を多く含む胎土から，移入土器と考えられる。現段階で，その製作地の詳細な断定は出来ないが，口縁部がやや厚い点を差し引くと，口縁部上面をくぼませる特徴や脚台の形態等が熊本県の黒髪式土器（註２）の甕に類似しており，おおむねその方面から将来されたものと推定される。９は底部を欠いている。口縁部を強く屈曲させ，その先端を玉縁状に仕上げており，胴部はふくらむ。胴部の突帯は指でつまんで貼りつける際の指頭の圧痕を残している。突帯の外見は薩摩半島の中期中葉の入来遺跡第４類土器（註３）や中期後半の一ノ宮式土器（註４）の特徴に類似しているが，口縁部の断面形は異なっている。玉縁状の口縁部形態は，同じ都城市内の下水流町築池遺跡の採集品と祝吉第２遺跡第13号住居出土土器（註５）に類例を見ることができ，資料が少ないものの，都城盆地の地域色と考えられる。８はいわゆる広口壺の口縁部である。胎土にはウンモを含み，外器面はよく研磨されている。

当遺構の出土土器は当該地域と他地域との併行関係を知る上で，興味深い一括資料である。現状では，９のような甕の取り扱いに苦慮するが，中期中葉から後葉という時期幅の中でとらえておきたい。

（桒畑）

註１　鹿児島県教育委員会　1987　『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（44）

註２　乙益　重隆　1964　「中九州地方」『弥生式土器集成』本編１

註３　河口　貞徳　1976　「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号

註４　河口　貞徳　1951　「一ノ宮遺跡報告」『考古学雑誌』第37巻第４号
この報文中では，大隅式土器として紹介されているが，その後「一ノ宮式土器」と呼ばれるようになる。

註５　都城市教育委員会　1982　『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第２集

（３）包含層出土の弥生土器について

本遺跡出土の弥生土器はその点数・器種ともに多いとは言えないものの，これまで材料が不足しがちであった都城盆地における前期から中期にかけての土器編年を考える上で，注目すべき資料が得られている。

56は，いわゆる「亀ノ甲タイプ」の甕に類似するが，口縁部の突帯は若干肉厚で，丸みを帯びている。さらに器面調整も工具によるミガキ状のもので，ハケメあるいはナデ調整を基本とする「亀ノ甲タイプ」（註１）とは異なっている。57と58やＳＣ－２出土土器の調整も含めて考えると，当地域の在地手法であるものと考えられる。

ところで，宮崎県における「亀ノ甲タイプ」の甕は東郷町下水流遺跡（註２），高鍋町持田中尾遺跡（註３），新富町鐙遺跡（註４），宮崎市保木下遺跡（註５），高崎町今村遺跡（註６）等で見つかっており，鐙遺跡を除くと，これらはいわゆる下城式（註７）の甕と同一包含層内で一緒に出土している。これらの事例について，石川悦雄氏は，「亀ノ甲タイプ」の甕と下城式の甕の分布圏が対峙するという従来の見方（註８）を否定した上で，弥生文化の日向への流入過程を知る重要なポイントであると指摘している（註９）。また，面高哲郎氏は保木下遺跡出土土器の分析を通して，「亀ノ甲タイプ」の甕は東九州ルートで流入したとしている（註10）。今までに，「亀ノ甲タイプ」として一括されている資料群は，前期から中期までの時期幅があるものと思われ，今後，細分していく必要があろう。

57と58は甕であり，先述したＳＣ－２出土資料に類似している。57は口縁部に３条の刻目突帯をめぐらせる。また２条の胴部突帯は口縁部突帯に接続され，さらに口縁部上面まで上げて，２個の突起を作り出している。口縁部突帯と胴部突帯の間の外器面には，暗文風のミガキが施されている。57などに見られる突帯の多様化は，宮崎県内では東郷町下水流遺跡，高鍋町持田中尾遺跡，新富町鐙遺跡，宮崎市保木下遺跡などで，また鹿児島県内では志布志町片野洞穴（註11），末吉町井手ノ上遺跡（註12），鹿屋市榎木原遺跡（註13），根占町貫見原遺跡（註14），吹上町入来遺跡（註15）などで見つかっている。これらの遺跡出土の土器群の年代は，弥生時代前期から中期の間に納まっている。さらに，ＳＣ－２出土の６に見られるような口縁部に近接して２条の突帯をめぐらせる例は入来遺跡以外の上記の遺跡で見ることができ，東和幸氏の指摘（註16）のとおり，薩摩半島を除いた東南部九州の地域色ととらえてよいであろう。

55は壺である。胎土は細粒で，内外面ともに研磨されている。胴部は球形をなすものと思われ，口縁部を欠いているが，頸部に至る部分に沈線状のくぼみが観察される。57と58の甕やＳＣ－２出土の甕とセットをなす可能性がある。

上記の土器群と同じ都城盆地の今村遺跡の資料とを比較すると，後者の土器には，器面調整にナデやハケメが見られ，口縁部の刻目突帯に垂れ下がり気味のものが含まれている点など前者とは相違点が認められる。両者の差異は時期差を示すものと考えられる。今村遺跡は中期前半に位置付けられているが，突帯の特徴等を考慮すると，本遺跡の土器はそれよりも古く位置付けられよう。今回は，56の「亀ノ甲タイプ」も含めて，前期後半という編年観を示しておく。さて，南九州の前期土器の編年は，鹿児島県においては薩摩半島西岸の資料を中心に組み立てられている（註17)。一方，宮崎県においては宮崎平野部を中軸とした序列が試みられており（註18)，当然ながら，両県の県境（旧大隅国と旧日向国の境）に位置する都城盆地の資料を短絡的にそれらの編年に対比するのは困難を伴う。今後は地域色に注意しながら，小地域ごとの序列とそれぞれの伴行関係を検討していく必要がある。

61，62，64は甕である。逆「Ｌ」字形の口縁部形態や胎土中に含まれるウンモ等，特徴的な一群である。セットとなる壺を探すと，59，60などがあげられよう。これらは従来，中期中葉の段階に位置付けられており，河口貞徳氏の南九州第Ⅳ様式（註17）に，石川悦雄氏のⅢ期（註18）にあたる。63は口縁部に幅広の三角突帯を持つが，胎土・器面調整等からこの時期に含めて良いであろう。

65，66は甕の底部である。前者はハケメが観察され，胎土にウンモは見られない。中期後半あるいはその前後に位置付けられる。66は後期の所産と思われる。(栗畑)

註１　藤尾慎一郎　1991　「水稲耕作開始期の地域性」『考古学研究』第38巻第２号

註２　東郷町教育委員会　1987　『赤松遺跡・下水流遺跡』東郷町文化財調査報告書第１集

註３　高鍋町教育委員会　1982　『持田中尾遺跡』

註４　新富町教育委員会　1983　『鐙遺跡』新富町文化財調査報告書第２集

註５　宮崎県教育委員会　1986　『保木下遺跡』

註６　宮崎県教育委員会　1979　「今村遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』（３）

註７　小田富士雄　1958　「下城式土器考」『白潟遺跡』

註８　小田富士雄　1983　「九州」『弥生土器』Ⅰ　ニューサイエンス社

註９　石川　悦雄　1984　「宮崎平野部における弥生土器編年試案－素描(Ｍｋ．２)」『宮崎考古』第９号

註10　註５に同じ

註11　河口　貞徳　1967　「片野洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社

註12　末吉町教育委員会　1989　『井手ノ上遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（８）

註13　鹿児島県教育委員会　1987　『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（44）

註14　根占町教育委員会　1989　『貫見原遺跡』根占町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

註15　河口　貞徳　1976　「入来遺跡」『鹿児島考古』第11号

註16　註12に同じ

註17　河口　貞徳　1981　「新南九州弥生式土器集成」『鹿児島考古』第15号

註18　註９に同じ

（４）桜島に起源を有する文明Tephraの年次について

桜島起源の古期火山噴出物については従来，地質学などの分野より組成物質の分析や分布圏の研究が進められている（註１）。文明期のものは，その存在は認めつつも一般的には看過されてきたように思われる。つい最近まで鹿児島県北東部の該期降下軽石を，安永期のものと見誤られていた一例など，その例証といえよう。

先年，福山氏は野外調査を主体として，文明期の分布範囲を推定されている。それに拠ると，桜島を起点としてその北東部に主軸を設定し，その堆積分布圏は，福山町（鹿児島県姶良郡）の西部を中心とした分布域となっている（註２）。その後，成尾氏は末吉町（鹿児島県曽於郡）の「真方入口遺跡」・「箱根遺跡」などの層序を鉱物・粒度組成より比較されて，前者ではその第２層を文明期降下軽石と分析し，さらにその遺跡より東南約20km離れた後者では，該期の堆積物は確認できなかったとしている（註３）。これに従えば，福山氏説よりさらに東部までこれが分布しているということになる。

一方，宮崎県のこれに相当すると考えられる降下軽石は，その依るべき資料に接しないが，宮崎市内まで分布するやに聞いている。管見では都城市松原地区第Ⅰ・Ⅱ遺跡（註４）および同市大岩田村ノ前遺跡・都之城取添遺跡において，前記の成尾氏同様に第２層においてこれを確認している。従ってその分布圏は北東部にさらに拡大するものと推測される。

該期の降下軽石は，当地でも表土（耕土）下（平坦部の場合，最上層）に堆積している事実や，調査の重点が縄文・弥生期に置かれ，いきおい地質学的研究の主眼もまたそこに向けられ，かくしてこの年代の若い地層は閑却されがちであったことは否めない。おそらくこの方面研究の遅滞の一因も，そこらに存しているように思われる。

特にこの層の存在は歴史考古学上，遺構・遺物の年代観，編年はもとより，その年次を確定することによって，絶対年代にも迫れる可能性を有し，特に文字資料の少ない地方の中世考古学研究に重要な意味をもつものといえよう。

従来，地質・考古学研究者は文明降下軽石の年次の典拠に，漠たる認識しかもたず，単に「文明年間」または「文明３－８年」とするのが殆どのようである。これは多分，近世成立の地誌類（註５）や県史の類（註６）に依拠しているものと推測される。そこで既述の安永期のにの轍を踏まぬためにも，また当地方の歴史考古学研究を進捗させるためにも文明何年であるのか，その年日付を確定する必要があろう。いま古文献を渉猟して，これの検討を加えることとしたい。これを要括してみると次表のごとくである。

番号	(西暦) 年号月日	記　　事	原　拠	出　典	備　考
1	(AD. 1471) 文明3・9・12	向島黒神村燃出ル，人民多死	桜島土池田氏蔵年代記	前編旧記雑録卅九	近世後期成立 島津家本に依る
2	(1475) 文明7・8・15	向島之内野尻村燃出ル	〃	〃	〃
3	(1475) 文明7・8・21	島津之稲荷之御遷宮　武久公御代官に，宮丸殿孫子之鶴丸殿，御へい取申され，穎娃諸事取なされ候，	旧記(史料名不明)	伊地知委安 管窺愚考	原拠は中世 近世後期成立
4	(1476) 文明8・秋	火起焚島，烟雲簇也，塵灰散也，青茅之地，忽変白沙堆，滄桑之嘆，(下略)	島隠漁唱	釈桂庵 島隠漁唱	中世後期成立 島津国史・ 三国名勝図会にも引用
5	(1476) 文明8・9・12	桜島地震五日，十二日発火，石裂岸崩，圧死人畜，面其東西面，有地踊躍出于海中，広二里所，與島合為一，又四旁数十里間，雨灰数日，埋隰畝，墳谿壑，所在往往，成白砂堆，	福昌寺年代記 黄姜旧記　川辺人高良 華人家蔵年代記	山本正誠 島津国史巻之十二	近世後期成立
6	(1485) 文明乙巳・夏 (17年)	奉再興八幡大菩薩霊一宇与薩摩守国久，赴飫肥戦場之日，粛詣于祠下，積年不修，大敗難起，	島陰雑著	伊知地季安 管窺愚考	原拠は中世

Tab. 10　文明期に於ける桜島噴火に関する古文献一覧表

ただ原拠の中で善本の伝存するものは，史料No 4 のみであり（註 7），他はその写本すら詳かでない。従って原史料によるこれの厳正な批判には，自ら限界があることを予めおことわりしておきたい。No 1 ・No 2 の原拠は文体よりおそらくNo 5 所引の「福昌寺年代記」あたりの抄記ではないかと思料される。No 5 にはNo 1 ・No 2 の原拠を掲げず日付のみが一致している。これについては疑問も残るが，しかし文明三・八年を誤写することは先ず考えられないであろう。No 5 はもっとも多くの史料を引き，それらを勘案して記載したことが推知されるが，原拠史料の伝存の有無が不明であることが惜しまれる。

そこでこれら近世後期成立の史料を一応除外すると，もっとも信憑性の高い史料は，No 4 の桂庵玄樹の『島隠漁唱』ということになる。この古記録には噴火の日付は不明ながら『文明八年秋』としており，これは先ず間違いないものと考えてよい。これには，また次のような噴火に関わる彼の漢詩が載せてある。

烈火曽熕一島来，桑田碧海総休猜

去年澗底草深處，七里平原沙作堆

とあり，当時の火山活動の峻烈さや降砂が広域にわたったことが推察され，この文明 8 年の噴火が最も大規模であったが故に，斯く特記されたのであろう。それを裏付けるように，遺跡での降下軽石はシャープな形で存在している。

次に都城での管見に及んだ文明年間の史料を参考に掲げてみた。史料No 3 は文明 7 年 8 月21日，都城郡元の稲荷神社遷宮に関わる珍しい記録である。これは島津武久（守護忠昌の初名）が大檀那となり，代官は宮丸氏，その孫子の鶴丸が御幣役を勤め，穎娃美作守兼政（薩摩国穎娃郡・揖宿郡の一部領主，伴姓穎娃氏初代，島津本宗の御内）が諸事に当たっている。当時「島津稲荷」と称していること，また末吉まで在地勢力を有した宮丸氏，さらに肝付本宗二男の穎娃氏のこれが関与など注目されよう。島津本宗家によるこの遷宮が如何なる動機によるものか不明であるが，忠昌の元服あるいは桜島噴火などの天変地異（予兆）もその一因ではなかろうか。史料No 6 は文明17年夏，守護忠昌の命により都城より島津国久（薩州家）・同忠廉が飫肥（新納氏）の救援に赴く時，都城の八幡神社（註 8）が既に荒廃していたことを示すものである。この神社は長享 3 年（1489），島津国久・同忠廉が願主となり，司役助工には権大僧都宝寿坊快扶が預り修復されている。

この他，かつて都城郡元の上之坊に安置されていたという阿弥陀如来像の銘に，「日向州島津院円

福寺阿弥陀如来，奉造立，文明十六年甲辰，六月十五日，信心大願主，……作者快扶」とみえている（註９）。この仏師はNo３史料に見える宝寿坊と同一人と思料される。それはともかく，該期に寺社などの修復の記録が散見することは注目されてよい。

如上の史料は該期に関する噴火の直接の記録ではないにしても，今後文明降下軽石の分布主軸に沿う地域での該期前後の紙本・金石史料の集積が旁証のためにも必要と思われるのである。

註

1　古文化財編集委員会編『古文化財の自然科学』1984・７（Ｋ同朋舎出版）。

2　福山博之「桜島火山の地質」（『地質学雑誌』84，1978所収）。

3　成尾英仁「曽於北部における火山灰層序と土壌組成について」（末吉町教育委員会『末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』1985・５所収）。

4　都城市教育委員会『松原地区Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』1989・３。

5　五代秀堯・橋口兼柄『三国名勝図会』巻之四十三。

6　鹿児島県『鹿児島県史』第一巻，1939・４。

7　桂庵玄樹『島隠漁唱』，「島陰集」とも言う。三巻三冊本で慶長初年の書写本を数本伝える。東京大学史料編纂所他。

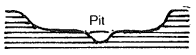
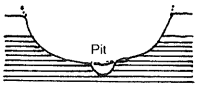
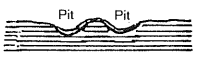
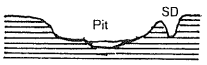
8　伊地知季安は『管窺愚考』に，「郡元村八幡再興棟札」として，史料No６とほぼ同文で無年紀の北郷忠相代の棟札写も併戴している。郡本の八幡社は寡聞にして知らない。都城安久の誤りか。

9　都城島津家『荘内地理志』巻之十。

（５）日向国における古代・中近世の道路状遺構（基底部にPitを伴う）をめぐる諸問題

先年，都城松原地区第Ⅰ・Ⅱ遺跡を調査している際に，初めて規矩性を有し，Pit列を伴う道路状の硬化面２条に遭遇し，これよりこの種遺構に少なからぬ興味をもつようになり，これらは特殊なものではなく，普遍性を有するものとも思料されたが，その割には報告事例が僅少に過ぎるのは，或いは存外に見逃しているやにも思われるので，自戒を含めてこの種遺構についての卑見を述べてみたいと思う。

管見に過ぎないが，旧日向国に限定して，類似の遺構を各遺跡の報文に採り，その類型化を試みたのが下表である。遺構の平面観・規模・年代観などは後日を期したい。

類	型	横断面形態模式図	特徴	事例	文献
A	Ⅰ		長楕円Pit主軸に直交，最深部に直列	宮崎県都城松原地区第Ⅱ区遺跡２号溝	註１
	Ⅱ		溝状の深い掘形を有し，円・楕円形Pitが主軸に直交	宮崎県都城大岩田村ノ前遺跡ＳＦ１	
B	Ⅰ		両端は双円状を呈する，路面に並列	宮崎県前畑遺跡 宮崎県都城松原地区第Ⅰ遺跡11号溝	註２ 註１に同じ
C	Ⅰ		長楕円Pitは主軸に直交，法肩に小溝が伴走する	宮崎県熊野原遺跡 宮崎県都之城取添遺跡 大溝－２，溝－２	註３

Ｔab．11　基底部にPit列を有する道路状遺構の掘形諸類型

A類をⅠ型とⅡ型に類別してみた。Ⅰ型は掘り方が浅く，Pitも含めて遺構内の全体が硬化している。周辺には中世の遺構（館址）が存在する。後者は地形に関係なく掘形はⅡ層（黒色有機土層中）より明瞭で，硬化面はパミス混入のローム質の土層，また底面に行くほど硬度を増す，Pitの填土も硬いが，基底部の覆土との識別は容易である。掘形もPitも椀状を呈する。なお近縁には中世の遺跡（古城址）などがある。

B類Ⅰ型　掘形が明確でなく硬化帯と，その中に窪みが縦走する。附近には近世の溝状遺構などがみられる。

C類Ⅰ型　掘形が浅く，この外縁に沿って小溝が伴走している。近くに中世の遺構（寺院址など）が確認される。

次にこのような遺構についての存念を記することとする。掘形の確認はその遺跡の保存状態や地形にも左右されるが，当時の生活面との関連が重視されるべきであり，また掘形の深浅は調査者（担当）の検出面の把握の仕方に大きく関わってこようし，硬化面がすなわち道路の幅員と見做すことも慎重を要しよう。さらに周辺遺構とのセット関係や補修，重複，改変の有無やその敷設，存立，廃絶期の年代設定，要因も重要である。これらは至難な分野であろうが，覆土や包含遺物など今後きめ細かい調査が求められよう。

ともかくその性格・機能を考察する場合，単に形態に限らず，硬化面，Pit，および覆土の科学的分析が不可欠となろう。行政調査では多くの困難を伴うが，遺構の点より面への拡大追求が必要であることは言を俟たないであろう。また遺構の傾斜面の窪みを単絡にPitと見まがってはならない。これは近代の事例に徴しても言えることであるが，例えば従来の階段状の施設が，自然的にPit状に淘汰形成される場合も，十分想定しうるからである。

このような遺構の性格，機能であるが，未だ決定的な説には接することができない。先年，北郷氏は前掲B類Ⅰ型の遺構を，近世の「木馬道」に見立て「作業道」説を唱道されている（北郷泰道「東大寺虹梁と日向」『えとのす』32，1987所収）。これは興趣をそそられる創見であり，傾聴に値しよう。ただ上表A－Ⅱのごとき平坦部まで溝状を呈する遺構は上記の説で律せられないであろう。これらは一地域の特殊な事例ではなく，普遍的に存在するものとみれば，今後，さらに精緻な調査による類例の増加と，既述指標への科学的アプローチに期待を繋げたい。

ともかくこの種の遺構が，幹線であれ枝道であれ，該期の優れて人的営為の所産であるが故に，地域史解明の資料たりうるはもとより，ひいてはわが国の土木技術史・道路交通史上も閑却されてはならない重要視すべき遺構と思うのである。

註

1　都城市教育委員会『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』1989。

2　宮崎県教育委員会『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』1979。

3　宮崎県教育委員会『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集』1985。

大岩田村ノ前遺跡においては，縄文晩期の竪穴状遺構（ＳＣ１．竪穴住居址と推定）１棟，弥生前期末～中期後葉の竪穴状遺構（ＳＣ１・２）２棟を検出した。また３千余を数えるＰit群は，その性

格や年代など特定できなかったが，縄文時代にまま見られる特殊遺構ではなく，おそらく縄文・弥生期の集落址と推定が許されよう。遺物・遺構は僅少ながら，該期のそれは当台地の東縁に顕著であり，これの立地を暗示しているごとくである。また弥生前・中期の遺物・遺構は，当地の事例少なくその編年に有用な資料を提供した。

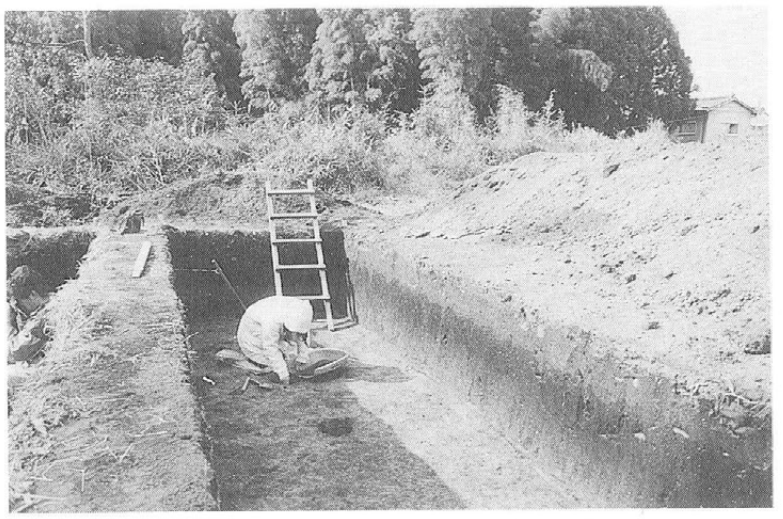
さらに道路状遺構のＳＦ６は，縄文末期のものと推定され，その検出面より当時の生活面を推知することができた。そして時代不明のものも含めて，これらの枝道的遺構は主軸の方向によって，台地の南辺より上り勾配で北に走行するもの，また東縁より西側に走行するなど，それらはPit群，竪穴遺構と密接な関係にあったことが窺われよう。

中世の道路状遺構（ＳＦ１）は，割合にその規模が大きく，この形態は従来の底部にPit列を伴う，この種の事例とは若干おもむきを異にしている。敷設の年代は不明ながら，文明８年（1576）秋の桜島噴火の降下軽石に敝われてよりは，完全に廃絶したことだけは確かである。この降下軽石層直下の黒色土層よりは，平安時代の須恵器片や中世のヘラ切りのカワラケ類，須恵質の遺物が包含されていた。これらは各地点包含層のそれぞれの遺物に対応するものでありセット関係として把握される。これらのうち中世の須恵質のものは13Ｃ後半頃とみている。同じく最下限の遺物では，14Ｃ中葉の中国青磁片に求められる。因みに確実な史料に依れば，当地の大岩田城が落城したのは暦応２年（1339）４月13日であり，文明堆積層直下の遺物とほぼ年代が符号する点は見逃せない。この遺構はこの頃までは，その機能を有していたのではなかろうか。

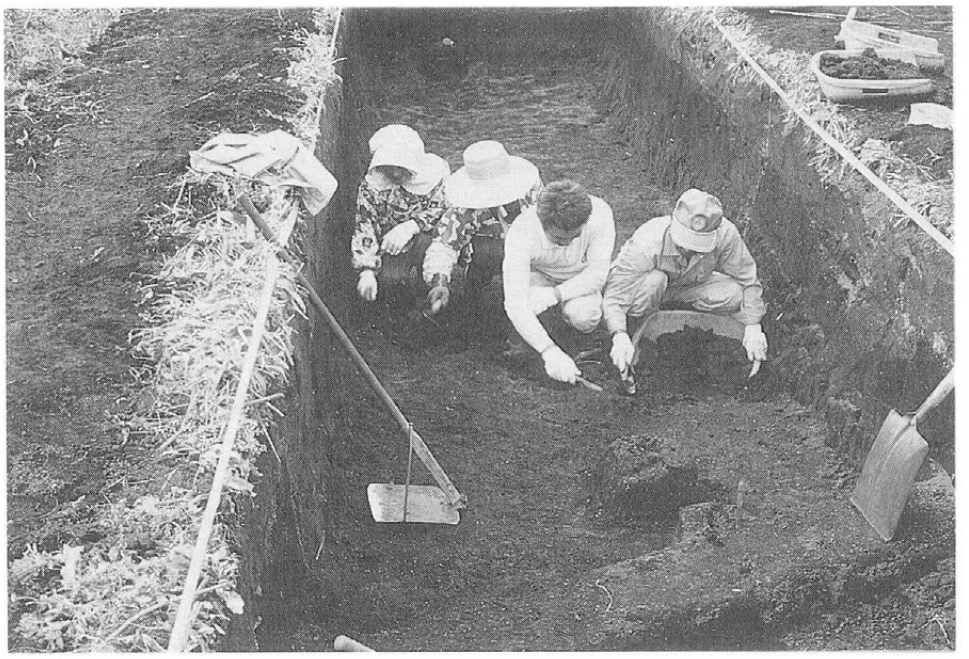
ともかくこの遺構は公的といおうか，ある権力の関与なしには，その管理・維持は困難であった筈であり，この廃絶は既述の自然的要因を契期としながらも，既存の権力者の凋落，また新たな封建的ヒエラルヒーの形成なども視座に入れて考察する必要があろう。

次いで15Ｃ中葉～16Ｃ末の中国青花類・カワラケなどの遺物は，当時の地域権力者の被官の存在を物語っていよう。当地に則して言えば，都之城（北郷氏）を中心とする在地家臣団の形態が窺えるようである。またこれに続く近世後期の肥前系磁器類は，やはり近世武士階級の生活用品であろうし，さらに近世末期の薩摩系の陶器（黒物（くろもの））の存在は，一般的にいって庶民の日常用品であろう。ともかく調査区のこれら歴史時代遺物の散布形態のありようは，これらの荷い手といおうか，その使用者の本拠地が当遺跡の西側に求心（字「村ノ中」）が存在したのではなかろうか。

擱筆するにあたり，本稿が諸般の事情で遷延し，文化課および印刷所の方々に多大のご迷惑をおかけしたこと，衷心よりお詫びする次第である。また残暑厳しい時節より朝霜を踏むころまで作業に専念して下さった多くの方々にも厚く御礼申しあげたい。



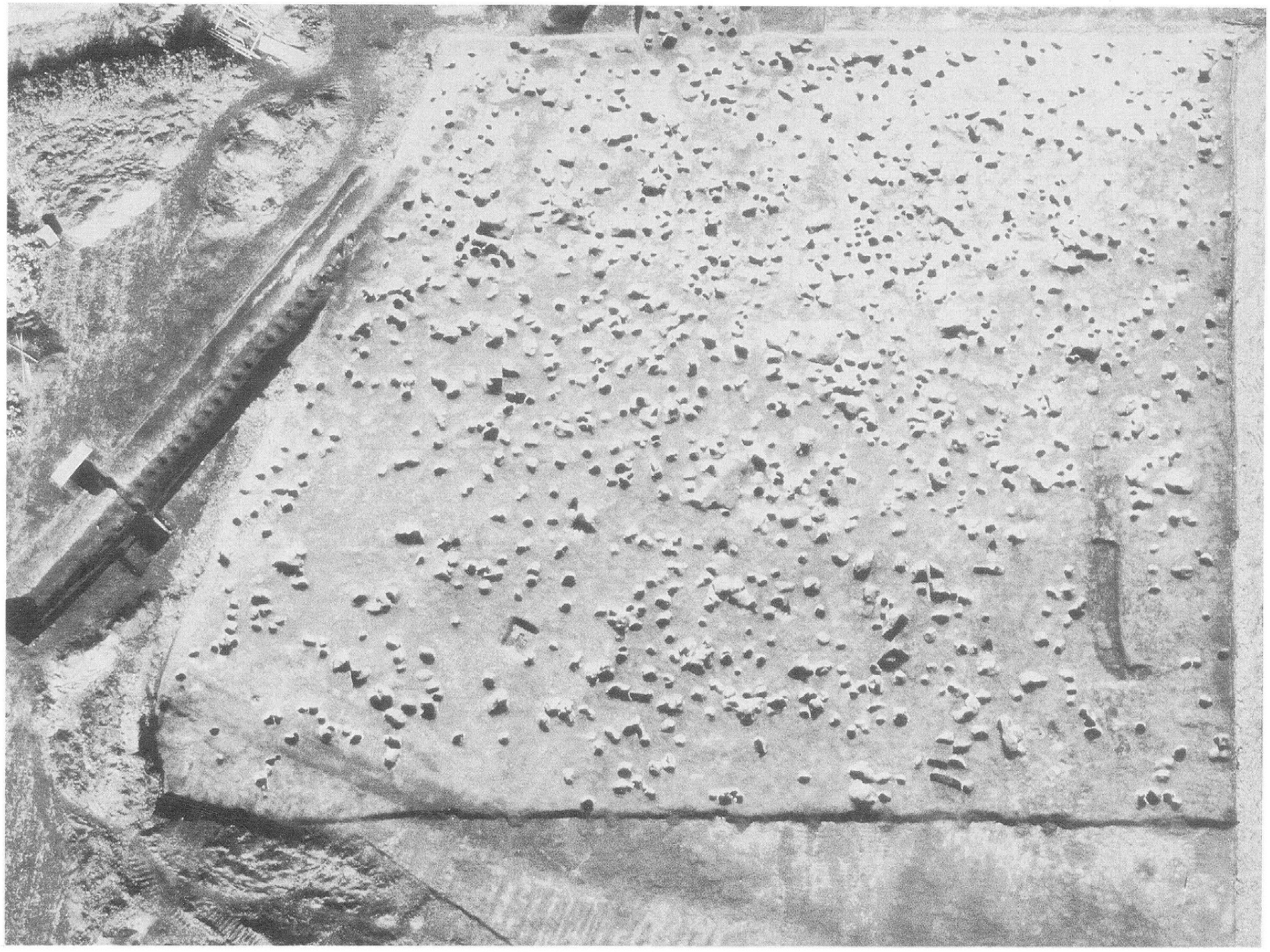
SC 3Pitの検出



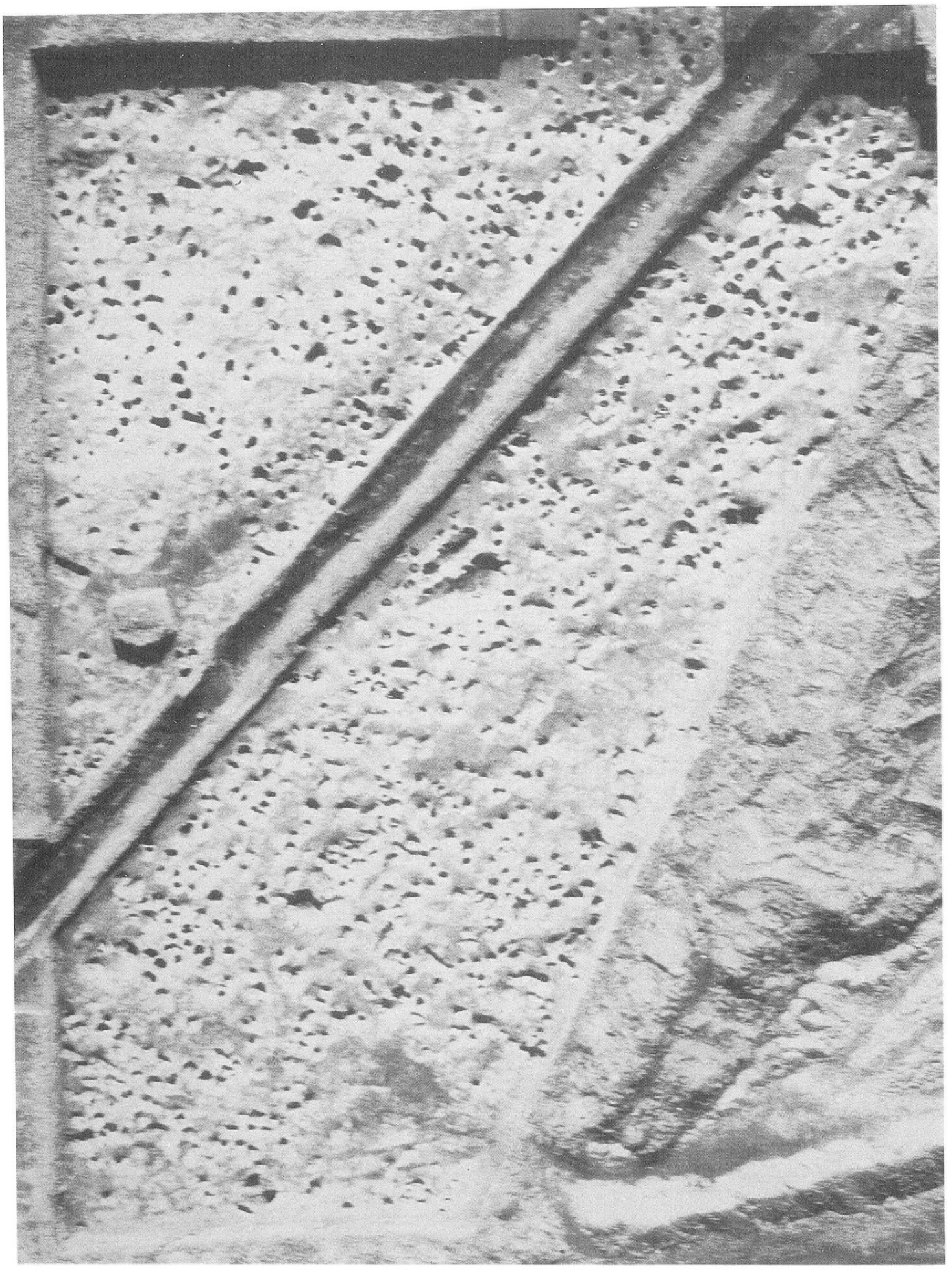
SF 6Ⅳ′層を掘る

記念撮影（Ⅰ区SP前）

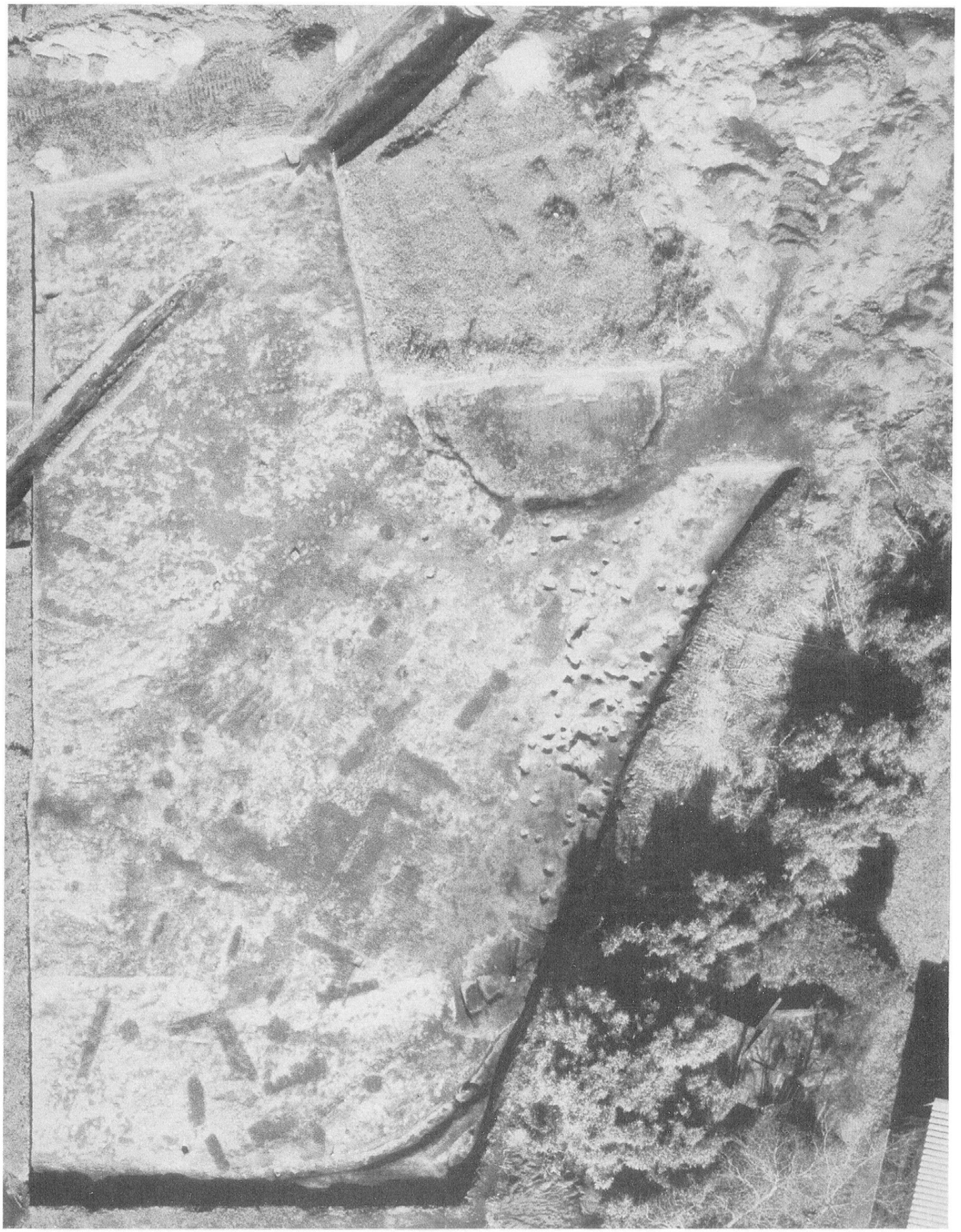
PLATES



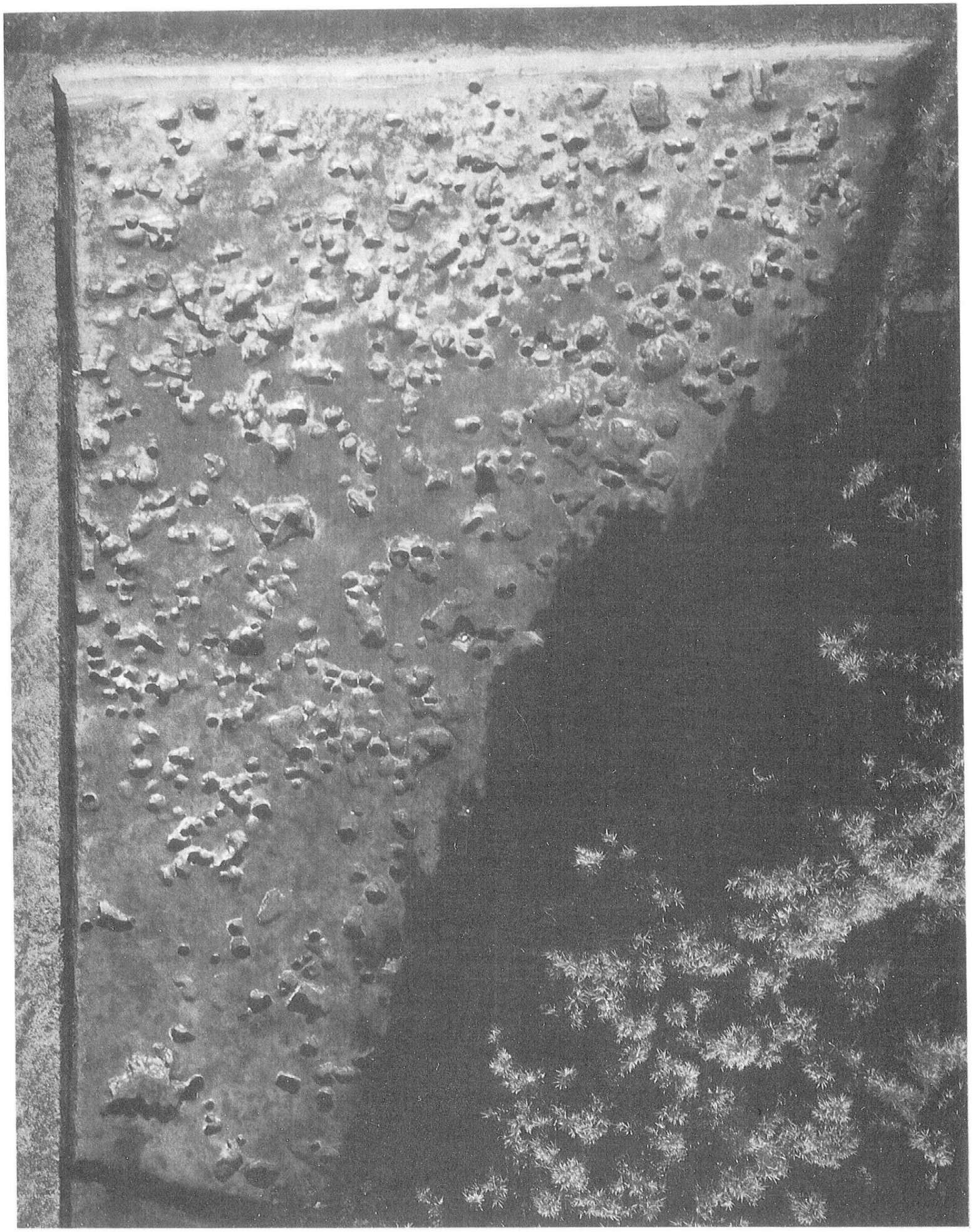
PL.1　Ⅰ区SP・SC2・SF1完掘状況



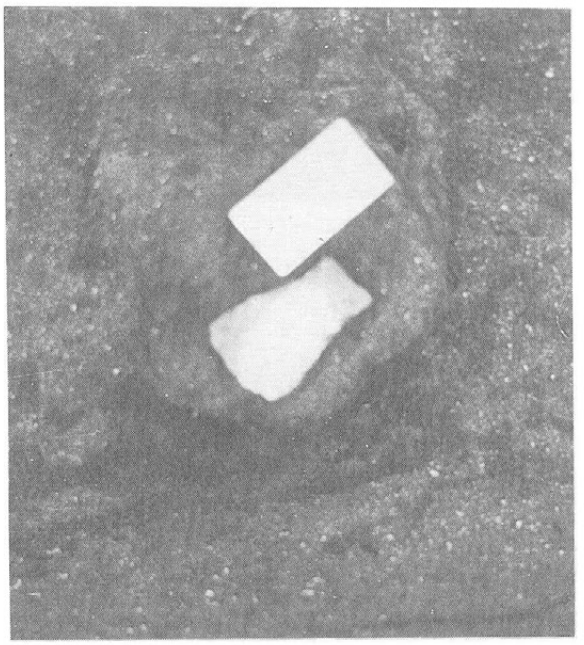
PL.2　Ⅱ区SP・SC2・SF1完掘状況

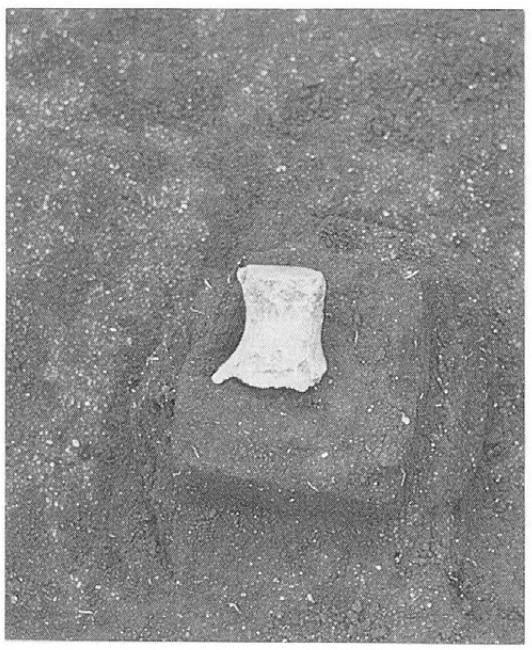


PL.3　Ⅲ区SP・SC1・SF1～5完掘状況

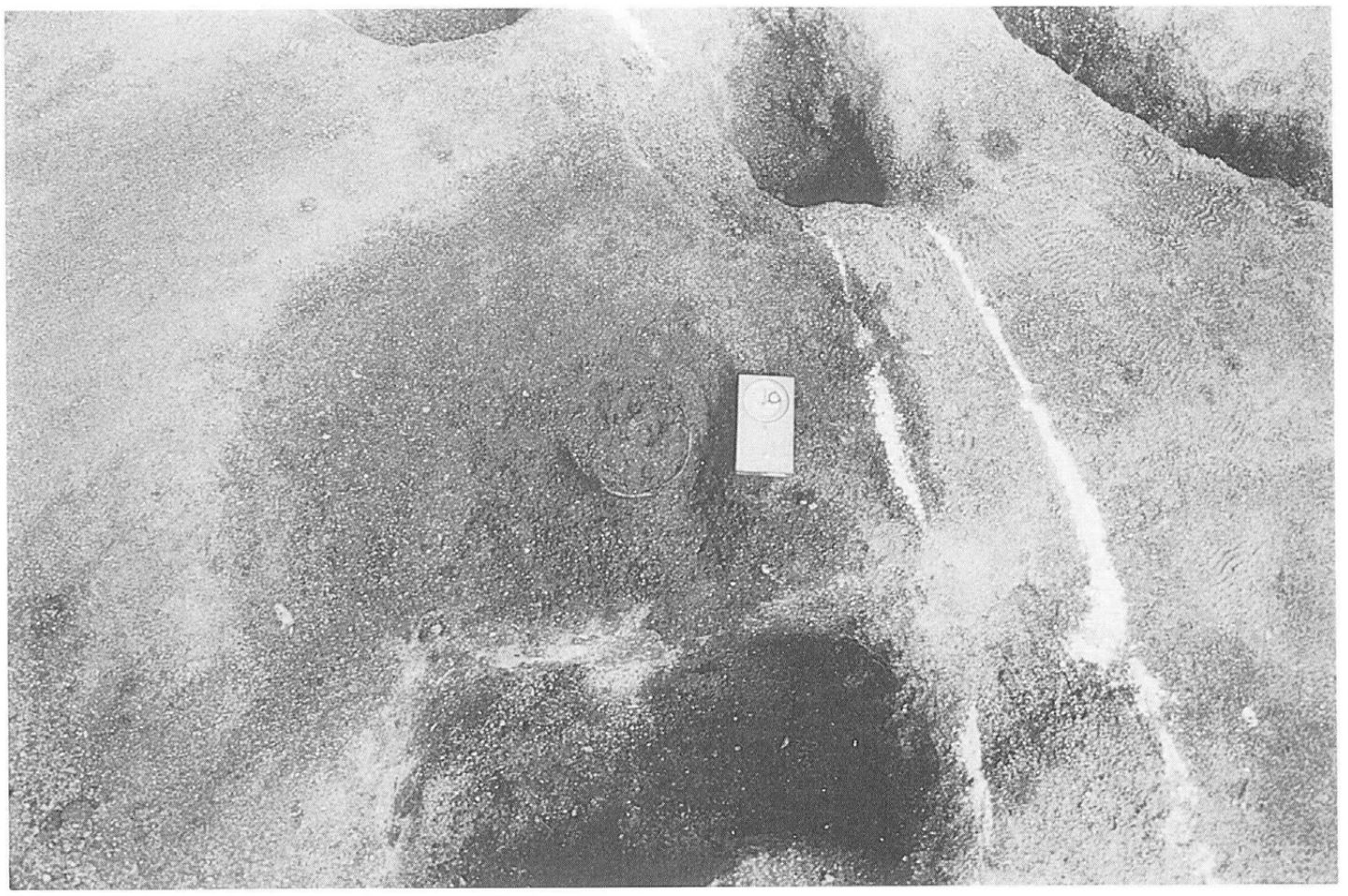


PL.4　Ⅳ区SP完掘状況

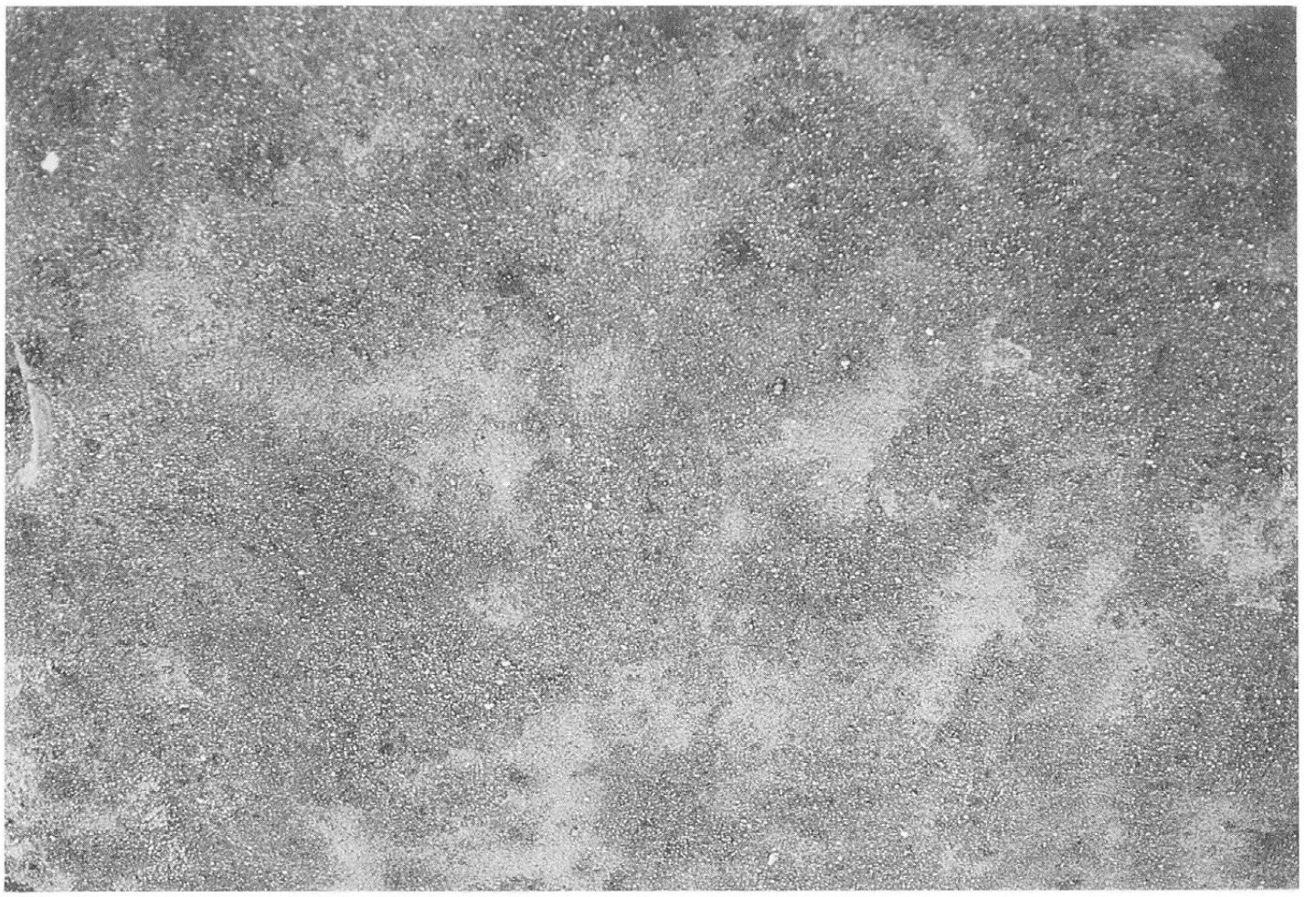


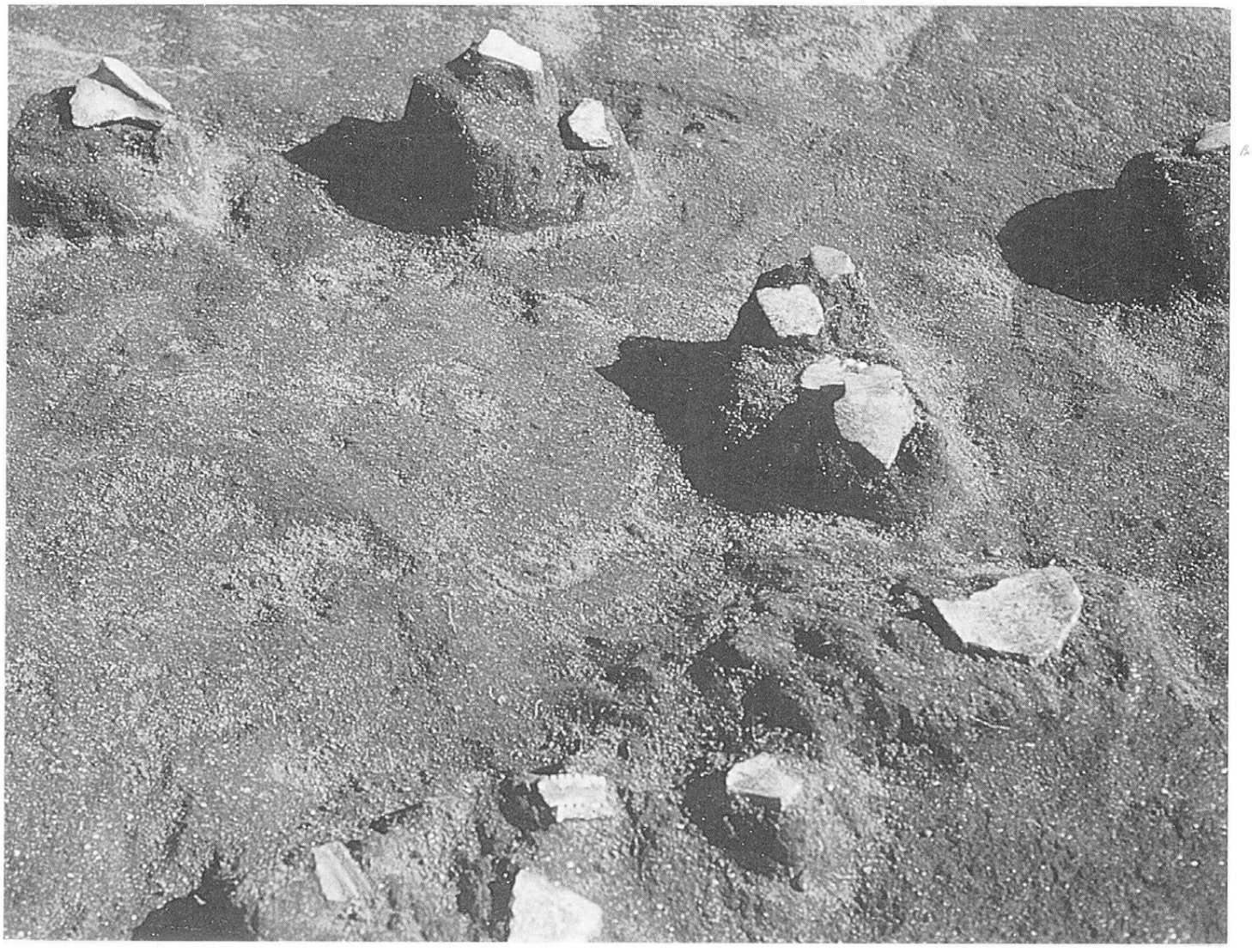


ＰＬ．５　包含層遺物の出土状況（上：4-1区，中：5-7区，下：0-14区）

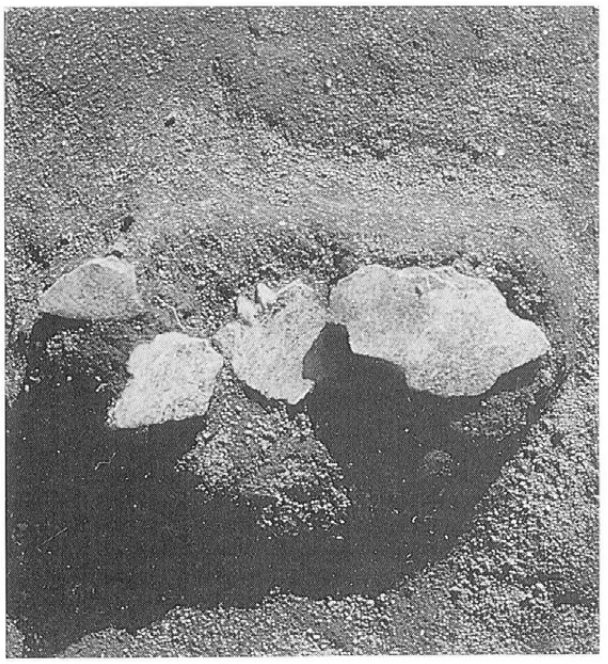


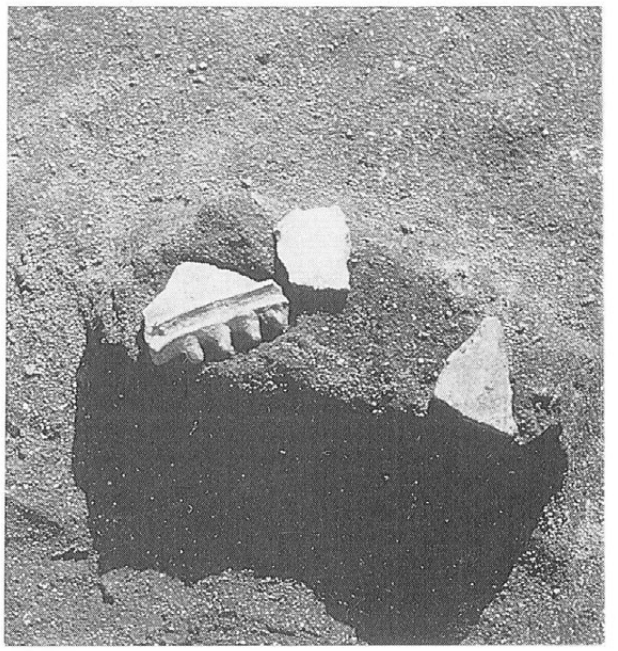
ＰＬ．６　ＳＣ１Ｐｉｔ内縄文式土器の検出，ＳＣ１完掘状況（東より）

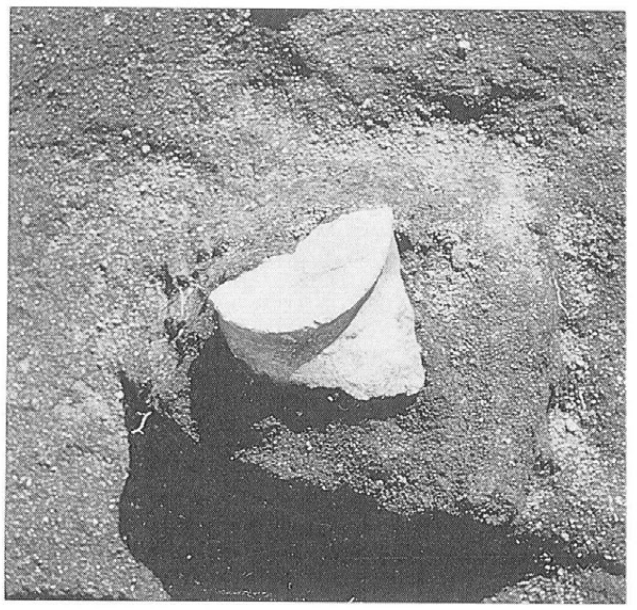


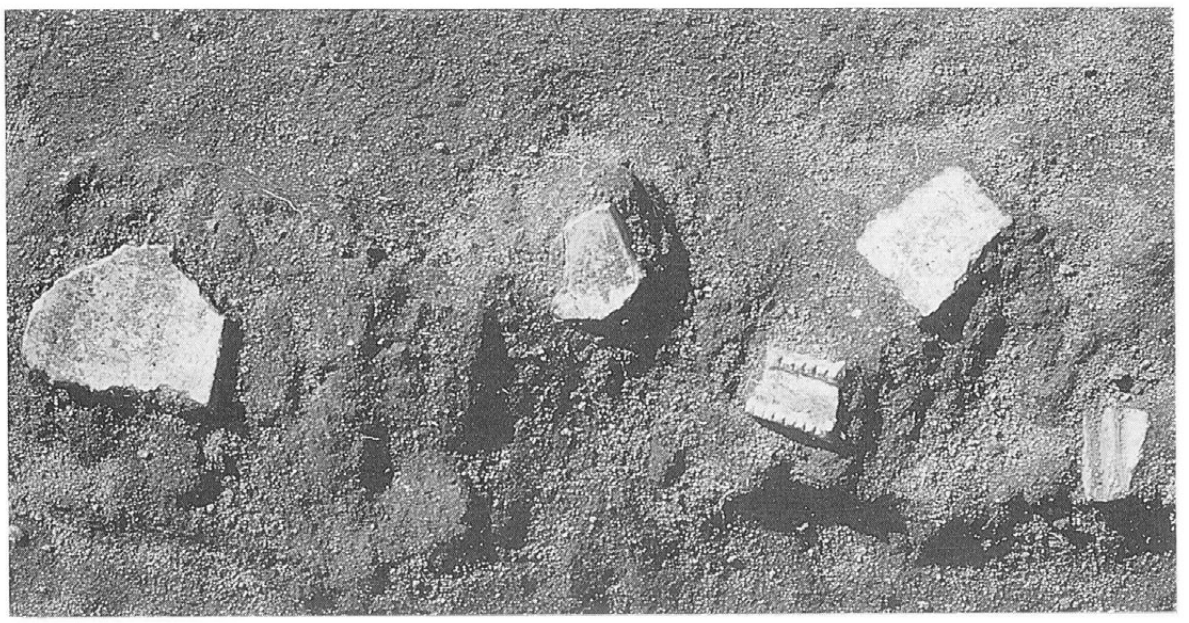


PL.7　SC2Pitの検出，遺物の出土状態

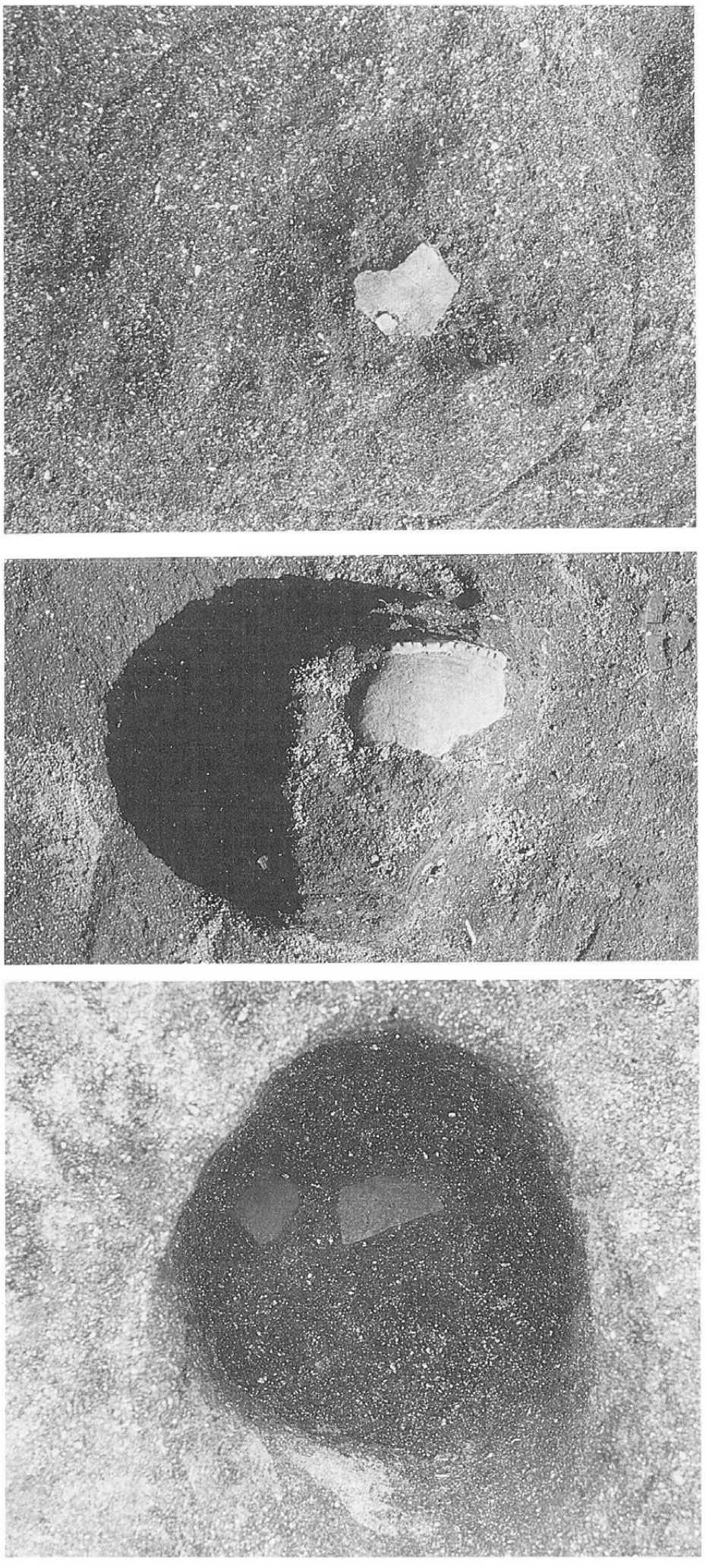




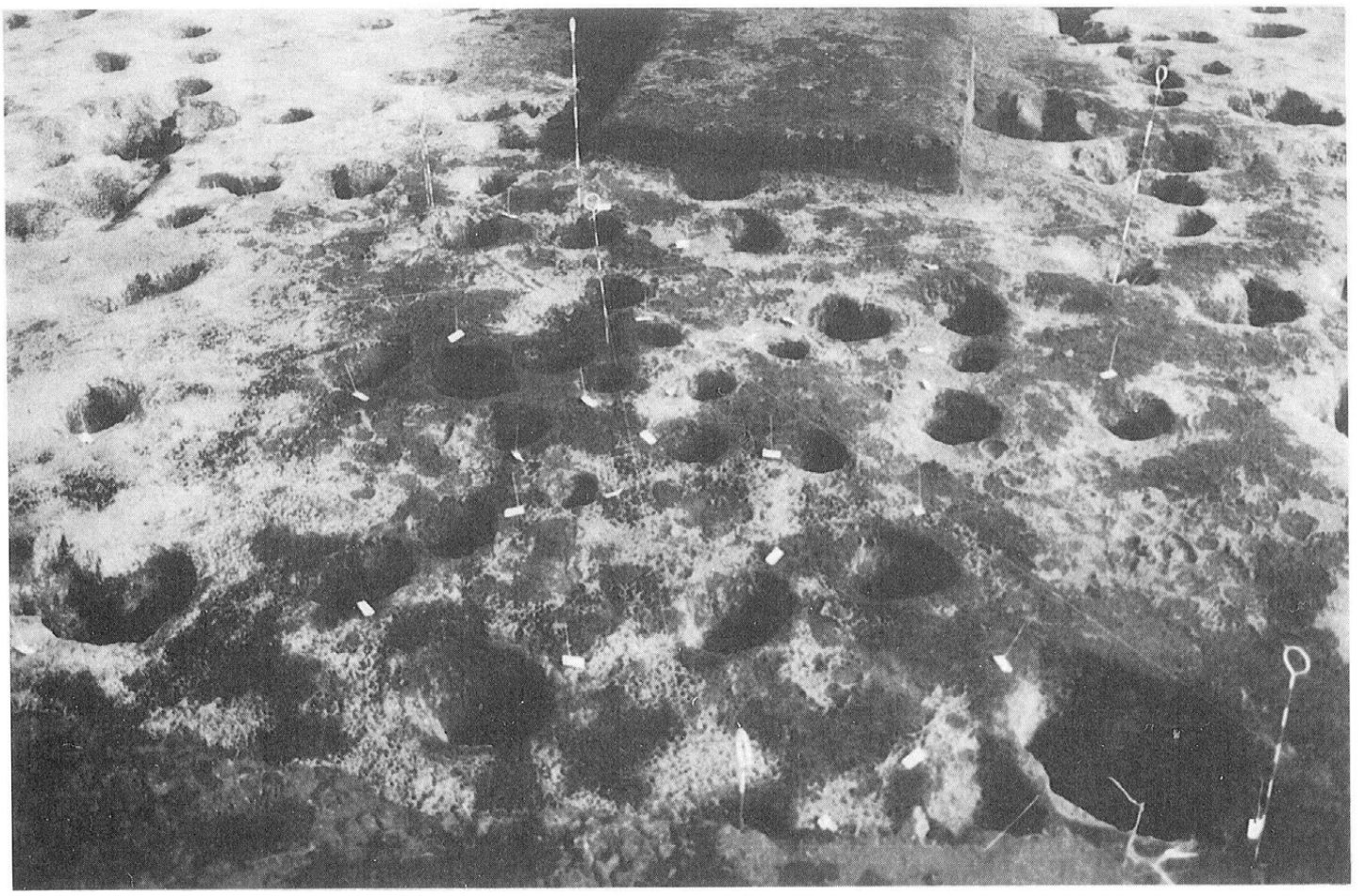


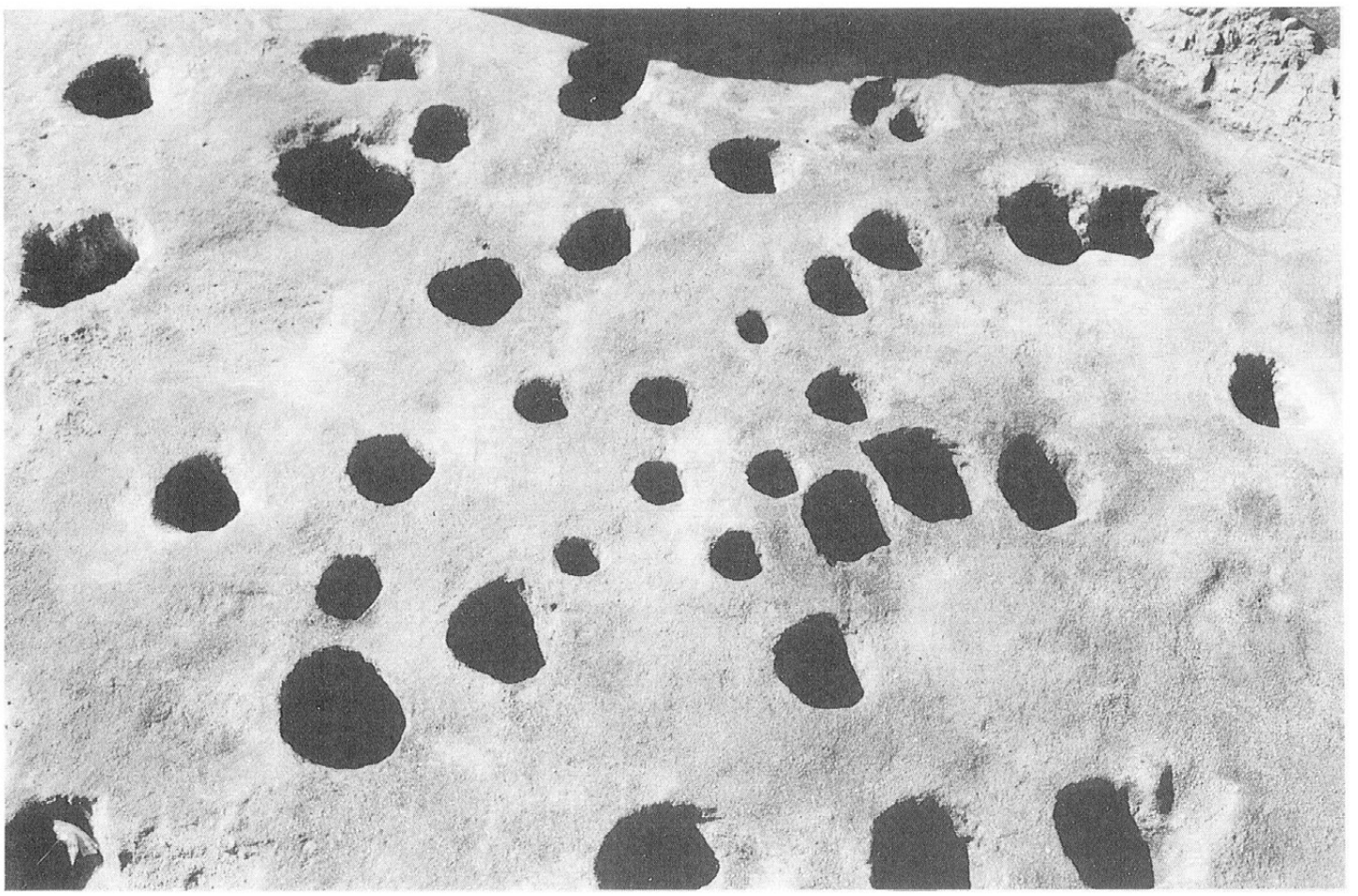


ＰＬ．８　ＳＣ２内遺物の出土状況

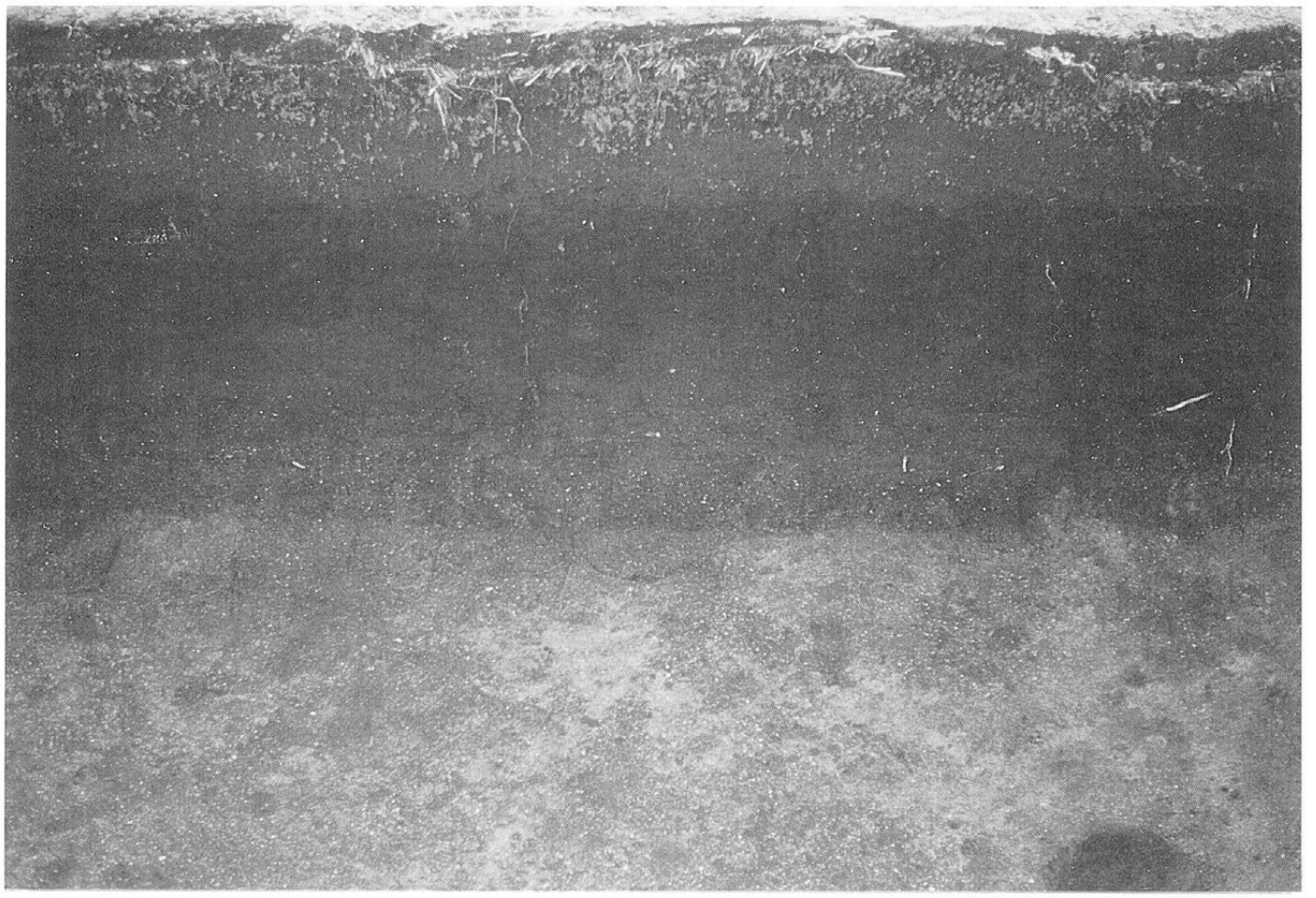


PL.9　SC2Pit内遺物の検出状況



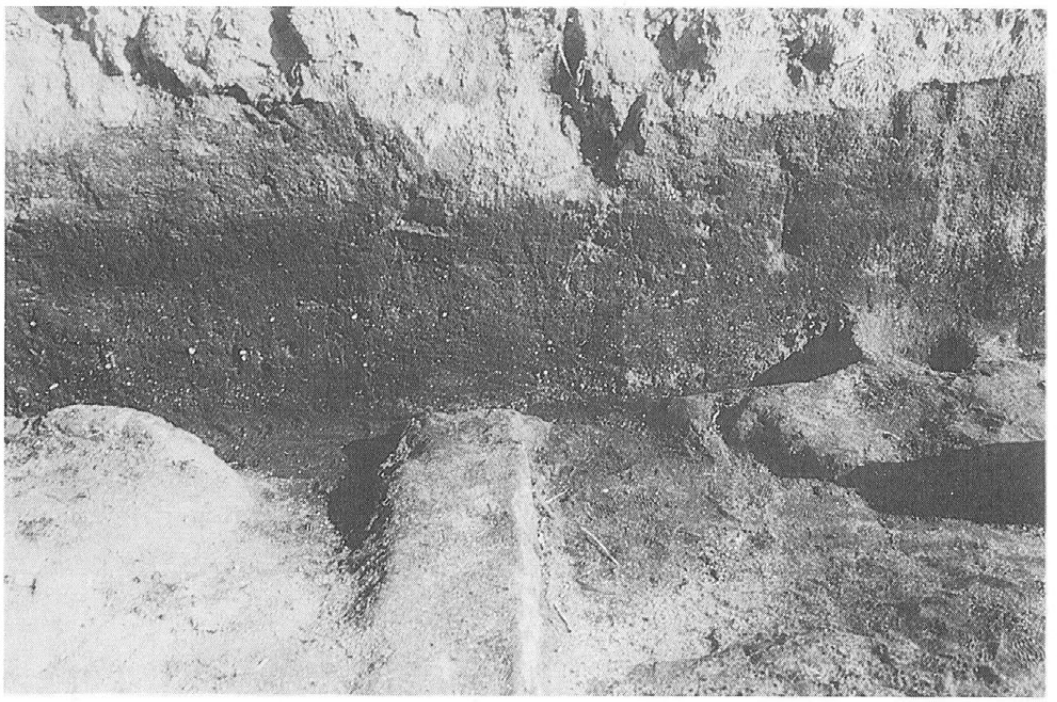


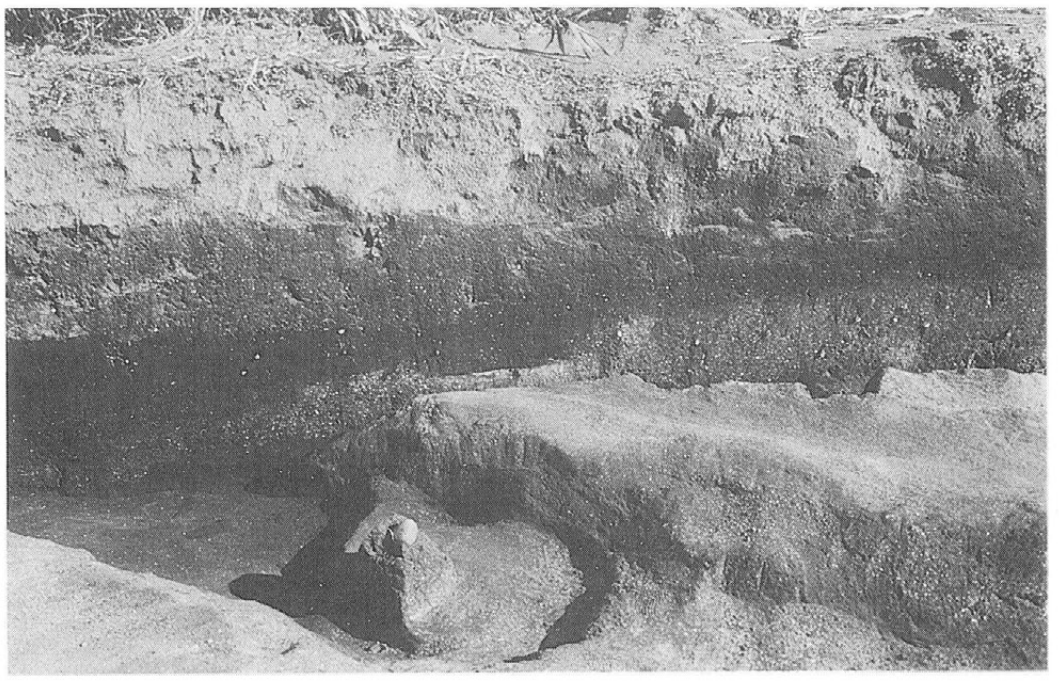
PL.10　SC 2Pitの実測, 同完掘状況 (西より)



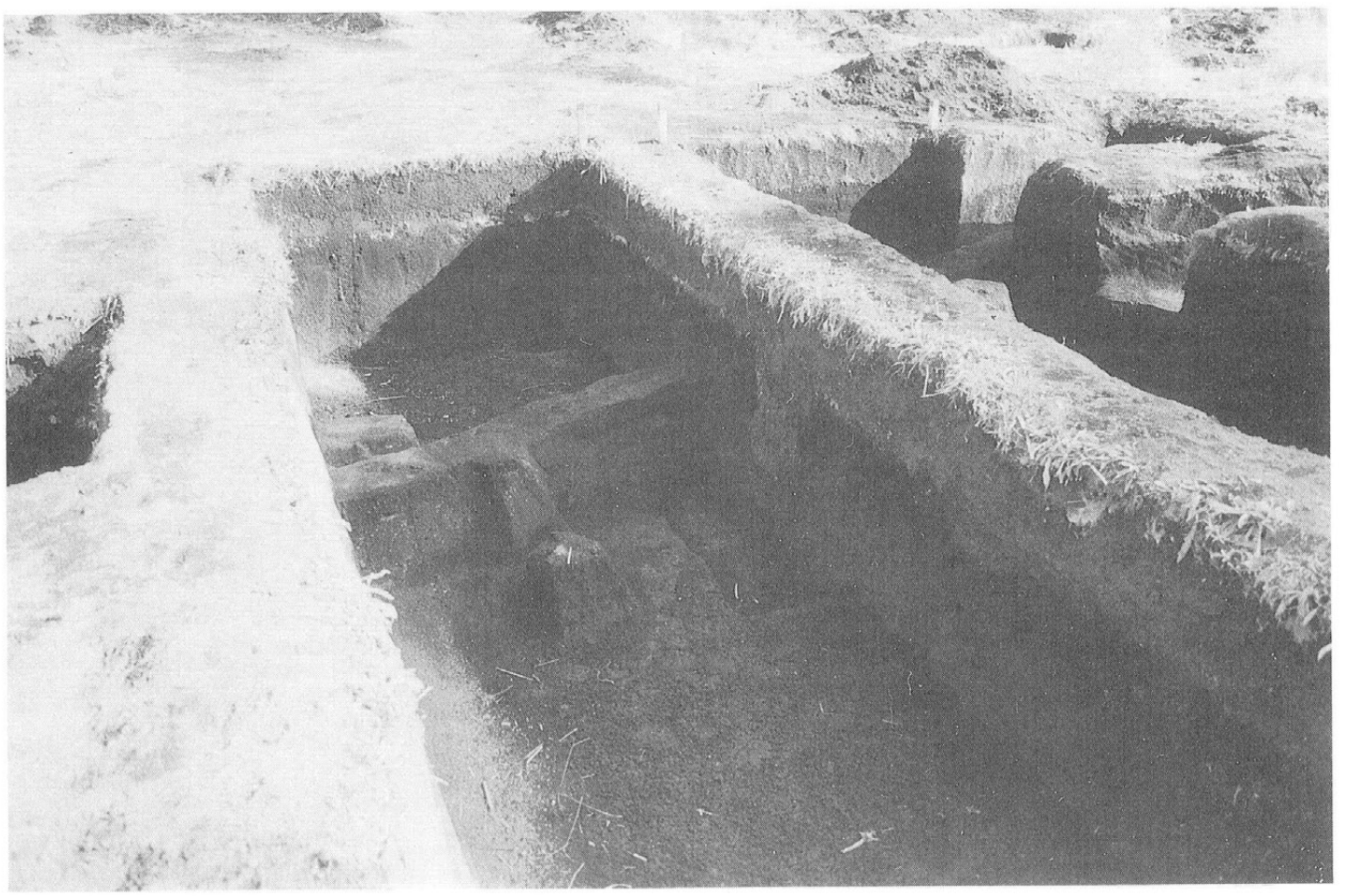
PL.11　SC 3 遺物の出土状況，同Pitの検出状態（北より）

PL.12　SC 3 の完掘状況（上：南より，下：西より）

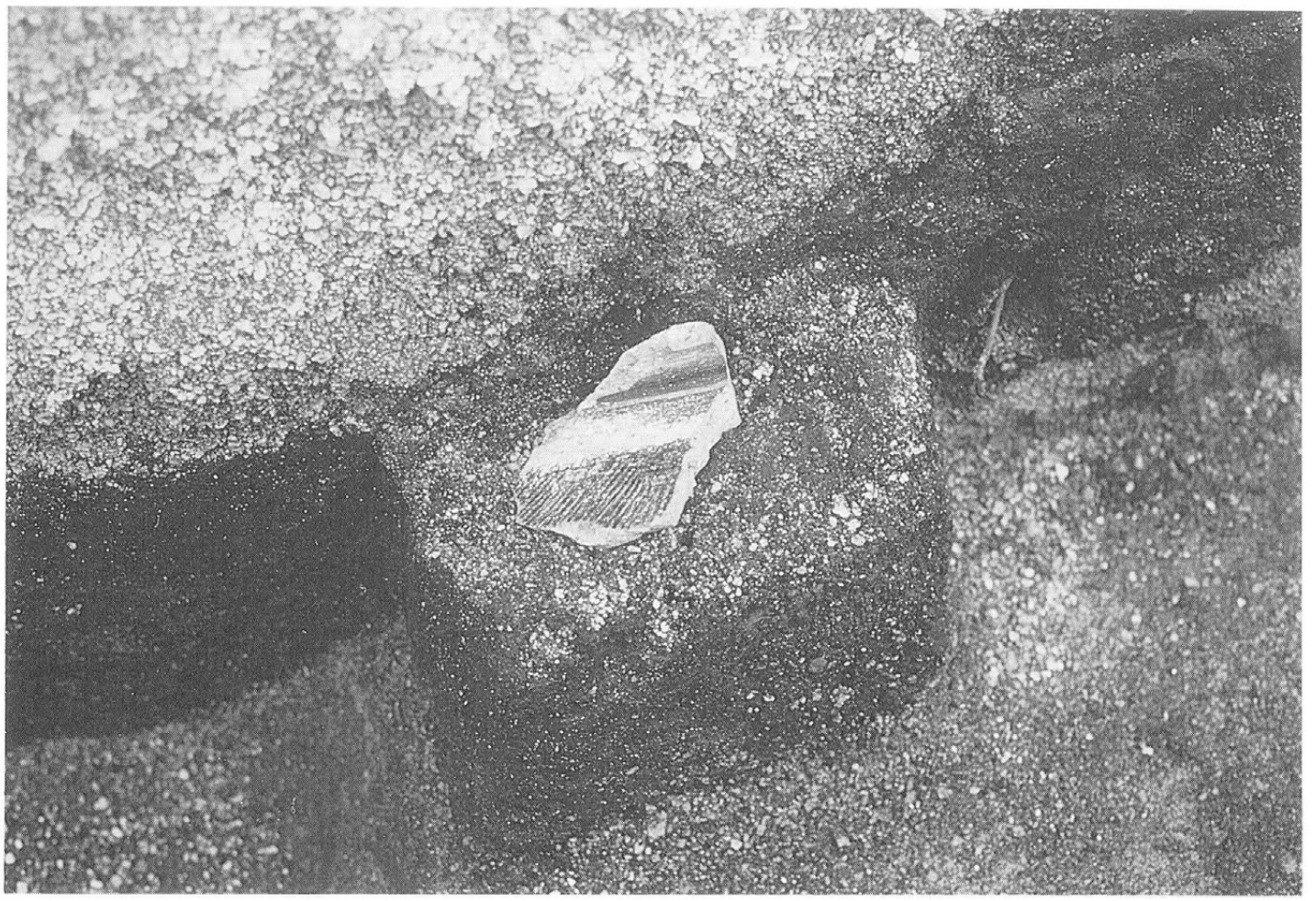


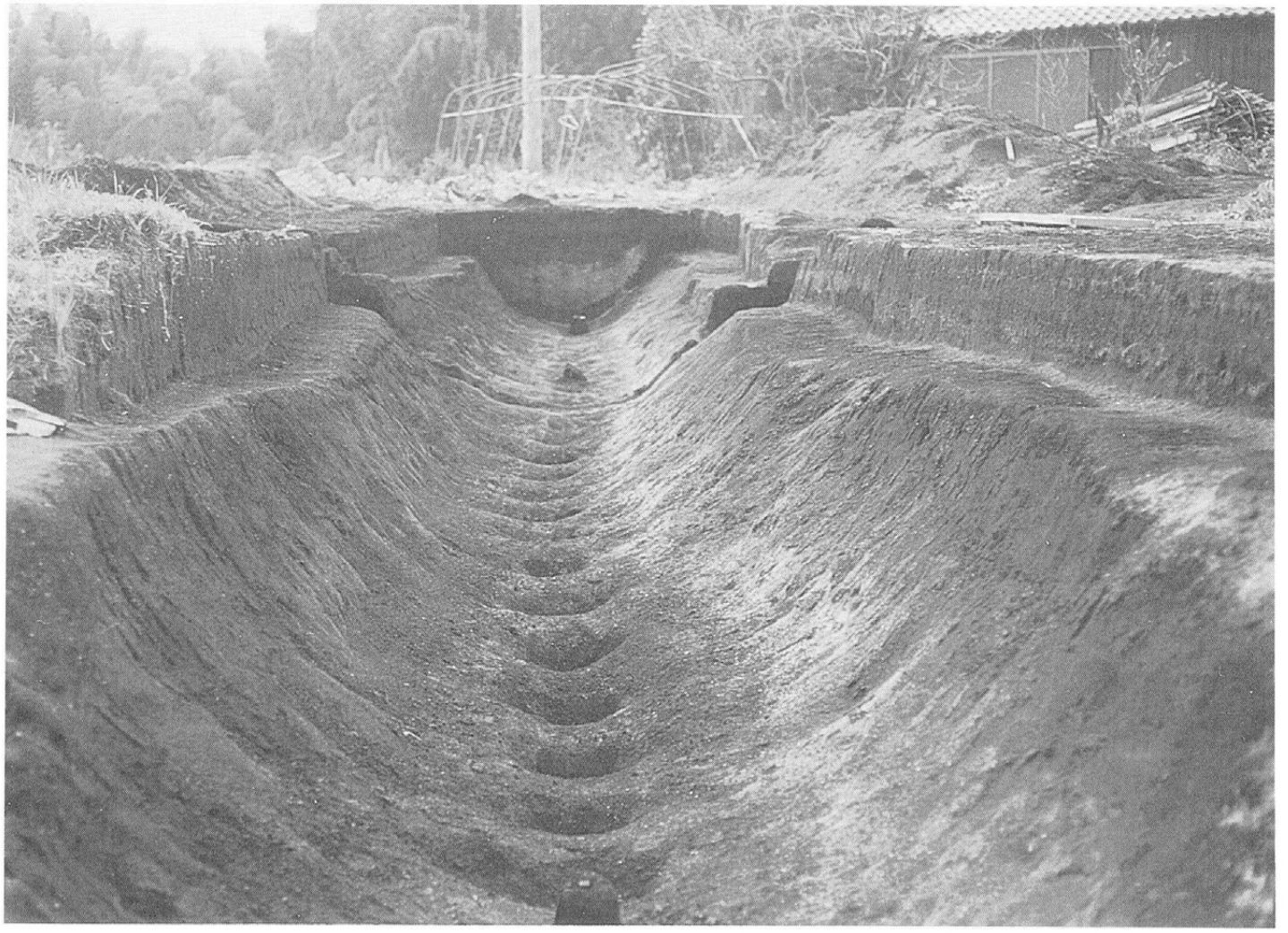


PL.13　SF2(上)，SF5・4土層断面(西より)



PL.14　SF 6・7・8 検出状況(上：西より，下：北西より)





PL.15　SF 1 覆土の 須恵質陶器・Pit列の検出状況（上：南西より，下：北東より）